

---

# howling spring

才切

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

howling spring

### 【Nコード】

N7631T

### 【作者名】

才切

### 【あらすじ】

聖霊因子と呼ばれる力を戦いに使用する、ここではない異世界の絶対王政の国。一代に聖騎士を立てることを伝統としたその国には、唯一無二であるはずの聖騎士が何故か二人居た。白の聖騎士は烏の刻印を持つ青年。黒の聖騎士は荊の刻印を持つ少女。彼らは王都の守護神として日夜練武の日々をおくっていた。

## 前章

## 双園の騎士（前書き）

誰得と言われては弁解のしようもありませんが、精一杯書いていきます。

## 前章 双園の騎士

一步踏み込み、鎧が音を立てた。

一步踏み出し、劍鞘が音を立てた。

二つの音は一つに収束していく。

黒衣の少女が謳う。

「我——汝が選びし聖戦を契る騎士。

我——汝が風見し十六夜を明く使徒。

我——汝が越えし時を導く先驅者。白日の許、いざ参らん」

白衣の少年が詠う。

「我ら——汝らが選びし聖戦を契る双劍の騎士。

我ら——汝らが風見し十六夜を明く双園の使徒。

我ら——汝らが越えし相剋の時を導く双郷の先驅者。——二つの時が見えし白昼の許、いざ参らん」

黒衣の少女の目には悦びが、白衣の少年の目には歡喜が浮かぶ。  
二人は口を揃えて言い放った。

「「定め——彼の世祖、ここに誓約する」」

そうして白黒は交錯した。

高い位置から男は柵に凭れて下界を見下ろす。劍戟の音は、距

離が遠くとも響いてきた。

「どうか、両者とも御武運を」

笑みと嘲りを含んだ口調は、歓声にかき消された。

ある場所では、玉座に座する老齡の男が二つの衝突を見ていた。男の背後に構えていた青年は面を上げる。表情を一片も動かさずに彼は示唆した。

「…遂に始まりましたね、殿下」

「そうだね」

穏やかな口調で応じるのは、玉座に座る好々爺とした雰囲気の人。  
老人。

「一人が勝てば歴代初の女の聖騎士。もう一人が勝てば歴代初の聖職家からの聖騎士。……次世代の聖騎士はどちらだと思いませんか？」

青年の問いかけに、やはり男は穏やかに笑みを含んだ口調で

「どちらが勝ってもおかしくはないよ」

「…ええ。見る限り二方の力は対等のようにです。施術剣を使用しているとはいえ流石、聖騎士候補といったところでしょうか…」

「けれど、時間は無限ではない」

顎鬚を撫でながら、戴冠する王は諭す。

さらりと口に出した言葉でも、男が経てきた重みが蓄えられていた。王者の影人は賛同する。

「私達に出来るのは彼らの戦いを見守ることだけですから」

「それで充分だよ」

「殿下は、どちらに勝って欲しいのですか？」

「さあねえ」

曖昧な返答。青年はやはり眉一つ動かさない。

…途端、闘技場に鳴り響くのは甲高い金属音。

王の従者は静かに告げた。

「――勝負がついたようです」

## 第一話 青年と少女

> i 2 9 9 5 6 — 2 3 4 3 <

「アルフー、アールーフー」

どこからか、誰かが誰かを呼ぶ声がする。

「アルフレドってばー、いい加減に出てきてよー」

声の元は庭園に居た。

白い花が咲き乱れる美しく広大な庭園。両側には渡り廊下が設けられており、きちんと設備された貴族の敷地内だということは明白だった。

白い庭園は昼の光を浴びて燦然と輝く。その中心に、対照的な黒点が在った。

黒点は女性だ。年頃は少女とも言える。男物の黒い服を身に纏い、体の要所に簡易鎧を身に着けている。腰には革ベルトで吊られた、意匠の凝った剣が插されていた。

彼女は肩上で切られた特徴的な赤毛を掻き上げて、溜息を一つ。

——もう、どこ行つたのよ……

彼女がここにいる目的はただ一つ。

「アルフー、…いい加減出て来いこのサボり魔！」

苛ただしげに叫ぶと、彼女の耳は一つの音を聴いた。

——…くす…くすくす………

「アルフー！」

「いやあ、もう永遠に見つけてくれないかと思ったよ」

笑みを含んだ声は、黒衣の少女の上方から聴こえた。渡り廊下の屋根の上だ。

一息溜め、声の主は女性の目の前に降り立つ。

「お呼びですか？ 癩癩持ちのヴィナヘイムさん」

膝を着き、大仰に頭を垂れたのは白衣の男。

男の着ている騎士の正装は白く、白銀の髪は光沢を孕み、庭園に咲き乱れる花と同化する。

彼は蒼い瞳を細め、腰に手を当てて憤慨する黒衣の人物へと向けた。

「ふっざけんなっ！ 呼ばれてるって分かってるんなら早く出てきなさいよ！」

「一つ失敬。怒鳴り散らすことは人を呼ぶとは言わないよ」

「腹立つなあーもう。相変わらずっ！」

地団駄を踏む女性、ヴィナヘイムは青年に背を向けて駆けて行く。

当然のようにアルフレドも彼女の後を追いかけるのは、もはや彼にとっての習慣だ。

「ヴィナ、今日は何の用だったの？」

「陛下が呼んでるの。どうせまたアルフの頭の螺子ねじが緩くて怒られるのよ。私までねっ」

「…また、って…僕はただ一度も陛下の折檻を受けたことはないんだけどね」

「立ちながら寝るアンタは覚えてないだけよ」

——変な理屈だなあ……

苦笑混じりに思いながら、アルフレドは先に行くヴィナヘイムの腰元を見た。

やや凹凸の足りない腰元からは鋭い剣鞘が下げられている。細かい紋章の彫られた、誰でも一目で業物と分かる細身の武器。術の依代ともなる施術剣だ。

娘子とも言える年頃の彼女には不釣り合いな代物であり、同様にアルフレドの背にも、紋章の入った施術剣の長剣が背負われている。

互いの剣は意匠が似通っており、雌雄剣であることを窺わせ



る。

二人は庭園の渡り回廊を抜け、王宮へと歩を進めた。

豪華な造りは見えるものを圧倒するが、日常的に王宮に立ち入る彼らにとってはもう慣れてしまった光景だ。

一際大きな扉の前で、足は止まる。

腰を折って両番の扉を開ける近衛兵を通り過ぎ、壮観な空間の中央を見やる。

アルフレドとヴィナヘイムは同時に傳かしずき、謁見の間で対峙した。アルフレドは面を伏せたままに告げる。

「申し訳ありません。遅参をご容赦下さい。陛下」

「いいや。構わないよ。面を上げなさい」

ゆったりとした声音での返事は前方から。

玉座に座りなおして、老齡の男は頬杖を着いた。言われた通りに二人は顔を上げる。

「対の聖騎士、腕は錆びていないかな？」

「は、僭越ながら精進致しております」

「同じく。力足らずではありますが……」

共に誠意の込もった声音で応じる。

彼らの様子を直に見、満足そうに王は頷いた。

「ならばいいさ。……君たちには期待しているんだ」

「光栄の極みです」

恭しく割礼し、次の言葉を待つ。

王はやはり満足げに一つの近状を伝えた。

「諸国が我が国土の鉦山を狙いに遠征しに来るといふ噂が密偵から届いた。かなり正確な情報だそうでね……専もっぱらの防衛戦線になるだろうが、近いうちに戦が始まるよ。君たちの役割を忘れないようにしてくれ」

「「陛下の望むままに」」

輪唱は王室に響く。

二人は同時に剣を引き抜き、眼前に立てた。

「…ほら、結局現状確認だけだっただろう？」

「どうかしらね」

再び庭園に舞い戻ってきたアルフレドとヴィナヘイムは噴水の前で腰掛けた。噴水の中では透明な水で溢れ返り、水面は穏やかな空を映す。

最初に口を開きぽつりと呟いたのは、膝を抱えて座るヴィナヘイムだった。

「…戦が、始まるってホントかな？」

「今期に入ってから初めてだね」

「……うん」

どこか覇氣のない返事。

アルフレドは知っている。彼女の父親は戦で亡くなったのだ。そして、彼女の家族が断絶した元凶も戦にある。

自分が参加しない戦と言えど、彼女は戦に関わる者の心境が手に取るように分かるのだ。それを彼女の優しさと捉えるならばまだしも、弱さと取るのはあまりに身勝手というものだろう。

そもそも、アルフレドには戦について抗弁を垂れる権限など端から無い。

だからだろうか、結論は一つに収束していく。

「ヴィナ、僕たちは僕たちの出来ることをしないと」

「……うん。そだね」

少し哀しげに笑って、ヴィナヘイムは立ち上がった。

次の表情の切り替えは早く、浮かぶのは先程までの悲しみも曇りも一片もない表情。

「そうと決まれば特訓特訓！ 今日こそはアルフを打ちのめして叩き潰して這わせて靴底を舐めさせてやるわ！」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ」

婦女らしかぬ暴言にも、青年は好印象で受ける。

元氣を取り戻したらしいヴィナヘイムは、赤髪を掻き上げてわざとらしく不敵に微笑んでみせた。

無理に倣岸不遜を装う勝気な態度が彼女の氣遣いだとしても、青年には氣づかないふりをして支えれば充分だ。

——そうこなくっちゃあな。

青年も立ち上がり、意氣を込めるとすぐに彼女の後を追った。

豊かな鉱山を孕む中小国、エンシエント。

戦の歴史が長い鉱山国には、一つの伝統があった。

一代に一人と決められた聖騎士は、来るべき聖戦に赴く者。

聖騎士——アルフレド・ハンデッド・フェイルコール

聖騎士——ヴィナヘイム・ハンデッド・ベイカー

本来ならば在ってはならない対極の騎士として、人々は彼等を対の聖騎士と呼んだ。

## 第二話 聖霊の能手

場所は修練場。

士官学校の生徒が主に利用する屋内研修場の一つでは、暴力的な音が絶えない。

広い武闘場の中央に仁王立ちになるのは、一人の黒い少女。

「――次っ！」

鋭い叱責に押され、一人の少年が前に出た。対峙する黒衣の娘は眉の陰を濃くする。

「腰が引けてる、足運びがなってない、顎を引けっ！」

再度の怒声で怯んだ少年の脇腹を、踏み込みと同時に突く。

施術剣でもない、手持ち無沙汰な木の棒で攻撃を受けたというのに、相手は豪快に飛び転がった後に胃液を吐いた。同じようにのたうち回って倒れこむ武装制服姿の少年たちが、少なくとも総勢十数人は床を舐めている。

凜とした声は容赦なく響き渡る。

「――はい次っ！」

「ヴィナー、頑張りすぎじゃないの？」

ゆるく言ったのは、床に伏す男たちの背を叩くアルフレッドだった。

横目で青年を見ただけで、ヴィナヘイムはその場から一步も動かない。

「戦は真近いくさなのよ、アルフも偶にはゆるゆるの危機管理を締め直しなさいな」

「戦真近の状態のここで殉職者を出すつもり？　いくら加護施術服を着ててもきついってこれは」

「何よ、ちょっと倒されたくらいで：貴方たちも悔しかったら私を倒してみなさいよ」

言い放ち、床に伏す少年たちを見下す。対する少年たちは所在無  
さげに目線を泳がすだけだ。

青年は煽るように言う。

「ああ、怖い怖い。鬼教官ってかんじ」

「鬼でも悪魔でも鬼畜でもいいの。戦は待ってくれないの。私を  
倒して踏みつけるくらいの気概がないと戦場は生き残れないの」

「まあ、そうだけどね」

アルフレドは、だとしても同年代の少女に体よくあしらわれる彼  
らは、かなり自尊心がずたずたになっていることだろうと思う。

ただ、ヴィナヘームに悪気はない。

彼女は彼らに、厳しさを乗り越える強さを持たせるために立ち  
はだかっているだけだ。現に、彼女を実力で捻じ伏せることが出来る  
者が、もし仮にでも現れたら、彼女は素直に負けを認めて膝を屈す  
るだろう。

——ま、そんなこと未来永劫ありえないんだけどね。

アルフレド同様、ヴィナヘームは聖剣に選ばれた強者だ。剣技  
で彼女を負かすことが出来るのなら、同じ聖騎士である青年しか  
有り得ない。有り得てはいけないのだ。

——何時か負かしてやりたいよなあ。

聖騎士同士の二人の戦いは、大概是引き分けて幕を降ろす。

両者とも決着がつかないままに決闘を続け、捨て身の一撃で  
互いに失神したこともある程なのだ。次世代の聖騎士を決するとい  
う闘技大会でも、彼らは決勝戦で引き分けた。顕著な因縁だ。

だからこそ二人は誓い合った。

自分は誰にも負けない。自分も誰にも負けないと。それは対と  
なる聖騎士を打ち倒すまで、何者にも侵されない絶対的な力を持ち  
続けるという約束。

そうして二人は止まれなくなった。躊躇など許されない、鍛錬  
の積み重ねの道に入ったのだ。

——女の子なんだから、もうちょっと他のことに興味持ってもい

いのにな…

今もアルフレドは、ひたすらに研鑽を積む少女を、善しとも悪しとも出来ないでいる。

ヴィナヘイムは今か今かと挑戦者を待ち受けていたが、結局は新たな犠牲者が出る前に終業の鐘が鳴った。

「何だ…もう終わりなんだ。じゃあしょうがないね。今日のところは解散！ お疲れ様でした。…あ、それから、私の攻撃受けた人は、今日一日は何も食べちゃ駄目だよ。吐くから」

黒衣を翻し、少女は出入り口に向かった。

制服姿の少年たちも緩慢に起き上がり、蒼い顔で帰り支度を始める。

「ヴィナ、この後は？」

彼女の後を追い駆けながら、青年は問う。

「少し弓部隊の方も見ておきたいな…あそこは女の子が多いし」  
かつての学び舎の廊下を歩み進む、彼らの足取りには迷いがない。

数年前まで慣れ親しんだ校舎なのだから、当然と言えば当然だ。年上のアルフレドはともかく、本来ならばまだ在学している年齢の筈のヴィナヘイムは、聖騎士となったことで在学していられなくなった身だ。

「クラリスがね。余った予算の関係で、新しい施術具が買えたんだって喜んでたんだよね…」

「余った予算…？ ヴィナが無償で寄付した資金の間違いだろう？」

「あはは…バレてたか」

赤髪に指を絡ませながら、頭を搔く。

「…弓部隊に限っては、防具に回せる予算が限られてるんだよ。そういうの、殆ど前衛にいつちやうから。基本的には遠距離攻撃用の『貫通』の術ばかりがかけられる」

「弓兵は力任せじゃ駄目だからね。僕とかは絶対に無理だ」

「私だって無理だよ。加速と術に頼ってる部分が大きいし…」  
ヴィナヘイムに限っては、女性だという事実は戦闘においての確執的な不利に直結する。

ただ、女性だと意識させない戦い方が、彼女の持ち味でもあったのだが。

「僕は依代よりも身体に頼ってる部分が大きいよ」

「それはそれで負荷が掛かるから、程々にしてよね」

「はいはい。分かってるよ」

「素直でよろしい」

悪戯に微笑み、ヴィナヘイムは窓の外へと視線を向けた。

士官学校は岡の上に建っている。俯瞰できる街は夕暮れに染まっていた。斜光に半面を染める少女は呟く。

「…どうして聖騎士は、戦に出れないんだろうね…」

途方もない呟きだ。返す言葉は至極当然の答え。

「僕たちが出たら、国の威信は死活問題だ」

「うん。でも何だかな…」

少女は青年の目を真っ直ぐに見つめ、告げた。

「…我ら、汝らが越えし相剋の時を導く双郷の先駆者」

継ぐのは、青年の声。

「…二つの時が見えし白昼の許、いざ参らん」

暫くの沈黙の後、アルフレドはヴィナヘイムの髪を撫でた。

「よしよし、湿気こんだ顔しないの。元気だけがお前の取り得じやあなかったのかな？」

「酷いっ！ 他にも取り得あるもん」

「例えば？」

顎に手を当てて思案する。

「うーん…打たれ強いよ！」

ひらめいたような彼女の言葉に、青年は思わず噴き出す。

「ふ…あははは…そう来たか！」

「何よう！ コレって結構重要な潜在能力なのよ！？」

「…あー、可笑し…うん。そうだね…違うない」

「あ、今馬鹿にしたな！ アルフレドの分際で！」

学び舎の廊下を走り、二人は追い駆けあったままに別館の修練場へと雪崩れ込んだ。<sup>なだ</sup>

屋内に設えられた細長い空間には、弓矢を構えた生徒や指導者が数人。

その内の一人が、走り回る二人を見て溜息を吐いた。

「——おい、その聖騎士二人！ 武闘場で走るな！」

弓技は、極度の集中力と緊張感を保ち続ける必要がある。

幾分か弓の精度があがり、施術弓の性能が向上した現在でもそれは変わらず、やはり弓兵は選ばれた者のみが勤まる役割と言えるだろう。

だからだろうか、弓兵には几帳面だったり、人より繊細で些細なことで集中力を欠く者もいる。

無論、戦場で物音や声、視界の騒がしさを言い訳に使えるわけもなく、辺り一帯がいかなる状況であっても、冷静に矢を放てる者もいる。素質の問題もあるが、それでこそ名手だと思う。

……だが、練習のときくらいは、気を練って集中して行いたいものだ。

弦を構え、模擬矢をつがえたところで、思わぬ闖入者が現れた。

男物の黒い服を着る赤毛の少女、白い簡易騎士服を着る銀髪の青年。——心当たりがあり過ぎる。

「…おい、その聖騎士二人！ 武闘場で走るな！」

叫んだのは、胸当てにやや裾の長い衣服。弓兵用の武官制服を



着た壮年の女性だった。

後頭部できつく結わえた長髪の所為か、やや吊りあがった目つきの所為か、第一に厳しい女官という印象を与える。

女性を見止めるなり、ヴィナヘイムは手を振った。

「あー、ストラトス教官！ お久しぶりです！」

「教官。御元氣そうで何よりです」

「おうおう。お前等仮にも聖騎士なんだから、もうちょっと威厳を持て威厳を！」

教官と呼ばれた女性は、額に青筋でも立てそうな勢いで捲し立てる。対し、乱入してきた男女は物怖じせずに

「教官、十八歳の乙女に言う台詞じゃないですよー」

「同じく。二十歳の青年に言う台詞でもないですね」

――……これである。

「……そうだな。私はお前たちを乙女や青年として見たことは一度もない」

切り口の鮮やかな言い草に、二人は顔を見合わせた。

「「ひどっ」」

「何が酷いものか。用がないならさっさと帰れ」

女教官は言って、再び弓を的に向けてつがえ

「ありますよ。用事。新しい施術具を見せてもらいに来たんです」  
けれど、アルフレドの静止の声に手を止めた。

「弓兵でもないお前たちには管轄外だろうが？」

「私達たちにとってはそうでもないんですよねー、コレが」

「今後の参考にさせて欲しいんです。勝手を言ってますみません」

二人は素直に頭を下げた。

武闘場に残っていた士官学生たちは、思わぬ来訪者の思わぬ行動に、耳打ちし合った。戦士の卵である生徒たちにとって騎士の存在は羨望の塊なのだ。

ストラトスは暫く頭を抱えた後に、素早く生徒たちに指示を出した。

「——もういい。おい、お前たちはもう帰って良いぞ。フェイルコール、ベイカー、着いて来い」

呼ばれた二人は大人しく教官の背を追う。

弓技専用の武闘場を抜け、騎士と教官の計三人は修練場の棟の裏手に出た。

士官学校の敷地は広く、野外演習用に山や野も幾つか所有している。また卒業後は国立騎士団の団員になる者が殆どであり、両者は浅からぬ関係だ。非常時には学徒動員されることもあり、城の比較的近くに校舎はある。

彼らが今たつ場所からも、王城が見て取れた。

建物の裏手には倉がある。武器庫だ。入り口には人除けの術文が刻まれている。しかし力は弱いらしく、只のお守りか牽制に近いものだということは明白だ。

今、アルフレドとヴィナヘイムが携えている刀剣に比べれば、そんなものは足元にも及ばない。

聖騎士の持つ剣は、王室刀鍛冶師が歴代の聖剣を再練成して打った正真の施術剣。通常の武器などでは相手に不足がありすぎて話にならない。その分、これらの名剣は持ち手を選ぶのだが。

武器庫の前に立った女教官は、懷から取り出した鍵束を手繰り、対となる術文の彫られた鍵を差し込んだ。

押し開かれた倉庫の中は埃臭い。

アルフレドは顔を背けて軽く咳き込んだ。

「：教官、偶には倉庫も掃除した方が良いと思います」

「アルフに同感」

「この手の類のものは随分と長い間使っていないくて錆付いているからな。最後にここを掃除した時の記憶などない」

言い、壮年の女性は薄暗い倉庫の中へと進む。

武器庫の中は思ったよりも広い。壁には甲冑の類が立て掛けられており、布に包まれて棚に修められているのはおそらくは施術の為された弓矢だろう。

ヴィナヘイムは自由に武装を見て回りながら、幾つかの弓矢に眼を通していく。…と、流れていた視線はとある弓弦でぴたりと止まった。

あ——れ、この紋章…施術文…どこかで…

すぐに合点がいった。

「これ、御三家のハイト家の紋章入ってるじゃないですか!」

「…ああそれか。ここの卒業生でな、ハイト家の前当主が使っていた物だ。国立騎士団に入団される際に記念に置いて行ったんだよ。今でも使い物になるだろうが、使い手を選ぶ。触るんじゃないぞ」  
論したのと同時にヴィナヘイムは弓を掴んで、まじまじと凝った意匠を見つめていた。

本人に自覚はない。驚いたのは女教官だ。

「…おい、まさか。冗談だろう…?」

「おお、ヴィナ凄いな。家宝級の施術弓を素手で呆気なく」

「ふふん。見たか。私には大抵の施術制限は効かないのよ」

教官、ストラトスは腕を組む。

「…噂は本当だったということか。…一体どういう理屈だ? これまでの主席の卒業生でも、誰もが指一本触れられなかった代物だぞ。それは」

驚愕と感嘆の入り混じった、普段冷静な指導者からは滅多に聴けないたどたどしい言い草。

ヴィナヘイムは弓だけで矢を構える真似をしながら、憶測で答える。

「たぶん刻印によるものじゃないですかね。コレは特別製なんです。適合が合わなければ彫っただけで死ぬとも言われました」

言いながら、彼女は長袖を捲り上げた。

露になる腕には、王家の紋章と似通った刺青があった。彼女の腕を蛇の如く締め付ける、青黒い集合体。棘と華を連想させる模様。刻印と呼んだのはこの刺青だ。

「聖剣は存在自体が依代ですが、力の扱いは難しいんです。皇剣

や天剣なんて以ての外です。：だから、私もアルフも自分自体が“依代の依代”にならないと、力の拡散を防げなくて……」

ヴィナヘイムが言った『力』――霊体、地脈、魔術など国々で呼び方は違うが、祖国エンシェントでは主に聖霊因子と呼ぶ。

大気や大地、海原、：現存する全ての自然産物に含まれているというこれらは、収束することで時に大きな力を得ることが出来る。大きな力を一点に集めて効率的に利用する為に、純粋な自然物から作られる依代を使うのだ。ただ、強力で純粋な聖霊因子は、無機物の枠に捕らえきれないこともある。

アルフレドは苦笑いしながら自らの肩を押さえた。

「僕も背中ですけど刻印がありますよ。：いやあ、アレは痛かったなあ……」

「……しかし、王家秘伝の刻印だろう……よく適合したな」

施術文・刻印・呪痕の類は、相性が悪いだけで身体を蝕み生き物を死に至らしめる。だからこそ命の無い物体に彫り込んでいるというのに、自らの意志で身体に残すなど正気の沙汰ではない。

「うーん、その時は運が悪かったんだーって思うことにしてたんです。そもそも聖剣が扱えないんじゃないや聖騎士って名乗れないです……」

少女に青年も同調する。

「……昔ほど、聖霊因子と相性が良い人間なんていませんからね。覚悟はしていましたけれど……。ヴィナは割りとそうでもありませんでしたが、僕なんかは思い切り聖剣に跳ね除けられました」

そう、この手の由緒正しい施術武器は使い手を選ぶ。

人は野を下り街で生活するようになった。自然との関わりよりも人同士の関わりを重視する世になってしまった。本来ならば人体の中にも満ちているはずの聖霊因子は、近年では減少し続けていると名のある賢者は語る。

漁師・狩人の類はまだ聖霊因子を体に多く宿している者が多いとかで、時に彼らは優秀な施術武器の使い手になるのだが、力は有

り余るのに身は廃れて、山賊や海賊となって諸国民を悩ませる場合もある。

「皮肉なものだな…」

ストラトスは呟き、ヴィナヘイムが持つ弓へと眼を向けた。

矢もないのに指を当て打つふりをしていた少女は、唐突に引ききった空弓を放つ所作をした。

「ずばーんっ！」

間の抜けた声と同時に、倉庫の中に風が巻き起こり三人の髪を飛ばす。回った風はやがて僅かに華の香りを漂わせて終息した。

アルフレドは賞賛の声を洩らす。

「……これは凄い」

「力は拡散してるけど、うん。中々だね。ちゃんとした矢を持つてすれば十里は飛ぶよ」

「……………」

再度呆気にとられていた女教官は、額を掌で覆った。

何と言うことだろうか。まだ少女とも言える年頃の彼女がこんなにも力を持て余している事実。

——やはり、皮肉だ。

聖騎士の名に恥じない二人の幼い王の従者。

先が思いやられると同時に、彼女は確信もしていた。

彼らの先にあるのは、間違いなく修羅の道程だと。

### 第三話 北からの使者

聖騎士は、国の象徴だ。

古来は来るべき聖戦のためと謳われてきたが、現在は王と王都の守護のためだけに存在する。

聖騎士は唯一のみに許された伝家の宝刀、聖剣を与えられる。また、天剣・皇剣と呼ばれる神具を扱う権利を有することができる。

国中の猛者が集まり、傭兵、国立騎士団は勿論のこと、総当たり戦で士官学校からも武芸を嗜む者は全て篩ふるいに掛けられていく。

そうして、本戦の闘技大会に出るのは僅か十数人。

年齢はある程度ばらついていて、けれど誰も彼もが強者としての自信に満ち溢れた眼をしている。

ただ、少女一人を除いて。

——どうしよう……どうしよう……怖い……

少女の心中には焦燥しかない。

——怪我したら……怪我負わせたらどうしよう……

本戦である闘技大会では武器の刃潰しが義務付けられているものの、施術武器の使用許可は下りる。試合の内容も苛烈を極めるのだ。今迄は士官学校の同級生や同性を相手にしていたから良かった。

けれど、勝ち残った以上は本戦枠に自分の名前が載るのは必然であり。

——どうしよう……

辞退してしまおうか。

「ヴィナヘイム・ベイカーさん？」

「……はい？」

思わず泣く寸前の子供のような声が出た。

呼ばれて振り向いた先には、白い青年がいた。自分より僅かに

年上だろうか。自分と同じで士官学校の制服を着ている。柔らかなうな物腰だが長身で、優男という印象は受けない。

「へえ。僕より年下なんだ、負けられないね」

「貴方は……」

彼は微笑んで、囁きかけた。

「決勝戦で待ってるよ」

「……?」

「――折角なんだ。愉しもうよ」

「……そんなことあったっけ?」

青年の問いかけに、パンを千切って口に運んでいた少女の手が止まった。

「あったあった。やつぱりアルフは立ちながら寝てるのよ。きつとどこでも寝れるんだわ」

「僕はベッド要らずかい?」

「手間が省けて良いこと尽くしじゃないの」

「ちよつと人権を主張したいなあ、それ」

アルフレドはスープを冷ましながら、少しずつ口に含む。

「……にしても、うーん。あの日のことはちゃんと覚えてるのになあ……ヴィナ、即席で昔話作ってない?」

「よしてよ。嘘偽りない実話でーす」

手際よくフォークでサラダを取り分けていく。食事の作法は二人とも良かったが、ヴィナヘイムの方は面倒臭さからか、食事の要領をある程度簡略化していた。

二人が座す場所は食堂。国立騎士団本拠地の敷地内にある、団員専用の食事所だ。

朝昼夜と、食事の時間は決められているが各々の団員の都合もあるので、全員がこの場で同じ時間に食事を摂るということはまずない。

今現在の時間帯は昼過ぎ。昼食にしてはやや遅い時間帯と言えるだろう。けれど食堂にはまだまだ人気が多く、混雑しては居ないものの多少の騒がしさはある。

聖騎士と呼ばれる彼等だが、地位以外は他の国立騎士団の団員と変わらない生活を送っている。

給与は一般団員とは桁違いに多いのだが、ヴィナヘイムは殆どを士官学校に寄付しているしアルフレドも国教総本山に寄付しているので、二人の私生活は至って質素だ。

むしろ、贅沢に余念がない貴族に比べればみすばらしくもあるだろう。育ちが弱小貴族のヴィナヘイム。国教に仕える名家として質素儉約こそが美しいと挿げ込まれて育ってきたアルフレド。本人たちはそもそも浪費をする性格ではなかったのだ。

少女は静かに眼礼をし、続いて青年は十字を切った。

「：はい。ごちそうさまでした」

「御馳走様でした」

配膳を片付けようと席を立った所で、ヴィナヘイムはバランスを崩しかける。

振り返った目の前に、胸板と言う名の大きな壁があったのだ。

「うわっ：っ」と

「よう、久しぶりだな。聖騎士！」  
ハンデット

大きな声で豪快に笑うのは中年の男性だ。無精髭やほつれた短髪は粗野な雰囲気醸し出す。逞しい臥体は国立騎士団の団服を纏っていた。

中年男の姿を眼に止めて、彼の名を呼んだのはアルフレドだ。

「：ヒーデリックさん？」

「ようっ」

「あ、お久しぶりです：」

落ちかけた皿を上手く掴まえた少女も、すぐに体勢を直して頭を下げた。

「お、すまねェ。大丈夫かいお嬢さん」



「だ、大丈夫です：お氣遣いなく：ところで：どうしてここに：」

「野暮用だ。もう済んだけどな！ 帰る前にお前らの顔見ておきたくてよ」

広い食堂に男の声はよく響く。何事かと振り返った団員たちは、咄嗟に眼を丸くして顔を伏せるのだった。何処からか潜めた声が聴こえる。

「ヒーデリックさん：ここではちよつと：」

「お、悪イな。んじゃ外出るか！」

配膳を片付けて彼らは中庭へと出た。短く刈り込まれた芝生の、王宮や貴族屋敷に比べたら広さだけが取り得の騎士団らしい庭園だ。そこに三人は立つ。最初に開口したのは、白い青年。

「……改めまして。お久しぶりです。一年ぶりくらいですか？ 一体何時帰ってきてたんです？」

「んあ？ 帰ってきたのは一昨日だが、陛下への挨拶が長引いてなあ！ お陰で騎士団に顔出せたのがついさっきだ」

「いきなりの勅命でしたもんね……」

ヒーデリックと呼ばれた男。――彼はかつて將軍と呼ばれていた。

北の国境の要塞を仕切る將軍は、決まって年に二回、夏と冬の終わりが近付くと王都へ舞い戻ってきた。今回は夏の終わりの使者として参じたのだろう。

ヴィナヘイムは聖騎士になってから彼のことを始めて知ったが、アルフレド曰く、騎士団の中では生きる伝説とも言われる人物なのだという。

何でも、素手で冬熊を倒したとか：敵の矢十本に射られても死ななかったとか：

――いや、怖いから。

どちらにしろ、多少誇張表現が混ざっていることは間違いないさそうだ。

そして、彼は……

「今では將軍職も若造に譲っちまったしなあ！ 寄る年波には敵わねえよ。挙句の果てにはこんな坊主に聖騎士の座を譲っちまうんだからなあ！」

言つて豪快に笑う。その様子に嫉む色はない。

アルフレドやヴィナヘイムに負けた者達の中には、彼らの失脚を望む者も大勢いるというのに。

…そう。彼は聖騎士を選出する闘技大会でアルフレドに敗れている。ヴィナヘイムもその試合は見ていたが、中々の接戦だった。大の男に年若い、まだ二十歳にも満たない少年が立ち向かつていく様は冷や冷やさせられたが、文句のない正々堂々とした試合だった。少し困り顔で青年は頭を下げた。

「いえ…精進します」

「おう！ ガキは素直が一番だ！」

傍目で見ている黒衣の少女には、彼らが親子のようにも映った。青年は頭を上げて首を傾げる。

「それにしても…今回は報告が早かったですね。これも陛下の勅命が関係してるんですか？」

「ああ。それなんだがな。やっぱり奴さんやつしの動きが不穩でな。時期をずらして早めに来た。お前らは聞いたか…戦の……」

「——ええ。もうじき戦が始まると…かなり信憑性のある話だとヴィナヘイムも頷く。

「北から攻めて来るかは分かんねエが、用心するに越したことはねえよ」

唐突にヒーデリックは二人の肩にぶ厚い手を置いた。褐色の瞳が交互にこちらを見据える。

皺の寄った口元を吊り上げて

「お前らも、気を引き締めてな」

「「はい！」」

「良ーい返事だ。…それが聴けただけでもここまで降りてきた甲

斐があるってもんよ」

大男は呟いて、もう一度彼らの肩を叩くと踵を返した。

「…ああ、そうそう。…いいか対の聖騎士。お前らの力は間違はなく国一番なんだから、詰まらん遠巻きの言うことなんざ気にするんじゃねエぞ！ お前らの強さは俺が補償してやらあ！」

無骨な言い草。なのに暖かい心遣い。力強い言葉に、確かに少女と青年は歓びの感情を胸に抱いた。

「…もう帰るのですか？」

「ああ。——事情が事情だ。長居する理由はねエよ」

「…どうか、お気をつけて」

少女はある種の願いを込めて背を見つめた。

## 第四話 夜中の襲撃（上）

夜半に、雑木林に声が木霊する。

「は……っ」

微かな光の筋を残して、螢火の如く消えていく刃筋。

もう一度腰元の緩く湾曲した鞘に刀身を収め、鯉口を掴む。

息を吞んで、刀を抜き払った。

抜刀と同時に散った仄かな光は闇夜に途切れ、飛散する。

「ふうー……」

肺の中の空気を押し出して、少女はまた鞘に刃物を収めた。

——もう、少しなただけど……な。もう少し、早く、鋭く、一点に集中できれば……

闇夜では聖霊因子の流れが見易い。

抜刀と同時に生じる聖剣の因子は光へと形を変えていく。白昼の中だと時にそれは風であったり、衝撃であったり、電撃にも似た緊張感であったりする。

闇夜では因子が生じる熱量を光へと変えるので、肉眼で感じ取ることが出来るのだ。

ヴィナヘイムは腰に吊られた刀剣をベルトごと外して、地面に置く。柔らかな草に包まれて、鞘は半ば埋もれてしまった。

夜露の湿った香りがする。水気を含んだ土の香り。

彼女が最初に剣を持ったのは、記憶も朧げな幼少の頃。

父が戦に征く時だった。

もしものときはこれでお母さんを守れと言われ、渡されたのは短剣<sup>イナ</sup>みたいな、ちっぽけな刃物。施術さえない包丁と見紛うほどの瑣末なもの。

でも、無骨で物騒な代物が、少女にはとても嬉しかった。憧れて

いた父に、認めてもらえた気がしたからだろうか。

短剣は小さな宝物になった。

病弱な母を自分で守るんだと、人一倍大人になった気もした。

子供の手には余る、それだけで人を殺せる物。そんな物を自らの娘に託す父は、今改めて考えると人としてどうなのかなとも思うけれど。

――まあ、もしもの時しか抜いちゃ駄目って言われてたし：

母子は、父の帰りを待った。

ずっと、ずっと、ずっと………ずっと待って、帰ってきたのは父の形見の施術剣だけだった。

母は泣きながら謝った。

ごめんなさい。：母親なのに力がなくてごめんなさい。貴方に私の看病をさせてごめんなさい。私の所為で貧しくてごめんなさい。貴方に満足な食事も教育も与えられなくてごめんなさい。父親を亡くすという悲しみを味あわせてごめんなさい。

あの日は、とても天気良かった。

母も体の調子が珍しく良くて、散歩に出かけた。母は楽しそうに私の手を引いて行った。

――もしくは、元氣そうに、楽しそうに装っていただけか。

海が見える、草原。

風が強かった。高い崖の眼下には白波が弾ける海があった。

『ヴィナ。貴女はこれから貴族の子になるのよ』

『……どうして？』

『お父さんの兄弟を頼って生きなさい。今迄は辛かったけれど、これからは楽しいことがたくさんあるわ』

『：お母さん？』

『ヴィナ、かくれんぼをしましょう』

『：かくれんぼ？』

『そう。好きでしょう？ 貴女はあそこの林まで行って、十だ

け数えなさい。数え終わったら、わたしを探すの』

『うん!』

無邪気なのは、罪だっただろうか。

無知なのは、罰だっただろうか。

『ヴィナヘイム。わたしたちの愛しい子。———どうか、幸せに』

林へと走った私は、

次の瞬間、海へと消える母親の姿と、波の碎ける音を聴いた。

そうして私は叔父の家の養子になった。

弱小貴族で決して裕福な生活は望めなかったが、生活に困ることとはなくなり、士官学校へも通えるようになった。

以前と比べて、無いものが埋まっていく。

——でもね、お母さん。

私には、母親<sup>かぞく</sup>だけがいれば良かったのに……

無いものが埋められていく。そうして父と母が居た筈の隙間は他の誰かが入り込むのだろうか。

——嫌だ。私は忘れない。

決意と共に、少女は剣を取った。

ヴィナヘイムは草むらに腰を下ろす。聖剣を手繰り寄せて刀身を引き抜いた。

現れるのは断層の入った緩い曲線を描く刀身。抜刀術を得手とする彼女の戦法には一番適した形の武器だ。

どんなに意志が高かろうと自覚がなかろうと、彼女の体が女のものである事実は曲げられない。女性の身体は、鍛錬を続けて鍛え、磨きあげていくようには端から出来ていないのだ。

力、速度、筋力……様々な面において劣勢は誤魔化しきれない。

だからこそ、ヴィナヘイムは一本に絞った。

心技体、体はどうにも出来ないのなら、心と技を高めるしかない。無論、出来ることならば身体の基準も上げる。

五体満足で女性にしては長身に産んでくれたことを両親に感謝しながら、彼女が極めたのはごく単純なこと。

一つ目に、戦闘への頭の切り替え。

二つ目に、抜刀術の昇華。

どんな強者でも油断しているときは弱い。逆に、普段戦い方の経験を積んでいない者でも、緊張感を持って身体の反応を鋭くすれば、何人も侮れない。

相手と対峙した瞬間から、もしくは武器に手を置いた瞬間から彼女の思考は戦闘へと切り替わる。

そして、鍛え抜かれた抜刀術と身体の小回りを利用した体術があれば、敵が大の男でも兩人に相手としての不足はない。

年頃の女の子が色目や思い耽りに使う時間を、彼女は精神統一と鍛錬に使い果たした。決して安くはない代償であろうが、得たものも大きい。

即ち、聖騎士の称号。聖剣。……皇剣の専横。王家の刻印。

——なし崩しみたい。

腕を托し上げると現れる、棘と華を模した刺青。もう一人の聖騎士の体にも似たものがある。彼のものはもっと大きく禍々しいが。

「……ふー、帰るかなー」

今日は刀も奮わない。自覚はないが調子が悪いのかもしれない。

ヴィナヘイムも女性である以上はしょうがないことなのだが。

ふと、今日の昼間にあったことを思い出した。

北の将軍…今は副将軍だが、彼の言っていた言葉。

——戦なんて、嫌い。

しかし、立ち向かわなければ大国に呑み込まれる。延々と利益を着服され、きつと苦しい弾圧の中で生きなくてはいけなくなる。

ここ百年、エンシェントは防衛戦しか行っていない。攻め込ん

でくる大国にとって、この中小国の鉾山は宝の山なのだろう。それでも何よりも国民たちの為に、渡していいようにされるわけにはいかないのだ。

——でも、今日は早めに切り上げよう。

気持ちばかり急いても良いことはないのだから。

——何か、アルフが言いそうな台詞……

一人心地に笑みを引き、ヴィナヘイムは林から歩いていく。気を擦り減らす修練の後だった所為か、慢心の所為か、彼女はこの時注意力に欠いていた。

そして、木の上から彼女を見下ろす影にも気がつかない。

変化は突然来た。

揺れる木々が擦れ合う音、重量のある何かが着地した音。

—————！！

咄嗟に振り返って、回る動きで彼女は迷い無く抜刀した。

「——誰っ!？」

鋭い詰問の声。

隠者の首を薙ぐ直前で、刃は止まる。

ぴたりと止まった剣先からは止め処なく聖霊因子が零れ、今か今かと動きの命令を待っている。その気になれば、刃を触れさせずに首を引き千切ることも可能だ。

首を捉えられた相手は、賞賛を込めて口笛を吹いた。

「流石。最年少にして初の女聖騎士。…奇襲にも動じないかあ」  
フードで顔を覆った相手の人相は分からないが、おそらく少年だろう。掠れた声はまだ幼かった。もう一度問いかける。

「…貴方、誰」

「ヴィナヘイム・ハンデット・ベイカー。…自覚してる？ あんたを邪魔に思う人間て結構多いんだよー？」

人の感情を煽る、ふざけた声。

少女は剣の柄を強く握る。同時に聖霊因子の光が弾けた。

「…質問してるのはこっち、いいから答えて」



「あれあれ？ いいのかな？ もう一人の聖騎士…あの宗教家の坊ちゃんがどうなってもいいの？」

ヴィナヘイムは僅かに鼻白んだ。

次に口を突いて出たのは、押し殺した笑声。

「……え？ 何ですって？ どうなってもいいって？ アルフレドが？ …まさか、あいつはあんた達にどうこう出来る程度の間じゃないわ！ 侮辱も甚だしい！」

嘲りを憤怒に変えて、ヴィナヘイムは腕を引いたのと同時に片足で中断蹴りを見舞った。少年は豪快に飛び、けれど受身を取って木の根元に着地した。

獲物に飛び掛る肉食獣のように、齒を剥いて彼は懐の短剣を引き出す。短剣に刻まれた施術文は、以前に見たことのあるもの。

確信を胸に抱く。

——やっぱりね…

「どうせ一人じゃないんでしょう。出てきなさいよ！」

ヴィナヘイムが挑発的に叫ぶと、木の幹の影や枝葉の茂みから人影が現れた。

彼らは幽鬼の如く前進し、少女へと迫る。

——退屈は人を退化させる…か。丁度良い。

「纏めて来なさい。聖騎士を無下に扱ったこと、後悔させてあげる」

#### 第四話 夜中の襲撃（中）

傍目には愉しそうに表情を繕っても、内心でアルフレドは困っていた。

——どうしたものかな……

目の前には短剣を構えた男たちがいる。フードの付いた灰色の外套、見覚えがある気もするが。

——どこでだったかなあ……？ ま、どこでもいいか。

その程度だった。

重要なのは、彼らが眠りに付こうとした自分を襲撃し、自分に刃を向けているということ。

——ああ、腹立つ。

人の睡眠を邪魔するのは、彼の中では五本の指に入る大罪だ。フード姿の来訪者は、アルフレドに刃を向けながら話す。

「お前、ノ、刻 印 ヨコセ」

舌足らずな言葉は、相手が異国民だということを顕著に示す。

「成る程ね。コレが欲しいの？ 遠路はるばる御苦勞様」

端正な顔にうっとりするような満面の笑みを浮かべ、青年は口端を曲げた。

彼の手が、背後の窓のサッシに掛かる。

「————でも、あげないよ」

そのまま彼は後ろに倒れこむようにして、窓から落ちた。

「————！ おいっ！ 待て！」

すぐに侵入者たちは窓に取り付く。：場所は国立騎士団の寮。部屋は三階だ。目下を探ると、闇夜に浮かぶ白銀は何一つ不自由なく、最初からそこに居たかの如く立っている。そしてやはり楽しそうにこちらを見上げていた。

何時から持っていたのだろう。青年の手にはしっかりと長鞘が握られていた。間違いない。聖剣だ。

「クソッ！ あいつ人間か：！？」

唾を吐き捨てながら、躊躇いなくフードの男たちは窓から飛び降りる。

配管を伝いながらやっとの思いで地上まで辿り着く。そこは寮の裏手の空き地だった。

青年は長い剣の鞘を抜き取りながら言う。

「部屋を汚されたら嫌なんだ。だから」

——だから、飛び降りたというのか。

青年は大の男の半身以上はあろうかという長さの刃を月光に照らす。

薄刃で幅が無い直剣だ。特徴的なのはその長さと刀身に直接彫られた施術文だろう。刃が透き通っており、月下で見るその容は美しく恐ろしい程だった。

そして、得物を持つ青年も何かがおかしい。

本能的に、フードの男たちは感じた。：こいつに関わってはいけない、と。

けれど、今更引くことなど出来ようか。刻印と聖剣を持って帰らなくては、彼らの未来はない。

彼らは目配せをして、一挙にアルフレドに飛び掛った。

「——はあっ！」

裂帛の気合。

対する聖騎士は長剣をだらしなく下げているだけだ。

> i 3 0 0 0 6 — 2 3 4 3 <

「————…」

その時彼らは確かに見た。青年の嘲笑を。口元を横倒しの三日

月にして笑う、心底愉しくてしょうがないという眼を。

上段で斬りかかった男は、呆気なく下からの袈裟斬りに散った。驚きに見開かれた眼が反転して、次の刺客が襲い掛かってくる。アルフレドは袈裟斬りで上がった剣の慣性を封じ曲げ、男の肩から垂直に薙いだ。

骨の碎ける厭な音。

音が消えきらない内に軸足から体を捻り、別方向からの攻撃に応じる。

脳天をがち割ろうとした攻めの一手は長剣に造作なく受け止められ、返し刃は脇腹に斬りの血飛沫を舞わせた。

――あと、一人。

「ああああああああっ！」

無様に走り斬りかかって来る男を一瞥し、アルフレドは男の喉元に切っ先を向けた。十秒にも満たない間に、地面に這い蹲る襲撃者は計数人。空き地の草には血飛沫が染みていった。

男は蛇に睨まれた蛙。進むことも後退さえも不可能。

アルフレドは溜息混じりに男を見やった。

「あのさ……」

「ひィ！」

「……はぁー…何かやる気なくすなぁ…」

刺客の男はがちがちと歯を鳴らすだけで、喉奥で震える言葉は消失していくだけだ。

――刺客も質が落ちたのかなぁ…

否、正確には身上的刺客ではないのだろう。これは、誰かに無理矢理『させられている』だけだ。

――だとしても、酷いよなぁこれ。

もう少し、負け方というものがあると思う。

「おじさんたち？　これは誰の命令？」

「…ぁ…うぁ…」

「ここで話しておかないと…王城の地下監禁牢で喋りたい？」

語られるおどましさと反面して、アルフレドは柔らかく問うた。  
それが効いたのだろう。

「い…イザベル…」

「イザベル？ ああ、西のイザベル？」

イザベルというのは国名だ。エンシェントとは長い間休戦しているものの連邦国の集まった大国であり、両国の間には未だに剣呑な空気が漂っている。

「だ、誰かは知らない…イザベルの…軍…」

「軍の内の誰か、ってこと？」

男は首を激しく上下に振った。

「これは陛下に報告しないとなあ…」

「軍の者に命令されて、僕の刻印を奪いに？」

「刻印と…聖剣、…どちらでも…」

聖剣はまだ分かるとしても、刻印を奪うというのはどういうことだろうか。確かに王家秘伝の刻印は他の施術文とはわけが違う。より聖霊因子を取り込み制御出来るように呪いが掛けられているが、まさか刻印の彫り込まれた『体』ごと持って来って指令だったのか。

「…うえ。」

想像して、気持ち悪くなった。

そこで、あることに気が付く。聖剣と刻印の刺青を持つ者は、何も自分一人だけではないのだ。

「…もしかして、ヴィナ…」？

アルフレドは直感を頼りに、その場から駆け出していった。

#### 第四話 夜中の襲撃（下）

「纏めて来なさい。聖騎士を無下に扱ったこと、後悔させてあげる」一寸も表情を変えずに告げると、ヴィナヘイムは鯉口を切った。その合図が皮切りとなる。

木の根元で臨戦態勢をとっていた男たちの一人が、少女に襲い掛かる。

肩を引き、短剣の仕込まれた腕をバネのように伸ばす。：が、彼女は半身を傾けただけでこれを避け、斜めの体勢から抜刀した。

一息に男の腹に柄を当てて、そのまま捻じ込む。

「——う————かはっ」

乾いた声と共に、男は唾液を散らして沈む。

倒れた男の背後に構えていた次なる刺客は、両手斧を振り上げ突進してきた。

力負けすると即座に悟ったヴィナヘイムは、屈んで男の懷に飛び込んだ。無論、それだけではなく、渾身の力を込めて肘で鳩尾を突く。

男が倒れたのを確認せずに、彼女はそのまま踵を返した。

木の上から飛び掛ってくる男を間一髪で避け、地面着地で僅かなタイムロスの生じた男に足蹴りを放つ。鼻頭を折られた男は再度起き上がるうとしたが、首裏への足刀蹴りに失神。

——あと一人！

息を溜め、刀剣に手を掛ける。

神経を研ぎ澄ませて、ヴィナヘイムは四方の夜闇に眼を凝らした。目端に僅かな動きを捉える。

「——そこっ！」

踏み込みと同時に抜いた刀身には、確かな手ごたえ。

確かに刺客の男の肩口を浅く切り裂き、ヴィナヘイムは捉えた男の

臍を蹴り上げる。怯んだところの顎に掌を打ち込み、男は倒れ伏した。

身体が倒れこむ、どさりという音が響く。

「……………」

気を張り詰め、腰だめの体制を保つ。

——終わり……？

林は視界が悪い。他にも隠れている敵がいまいだろうか。

眼を凝らしやっとな周囲に人の気配がないことを確認すると、ヴィナヘイムは刀剣から五指を離した。

その瞬間

「いっ……っ……」

首筋に鋭い痛みを感じた。

痛みを堪えて首を回すと、斜め後ろの項に見慣れないものが生えている。羽のような突起。…小型の弓だった。

——まさか…、まだ…？

弓矢を引き抜こうとした瞬間に、指に痺れを感じる。

——あ、あれ……？

足が縛れて、そのまま膝を屈す。

——力が 入ら、ない……

体の異常で理解した。弓矢には毒が盛られている。おそらく麻痺性の神経毒か。

——だ、め……

そのまま重みに任せて倒れこむ。口の中に粗い砂が入った。こちらの様子を見た男の一人が起き上がり、歩いて向かってくる。

男の眼には、闇夜でも分かる怒りの色が揺蕩う。

「来ない……で……」

呟く声は小さくてあやふやだ。男は次々に起き上がり、下卑た笑いを浮かべながらヴィナヘイムを囲んだ。…止めを刺さなかった甘えが、掌を返す。視界がぐるぐるする。気持ち悪い。

「……う……」

男の一人が乱暴に腕を掴んだ。衣服を剥ぎ取っていかれていると理解はできたが、体が追いつかない。行う抵抗は微々たるもので、ただ無力なだけ。

男たちは露見した片腕を見て狂喜した。

そこには目的の王家の刻印。棘と華を冠した刺青がある。

——それは、だめ

腕を乱暴に掴んだ男の手には、ぶ厚い鉈が握られていた。鉈はどこか、牛骨を砕く包丁に似ている。

「い……あ……」

——いや。嫌だ嫌だ嫌だ。痛いのは嫌。

男は腕を掴んだまま、少女の肩にその鉈を振り下ろ

「失せろよ」

————え……？

「失せろと言っているんだ屑が」

ヴィナヘイムは滲む視界で、確かに見た。

長剣を構える銀髪の青年を。

「アル、フ……レド……」

氷点下の冴えた眼つきをした青年は、得物を振り上げた。

血飛沫が舞う。本当に一瞬の出来事。数人の男たちが倒れ伏すのに時間は掛からなかった。

まるで演舞でも見てるよう。

彼は刺客たちに目もくれずに少女の許へと駆け寄る。

「ヴィナヘイム！」

「う……うあ……もう……来るの遅いよ……！」

途端、彼女は堰を切ったようにしゃくり上げる。……と同時に泣き叫んだ。

「ばかばかばかばかあ……怖かったんだから！」

「……ごめん」

ヴィナヘイムはアルフレドの胸を拳で叩く。青年は少女の肩に上着



を掛けてやり、背中を撫でてやる。よく親が幼い子供にするように。  
「…よしよし。もう大丈夫だからねー。ほら、怖い怖い飛んでけー」

「……子供扱いしないでよ…」

「はいはい。痛い怖い飛んでけー」

「……ばか…」

「はいはい」

青年は柔らかに告げ、衣服を強く掴む少女の手に任せた。

その後、急いで衛兵に刺客を任せてアルフレドは走った。夜中にヴィナヘイムがいつも修練を積んでいるのは、国立騎士団の有する雑木林だ。

——危なかった。

あちらが本気で、腕を切断して持ち帰る気だとは思わなかったのだ。

「…少しは、落ち着いた？」

「…う…ごめん……なさい…」

少女は顔を真っ赤にして俯く。微笑ましくなる光景だ。普段の聖騎士としての彼女と比べれば、ずっと女の子らしい表情だろう。

「無事で良かった…」

「………」

「行こう」

もうすぐここにも衛兵が来る。騒がしくなる前に退散しておきたいのだが……手を差し伸べても、少女は一向に立ち上がる気配がない。  
「…えーっと、あの…ヴィナさん…?」

「……足」

ぼそっと少女は呟いた。

「え…?」

「足が竦んで立てないのっ!」

「はぁ?」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

——老人くさ……

無論、思っているも口には出さないが。

——しょうがないか。

アルフレドは眉尻を下げて、すぐに膝を着いた。少女に背中を差し出す。

「負ぶってあげるから、ほら、早く」

「…え…」

「早く」

「……」

急かすと、彼女は観念したように背に乗ってきた。息を溜めて抱え上げ、背中に体温を感じる。

——何か、兄妹みたいだなあ…

年齢的にはあながち間違いでもないのだが。

——今は良いことにするか。

空を見ると、もう夜闇が明けかけている。

今日くらいは、聖騎士の専横でゆっくりさせてもらおう。

## 第五話 王者の決断

「殿下。御決断を」

「……………」

円卓会議は、これまでにない鎮圧な空気を持っていた。

「返り討ちでは生ぬるい。こちらから先手を打つべきでは？」

「そもそも、あちらの刺客の侵入を許すとは…王都の警備の嚴重化が先です」

「そんなものに何の意味がある。逐一來訪者の身柄証明を行って  
いては、国交が途絶えてしまうわ」

「聖騎士の刻印…王家の刻印が野に下るのは危ういすぞ」

意見は引切り無しに言い交わされるが、平行線上から一向に進まない。

絶対王政では、王の決断が全てなのだ。絶対権力者が何も意思表示をしない以上は、形だけの大臣や將軍など烏合の衆に成り果てる。王者の傍らに控える従者は、ふつつりと黙り込んだ老齡の男に耳打ちした。

内容は、先程と同じ。

「…殿下、決断を」

「……………」

男は机上のみを見つめている。

そこには咀嚼<sup>そしゃく</sup>権の承諾を要求する文書が在った。先日、使者から送られて来た物だ。

送り主は、西の連邦大国・イザベル。

昨今になって連邦国を増やし、領地を増やしている強国だ。北のアギバルクと同様にエンシェントの豊かな鉱山を狙っているのは明白だ。

武力でも勢力でも、まともに戦って勝てる相手ではない。

あちらもそれを承知して、無抵抗ならば戦無しの降伏を認めると言っているのだ。こちらを卑下した侮辱に等しい行為。

応戦して華々しく散るか。従って惨めに生きながらえるか。

二つに一つだ。

血の気が盛んで、猛者<sup>もさ</sup>としての誇りを持っている者なら前者を。

客観的に被害を考えれるものならば後者を推す。

全ては、国王の双肩に掛かっていた。

王自身も自覚していることではあるが、老齡の王は自主的に王座を譲るのが好ましい。

エンシェントの王も、もう幾ばくもない先に王座を王位第一継承者である若き王妃に譲ろうとしていた。…その矢先の出来事だ。

愛娘に血生臭い決断を継がせたくない。

親としても、王者としても当然の願い。

全てが片を付けてから潔白な王女として国を統治して欲しい。ならば、汚れ役は自らが引き受けなければならぬ。そして、国としての存在と威信を継承しなくては。

二つの選択肢の中のみで判断すれば、国は滅せられる。

王は決意し、厳かに告げた。

「対の聖騎士を連れてきなさい」

少女は寝台の横にいる青年に、訝しげな視線を送った。

「…何してるの？」

「ん？ やっぱり病人にはこれかなあ、って」

青年は器用に林檎を回しながら、果物ナイフでしゃくしゃくと皮を剥く。

「私、病人じゃないし、勝手に家の皆が騒いでるだけだし……林檎は皮が付いてる方が好きなのに……」

拗ねたように寝返りをうって丸まる少女。

「ん？ そうじゃあ、ヴィナにはこっちをあげようか」  
アルフレドは剥いた皮だけを摘んで見せる。

「……ばか」

ヴィナヘイムはのっそりと起き上がった。特徴的な赤毛は所々が跳ねている。

「そんなことよりも、風邪なのに無理して修練なんて積むものじゃないですよー。何時敵襲が来るかなんて分かったものじゃないだろ？ 一昨日みたいに」

赤い果実から眼を離さずに、青年は諭す。赤毛の少女はシートに包まったままに寝台に座る。

「……」

「あんまり焦<sup>あせ</sup>らないことだね」

「……じつとしてる方が無理だよ」

「そんな猪みたいなこと言わない。自制は大事だよ」

「アルフが言うのと笑えない」

「あははは」

ヴィナヘイムはフォークを受け取って、剥かれた林檎に突き刺す。実に綺麗さっぱり剥かれた様子に、青年を騎士にしておくには勿体無いと思いながら、水々しい果肉に歯を立てた。

「…美味しいなコノヤロウ」

「林檎とか生果類はね、剥き方とか蒂<sup>へた</sup>の取り方に左右されるから。生で食べる分にも無下に出来ないんだよ」

「…ふうん」

相槌を打って、ヴィナヘイムは食物を嚥下する。

「ところでアルフ」

「何？」

「あの人たち…どうなった？」

言葉が示す集団は、一つしかない。

「うーん。殺さないようにするの大変だったけど。聖霊因子を拡散して応戦したから何とか全員生きてたよ。今は地下牢…と行き

たいのは山々だけど、傷が深い奴は特別に警備が付いた所で医者に見せてるって」

「……そう」

地下牢に押し込んで拷問・尋問……というのはヴィナヘイムの望むところではないので、内心では安堵した。

「ともかく、一昨日の一件で王都は混乱してる。今日はヴィナも屋敷から出ない方がいいかもね」

「……アルフは堂々と実家から抜け出てきたくせに」

「その所、うちの家族は理解があるんだよ」

刺客襲撃で騎士団の寮は騒然としている。事件の渦中にあったアルフレドが、次の日には現場となった自室で寛いでいるのは些か問題になりかねない。

応急的にフェイルコールの実家に連れ戻されたアルフレド同様、ヴィナヘイムも扶養家族が放っておかずに、半ば無理矢理にベイカーの家に連行された。

そして、部屋に軟禁されているのだ。

実際に、扉を蹴破って出て行こうとした彼女を床に押し戻したのは、一重にもう一人の聖騎士の助力があった為だ。だが、彼女が麻酔薬の効果とは関係無しに熱があると発覚したとき、彼女を叩き伏せたのは家の女中たちである。

——昨晚は踏んだり蹴ったりだったわ……

あの時の侍女たちの剣幕は、一生忘れられそうにない。

どうしてこう、大人の女性は怒ると怖いのだろうか。……すべからず自分も女でありながら、途方もないことを考えてしまう。

ヴィナヘイムが聖騎士に任命されたことで、家計に余裕が含まれるようになったのはいいことだが、何も見栄を張って侍女を増やすこともないと思う。

彼女は扶養家族に甘いので内心で呟くに留めるが、不満はやっぱりあるのだ。

「……そうやって金がある時に使い切っちゃうから、経済力がなく

なるのよ……」

——て、そんなことは今どうでもいいのに……！  
むすっと呟いて、シーツを跳ね除ける。

「何？」

ヴィナヘイムは寝台の上で仁王立ちになった。アルフレドは何と  
は無しに軋むベッドの足元の皺を気にしている。

「風邪なんてもう治ったわ！ 行動開始！」

「……ヴィナさんのご乱心？」

「違うっての。分からないならば訊きに行けばいいのよ！」

突拍子もない発言に、青年は首を傾げる。

「……は、あ……」

「間拔けた返事は許しません。ともかく案ずるより生むが易し！  
そうと決まれば行くよアルフ！」

「……どこに？」

「そんなの、決まってるでしょうが！」

後に昼食を届けにヴィナヘイムの部屋を訪れた侍女が見たのは、  
開け放たれた窓と蛻<sup>もぬけ</sup>の殻と化したベッドのみだった。

## 第六話 囚われの愚者

青年は指を弾きながら、膝を抱えて座り込む。

ひんやりとした感触は、臀部から這い上がってくる。背を預ける壁は石造りで硬かった。

息を吐き出して、ぼんやりと牢の格子を見つめる。

依頼に失敗してから、まだ一日と数刻しか経っていない。時間の流れはここまでゆっくりだっただろうか。急かされて急いで生きてきたのに、ここでいきなり足止めを喰らった気分だった。

不思議と、憎む気持ちや悔しい気持ちは湧いてこない。

自分は聖騎士の刻印と聖剣を奪おうとして失敗したという、漠然とした事実があるだけだ。

今居る異国、エンシエントには聖騎士という伝統があるらしい。

青年の祖国、イザベルにも似たような文化があり、代々十二軍師と呼ばれる猛者たちが軍部を仕切っている。

エンシエントの聖騎士は本来ならば唯一人なのだという。

それが何故二人いるのかと問えば諸説はあるが、何でも二人の力量は同じで何度戦っても引き分けるからなのだそうです。

そんな馬鹿な話が…と最初は半信半疑だったが、情報の提供者の口ぶりからして真実らしい。

情報の提供者は、聖騎士を嫉むエンシエントの貴族騎士だった。俗に言う内部告発だ。

彼らはその若さ故か、片方が女の所為か、身内にもあまり良く思われていないらしい。ただ実力だけは本物なので、彼らを疎ましく思う者たちは決まって『そういう』行動に出る。

——売国奴め。

イザベルの軍師から直接指令を受けた青年は、前述の墮落貴族からの情報を受け、エンシエントの地に立った。



連邦軍国であるイザベルとは正反対の、穏やかな空気。

緩慢した平和。弛緩し切った雰囲気。一目で分かった。この鉾山国は攻め込まれたらすぐに消滅する運命にある。

この大地にイザベルの旗が立つ日は近いだろうが、その前にどうしても手にいれなければならぬ物があつた。

一つ、聖騎士のみが佩刀を許される聖剣。

一つ、聖騎士の身体に彫られた刺青、王家伝承の刻印。

持つのは、二人の聖騎士。

アルフレド・ハンデット・フェイルコール。

ヴィナヘイム・ハンデット・ベイカー。

求める全てを収集できれば、持ち帰る必要のある代物は四つ。

刻印に至っては必要ならば片腕ごと、胴体ごと持ち帰れとも言われた。：成る程。まさしく自分たち向けの汚く醜悪な仕事だ。

聖剣は如何なるときも携帯が義務付けられているというので、聖騎士を捕らえれば簡単なことだ。

——だが、生身の身体を解体するというのはどうだろう。

青年はそこに、僅かな躊躇いを感じずにはいられなかった。

無論、自分たちの仲間には『そういうこと』に慣れた手合いも居るのは居るのだが：あくまで少数派だった。

なお、青年は一つ勘違いをしていた。聖剣は持ち手を選ぶ。故に、彼らが聖剣を持ち帰ろうとしたところで聖剣の暴走した聖霊因子に腕を焼かれるか、酷ければ心臓を貫かれていただろう。

彼らが、エンシエントの国民なら誰もが知る周知の事実を知らなかったのは、単にイザベルが聖霊因子の知識に乏しい近代国家だった所為か、知っていてもわざと伝えなかった裏方の真意があるからか。青年たちは、危うい寸土で命拾いをしており、聖騎士に命を救われたとも言えるのだが、彼らが真実を知るのはもう暫く先のことである。

ともあれ、青年は驚いていた。

自分より年下の少女が騎士の誇りを持って戦っていたこと、自分と

同年代の青年があんなにも冷たい眼をすること。

——らしくない……

堂々巡りで、詰まらない事を考えている。彼らを自分と比べているのか。

奴隷として生まれたついた自分とは大違いだと、嫉んでいるのか、諦めたのか。

——むしゃくしゃする……

あの時の少女の眼が、頭から離れない。自らの仲間が、試しに少女ともう一人の聖騎士の青年を罵倒したときの、誇りに思うものを穢された憤怒の表情。あの目つき。

反抗する女は手ずから信念を折ればいい、汚してしまえばいい。

だが、確信してしまったのだ。

聖騎士、ヴィナヘイム・ハンデット・ベイカーはどんなに身を墮とそうとも、絶対に再びあの目つきで自分を睨んでくるだろうと。

外ではなく、中の部分で間違いなく青年は負けたのだ。

あの不可侵は成る程、聖の女騎士に相応しい。

寧ろすっかりと力の差を理解してしまった所為で、今の青年には彼女への屈辱はない。

だが、この感情は……

考えるのを唐突に止めた青年は、目を閉じて監獄の壁に身を任せる。

——…と、同時に耳に音を聴いた。

「——…、……。」

「…っ …う…」

誰かの話し声だ。階段を降りてくる足音もする。

「…からは… …」

「…も、そこまで……、…」

——うるさい……

監視衛兵の巡回は、先程周って来たばかりだというのに。

「…んでね。やっぱりこれが……」

「分かったよ。ヴィナ」

——ヴィナ…？

青年は僅かな違和感と共に瞼を上げた。

鉄格子は相変わらず、ただその先の通路には昨夜出会ったばかりの二つの人影があり：

目の前に、満面の笑みを浮かべた黒衣の少女が立っていた。

## 第七話 解釈の相違

満面の笑みで黒い少女は牢獄の前に立った。

白衣の青年は無言でこちらを見下すだけだが、彼の背後には研ぎ澄まされた殺意を感じた。一目でも眼を合わせれば『殺される』と直感する隠さない殺意を。

「お元気ー？ 元刺客さん」

「……………」

返事はないが、青年はヴィナヘイムを直視する。少女は監獄の前で屈み込んだ。

「何か言うことある？」

「……………」

「そっかぁ」

無言の応答に、彼女は笑みを消した。

一寸の躊躇もなく腰元に吊られた刀剣を抜き払う。薄暗い監獄に白い太刀筋と華の香りが舞った。

剣を下から斜めに斬り上げた状態で、腕は停止した。

僅かな間を置いて、ごっこん、と音がする。

音の元を見ると、牢屋の南京錠が半ばから真っ二つになっていた。聖霊因子の圧縮による技。彼女が抜刀術の達人だということと、斬ることに特化した聖剣それも形状が刀剣だからこそ行える所業だ。彼女は無表情を崩さずに、造作なく牢の扉を開けて入ってきた。少女は青年の目の前に片膝を着いた。

「何か言うことある？」

——またそれか。

謝ればいいのか、襲ったこと、殺そうとしたこと、聖剣と腕を持ち帰ろうとしたこと。

「……………」

口は開いたが、言葉は出ない。

少女は真っ直ぐにこちらを見るだけ。少女の背後の青年は相変わらず隠しもしない殺気を放つ。

ヴィナヘイムは質問を変えた。

「…貴方、名前は？」

「…あ…？」

「名前。偽名や呼称番号は駄目だよ。本名」

「……………」

何でそんなことを訊いてくるのか。

——お前にとっては、どうでもいいことだろうに…  
理解不能。

「……ギルフォンスⅡハインケル」

けれど、乾いた唇は一つの名称を紡いだ。

理解不能だ。何故自分は名乗っているのか。

——何でだよ……

少女はここで、初めてわざとらしくない笑みを浮かべた。自国ではあまり見かけない赤髪を揺らして

「私は、ヴィナヘイム・ハンドェット・ベイカー」

少女は名乗ると、一度は収めた聖剣を引き抜いた。鞘鳴りの音がやけに響く

…今度こそ、殺される。

ヴィナヘイムは刀を頭上から青年の肩に落とし…けれど刃は肩上でぴたりと止まった。

彼女は青年の眼を真っ直ぐに見つめて、囁いた。

「…ごめんね」

——どうして、謝る。

「したくて、こんなことしてるんじゃないでしょう…？」

——どうして、そんなこと…

「分かるよ」

——どうして。

「……でも、やっぱり許せないから……でも、これで終わり」  
——わけ分かんねえよ。

内心で狼狽する青年を他所に、ヴィナヘイムは背後を示唆する。  
「……牢は開いてるよ。出たいんなら自由にして。もうここには帰ってこないで」

少女は結局、彼の肌一枚も切り裂かずに剣を仕舞った。そして一度も振り向かずに、彼女は剣呑な雰囲気漂わせる男を連れて、牢を出て行ってしまった。

地下牢から出た男女は、陽の光に眩しそうに眼を細めた。  
足元の草は短く刈り取られており、昼の日光に蒸されている。

「納得いかない顔してるね」

「……当たり前だろう」

少女は振り返って、青年に苦い笑みを見せる。……が、青年は滅多に見せることのない嫌悪の表情で、眉を吊り上げたまま

「お前、片腕もって行かれかけたんだぞ」

「……うん」

「それに、聖剣を奪われそうになった」

「……うん」

「殺されて犯されそうになった」

「……うん。何でだろうね」

本当に、自分でも不思議なのだがヴィナヘイムは彼らを恨んでいない。

悪いのは、そうさせた周りの要因だ。

「私さあ、世の中には本当の悪い人と、悪っぽいけどそうでもない人がいると思うわけよ」

「………」

アルフレドは無言で仏頂面のままだ。やはり少女は苦笑し

「…んでね。私自身も、悪っぽいけどそうでない人でいたいわけ」  
「…：意味が分からない」

「うん。だろうね」

少女は小石を蹴りながら進む。

「まあ、何て言うんだろう…：私がそうしたいからしたんだよ」

「あいつ等を野に放すことがか？ あいつ等はまた繰り返すぞ」

「その時は私が殺す」

「…手遅れになってからか？」

「…：本当はさ。牢屋から出たって、地下牢の外には絶対に出れないし、王城から外へなんて以ての外でまず出られない。あの人たちの手枷は嵌ったままだし。逃走したって簡単に捕まっちゃうよ」

「じゃあ何で鍵を壊して周ったんだ」

問いかけに、ヴィナヘイムは振り返った。

「本当に、あそこから出たいかを試す為」

彼女の眼に先程までの苦い笑みの色はない。

「…きつと、あの人たちは釈放さえも望んでいない。帰国もしたくないと思う」

「どうして？」

「…：あの人たちは、使い捨てだよ」

使い捨て…：即ち、捨て駒。もしも駄目だったらの時の代替が利く体のいい奴隷。

「そして本人たちも自覚してる」

自らが捨て駒であること。

「あの人たちが襲撃の時に使ってた武器ね。あれは山賊の物ですよ」

狼を模した紋章は、主に山を根城とする山賊が好んで使う。施術武器にそれらが記されていたということは、彼らの出自はおそらく軍ではない。軍からの命令で雇われたのだろう。無理な圧力を掛けられて望まぬ仕事を押し付けられた可能性もある。

山賊と一重に言っても、獵師が身を堕とした姿であったり貧し

い山村の出身者が多い。

それに、彼らは基本的に人に危害を加えない。時折人里で食物や家畜を取って逃げるだけのことが多いのだ。勢力の弱い彼らは穏便にことを済ませようとする。例外は勿論いるが、少数派なのだ。

望まない生活。望まない依頼。

——だから、彼らも望んだわけじゃないと思う。

無論、ヴィナヘイムを造作なく捕らえて腕を搔っ切ろうとした連中はまた違うのかもしれないが、あの青年には別の何かを感じた。

——きつと…彼は……

「賭けをしようよ。アルフ」

「…何だよそれ」

アルフレドは余計に眉根を寄せる。折角の端整な顔が台無しだ。

——あーあ、にこやかにしてれば好青年なのになあ。

残念がりながらも、彼女は告げる。

「牢屋からは誰も出てこないよ。誰も逃げようとしない」

「……はあ？」

「もし誰かが出たら……んー、そうだなあこうしよう。私は一週間野宿するわ。んで誰も出てこなくて私が勝ったら…アルフ、女装しろ」

「はあ!？」

青年は少女に食って掛かった。

「馬鹿じゃないのかお前! 野宿って何だよ襲われたばかりで女装って何だよ俺は男だぞ!」

「いや、女の人が女の恰好しても女装って言わないでしょ。それから一人称といつもの丁寧口調が崩れてるよん。いいじゃん風邪も全快したし。快調だったら寝てても夜襲に耐えられるもん」

平たい胸を張って言う所作に、アルフレドは呆れを通り越して悲しくなってきた。

「……馬鹿じゃないの馬鹿じゃないの馬鹿じゃないの」

「酷い言い方っ!」



「…馬鹿じゃないのか？」

「諭すなっ！」

ヴィナヘイムの突っ込みに、アルフレドは溜息を吐いた。  
——まったく。

「お前は…優し過ぎだ」

「それは私にとっては最高の賞賛だよ？」  
もう一度溜息。

「…やっぱ馬鹿」

「ふん。馬鹿って言う方が馬鹿なのよ」

そっぽを向いて言う赤毛の少女。吐き捨てる銀髪青年。

「ガキか」

「ガキじゃないもん十八歳の乙女だもん」

「乙女は野宿しねえよ」

「偏見だっ！」

「馬鹿か！」

二人は王城の敷地内で跋扈する。通りかかった秘書官や衛兵は、  
さも日常的な光景を何事もなく素通りして行く。……が  
罵り合いが加速する前に、思わぬ方向から静止の声が掛かった。  
上からだ。

「…居た、対の聖騎士！！」

「…はい？」

声のした方を見上げると、石造りの王城の窓から見慣れた顔が覗  
いている。彼は下の二人へと手を振った。先に反応したのはヴィナ  
ヘイムだ。

「衛兵長さん…？ どうしたんですか？」

「丁度良かった！ 早く会議室まで来てください！」

少女と同じ問い掛けを、青年も発する。

「何かあったんですか？」

衛兵長の男性は、大切な一言を告げるように一息を吸って

「――陛下からの勅命があります！」

## 第八話 遠方への勅命

会議室は、広い空間に先程までとは違う緊張感を孕んでいた。

原因は、おそらく入室して来た若い二名にあるのだろう。

「アルフレド・ハント・フェイルコール：只今参りました」

「同じくヴィナヘイム・ハント・ベイカー。只今参りました。  
陛下」

王に直接呼び出されることは今迄でも珍しくはなかったが、会議中に名指しで呼び出されたのは今回が初めてだった。

広い会議室。長い円卓。大臣や将軍がかなりの数集まっているが、広さ故に狭さや息苦しさは微塵も感じられない。

王の位置は一番奥の座席だ。背にはエンシェントの旗が掲げられている。

王とはやや距離をとって傳き、二人は発せられる言葉を待った。  
「面を上げなさい」

首を上げると、老齢の王は何時になく厳しい顔をしていた。

「君達には勅命を下す」

「……………」

勅命：つまり絶対権力者からの唯一無二の命令。

その場に存在する皆が押し黙り。密度の高い沈黙が降り立った。

「君達には自国、エンシェントを出て、イザベルの王都に向かつてもらう」

「——え…………？」

思わず、思考が停止した。

「——今、何と…………」

動揺は、辺りの国の重鎮たちも同じように波紋する。

二人は信じられない気持ちを抑えて、アルフレドは冷静に問うた。

「陛下…それは…」

「勅命だ。いいかい聖騎士。君たちには使者としてイザベルに向かつてもらう」

国王の口調に迷いはない。

だが、大臣の内の一人が椅子をけたたましく引いた。

「殿下！ …聖騎士は国の象徴ですぞ！」

「王都の戒律が乱れます」

「国民に知れたら…」

彼らが慌てるのも無理はない。聖騎士の本分は王都の守護だ。国の象徴だ。彼らが国外に出るなど前例はない。表には出さなくとも、古い慣わしを信じる者は多いのだ。

国民もそれは同様で、中には聖騎士を崇める志が特に強い者もある。そんな国民層に知れたら、どんな蜂起をされるか分かったものではない。

そしてその命令を下したのは、他でもない絶対王者。エンシェントの国王なのだ。王が本気ならば聖騎士に従わない道理はない。口々に反論を述べる貴族たち。けれど王者は一睨みで弾圧した。

「反論は何人たりとも認めない。——聖騎士<sup>ヘンデット</sup>」

「「はっ」」

「すぐに出発の準備を。明日の明朝までに挨拶を済ませておきなさい。これは『勅命』だ」

青年と少女は、僅かな躊躇いを振り切って告げた。

「…陛下の御心のままに」

「…陛下の望むままに」

二人は聖剣を抜き払った。発するのは、宣誓の祝詞。

「「————定め<sup>さだ</sup>……彼の世祖、ここに誓約する」」

会議室の静謐に、厳かな声は響いた。

会議が終わると、国王は真っ先に執務室に向かった。

後ろから影のようについて行くのは専属の従者だ。

「殿下。何故聖騎士を国外へ？」

「戦をしてもしなくとも、相手に占領の意志がある限りは国の威信は堕ちる」

「……はい」

国を私物化した権力者は失墜する。内からの反乱でも、外部からの戦争でも。

エンシェントの王者はよく理解していた。唯一無二の国王だからこそ、国の頂点に君臨する者だからこそ、高い位置から客観的に物事を見定めなければいけない。

先入観、一人の人間としての感情は二次だ。理屈と客観視点で国事を行わなければ、国は、大多数の国民は苦しくなっていくだけだ。

王は緊迫した状況とは裏腹に、声音を上げる。

「だから。西のイザベルには戦意を喪失して貰おうと思ってね」

「……と、言いますと？」

従者の追及に、今度こそ国王は口端に笑みを浮かべた。

「…言うだろう。可愛い子には旅をさせよと。彼らはきっと、今よりも強かになって帰ってくるだろう。その日が楽しみだ」

——…と、まるで我が子の話をするが如く言うのだった。

## 第九話 其々の送別

赤毛の少女は木製の扉をノックした。

「……ミュハーさん。お話があります」

「…何かしら？」

扉の向こうから返事が聞こえるのを確認して、少女…ヴィナヘイムは扉を押した。

広い室内には家具は少ないが、ベッドや箆笥などはどれも重厚で造りが凝っていた。部屋の奥の窓は天井まで届く大きさで、夕暮れ時の光を室内に存分に採り込んでいる。

窓の前にはこちらに背を向けて椅子に腰掛ける老女の姿があった。

老女は振り向かずに入り口の少女に語りかけた。やや笑みを含む声で「入っていらっしゃい。落ち着かないわ」

「あ、はっ、はい…」

示唆されて、部屋の絨毯を踏む。

「…その椅子に座りなさいな」

鏡台の椅子へと視線を送り、老女は少女と対面する。

老女の名はミュハー・ベイカー。…ヴィナヘイムの義母だ。

第一に上品そうな女性だった。物腰は柔らかで貴族らしい教養もあることを覗わせる。白髪を項で緩く結わえているが、長い髪は床に付きそうなほどだった。

ヴィナヘイムはぎこちなく椅子に掛ける。腰当たりの柔らかい椅子だった。

「さて、お話を聞かせて欲しいわ」

「…あ、はい。えっと……」

——相変わらず話を聞きだすのが上手いなあ…

そつなく相手を促す様に感心しながら、ヴィナヘイムは赤毛を揺らした。肺に息を取り、意気込んで告げる。

「陛下の、勅命を受けました」

「……そう」

「内容は…使者として、イザベルに向かうことです……」

対面するミュハーは僅かに眼を見張ったが、すぐに目尻を下げた。

「…そうですか…」

「私は、聖騎士であることを誇りに思っています…だから…」

「わたくしも、貴女のことを養女として誇りに思っていますよ」

言って、にこりと笑う様子に、ヴィナヘイムは思わず顔を俯かせた。紅潮した顔を見せないためだった。

「…明日、アルフレドと共にエンシェントを発ちます」

「……そうですか…」

「帰りは何時になるか分かりません…でも…待っていて、くれますか…？」

震えた声は拙い問いかけになる。

彼女の義母は、やはり慈愛に満ちた顔で答えた。

「勿論ですよ。私の愛しい子」

「……っ」

——ああ、駄目だ。これ泣く。泣くな自分。

ミュハーは微笑みながら、口をへの字にして俯く少女を見る。

…と、何かを思い立ったかのように立ち上がった。

「ああ、いいのよ。貴女は座っていないさい」

「え、はい」

彼女はそのまま鏡面台へと向かい、小物入れとなっている小さな箆笥から布を取り出した。

よく見ると、布に何かが包まれているらしい。

老女は布を解くと、中のそれを少女の髪に触れ絡めた。

——……？

頭部には僅かな違和感が残る。

鏡面に映った自分を見ると、赤髪には白金と紅の髪留めがのついていた。小さいものだ。小指程の大きさしかない。耳の脇辺りで髪を挿

んである。

凝った意匠は、花の形に似ていた。ヴィナヘイムは見たことのない花の容があしらってある。

「水蓮と言うのですよ。綺麗でしょう？」

「水蓮……？」

「東方の花です。水の上に咲くんですよ。一度だけわたくしも見たことがあります」

「水の上に……？」

「ええ。それはとても、美しかったわ……」

若かりし頃に想いを馳せる老女は憧憬の瞳をしていた。もう戻らないものを惜しむ瞳。生前のヴィナヘイムの実母もよくこんな眼をしていた。

「これはね、わたくしの婚姻式で付けたものです……でも、それつきりですね」

「そんな……！ 大事なものを……」

「いいですよ。これはわたくしの母の物。そして娘の私が持っていたのですから、貴女が持っているのが正しい形です」

「……」

——何か、結婚式の前日の花嫁みたいな心境に……

鼻の奥がつんとするが、上を向いて誤魔化す。

「あ、有り難う……御座います……」

「どう致しまして」

老女は窓へと視線を送り、付け足すように少女には聞こえない声で小さく呟いた。

「……シキさん。貴男の娘は美しく育ったわよ」

長い道のりになるだろう。厳しい道のりになるだろう。……それでも。

——絶対、絶対にこの人の所に帰ってくるんだから……

ヴィナヘイムは髪留めに触れながら、決意を新たにした。



普段は滅多に開門しない闘技場。そこは年に数度の闘技大会や国立騎士団の闘技演舞、聖騎士の本戦以外は人の姿がない場所だ。そして今日は何の行事もないというのに、闘技場には何故か人影がある。

二つの人影の内、銀髪を揺らして走る青年は呼吸を荒げた。  
——相変わらずきついなあ……！

少女が離別の思いと再会の決意を新たにしていたとき、別の場所で青年もまた実感していた。

——でも、まあ暫くは相手してもらえないからな…

「おいアルフレド！ もうくたばったなんて言わねェよなあ？」

「当たり前でしょう！」

正直言って辛いが痩せ我慢であろうとも、それでも言わないとやってられない。

激しい音と共に閃光が弾ける。

振りかざされたぶ厚い剣は、真っ先にこちらの脳天を狙ってくる。

紙一重の差で避けると剣が沈んだ場所は陥没し、地面からは粉塵が舞う。

「弟子を叩き潰すつもりですかっ」

「はア？ こんなろい攻撃かわせねえ愚図なら死んじまえ！」

「相変わらず直球ですね！」

言ったのと同時に、アルフレドも長剣を対峙する男に向けた。

緩い曲線を描いた軌道は速度を上げ、男の胴体を横薙ぎにする。

「――はあ！」

手ごたえはあったが、感触が違う。

長剣がぶつかったのは、両刃の太い剣だ。

――防がれたかつ

「おいおい。聖剣がないとそんなにユルいのか？ アルフレド君  
！？」

「……っ」

舌打ちをして、剣を引き戻す。

男の言った通り、アルフレドは聖剣をつかっていない。殆ど鉄の棒に近い長剣で応戦している。

対する男は紋章が幾つも連なり、重複された施術大剣を扱っている。

男の両手の甲から手首に掛けてには、獣の刺青が入っていた。どこかアルフレドやヴィナヘイムのそれと似た刻印が。

「――：くそっ！」

青年は引いた剣を、足の踏み込みと同時に真っ直ぐに突き出す。

聖霊因子は聖剣程には収束出来ないが、彼の場合は刻印が依代となる。生まれた力を打撃に賭けた。

男は口を吊り上げて犬歯を見せて笑う。：男は避けない。

――力比べってことか：！ のってやるよ：！

瞬間、聖霊因子から生まれる膨大な光の量に、視界が消失した。

「ばっかじゃねえのか：てめー」

「：げほっ、じ、自覚してますよ……」

気がつく二人は倒れ伏していた。アルフレドなど、大の字になって闘技場に寝転がっている。

アルフレドと剣を交えていた壮年期の終わり際の男は、ぼりぼりと頭を掻く。

「にしても：聖霊因子を集めて集束しねェで発散するなんぞ、正気じゃねェよ」

「い…師匠には言わ、れたくないです…かはっ、ごほ」

咳き込んで、青年は口元を押さえた。

顔や髪は土埃でくすんでいる。服は擦り切れて、血が滲んでいる箇所もあった。

「…ふうー、死ぬかと、思ったあ…!!」

「阿呆。この位で死なれたら聖騎士の名折れだ。俺の跡を継いだんだから、血反吐吐いて精進しやがれ」

男は乱暴に言い放って、身を起こした。

男の名は、ジャック・アクルカ。以前の名はジャック・ハンデット・アクルカだ。

御三家であるアクルカ家の現当主でもある。

言うとおりに、彼は一世代前の聖騎士だ。つまり、アルフレドとヴィナヘイムの前の聖騎士。彼は肉体の衰えを感じると、潔く聖騎士を辞めて権利を他者に委ねた。

「ったく…手前えらは…何してんだよ。聖騎士になっても夫婦みてーに惚気やがって…シバくぞ」

「あはは…実際には夫婦っていうよりかは、兄妹ってかんじですけどねー」

「はア？ お前みてーなふてぶてしいクソガキの妹が、ヴィナヘイムみてーに可愛いわけねえだろうが阿呆め」

「…あいつは猫被ってるだけですよ…」

「はン。可愛い対の聖騎士じゃねエのかい？ てめーが護らなくてどうするんだよ」

彼が言うのは、おそらく昨晚の襲撃のことだろう。

——バレてたか。

「ヴィナは僕が護りますよ」

「口で言うだけなら何とでもな」

「いいえ。彼女は僕が護ると決めたんです。二年前に」

確固とした口調で語り、青年は男の瞳を直視した。

「…ガキの分際で、いっちょ前な面構えしやがって…阿呆が」

男は言い捨てると、立ち上がって歩み去っていく。

「精々、イザベルでも護ってやれ」

手を振るその姿を見送って、アルフレドは呟いた。

「…何だ、やっぱり全部知ってるんじゃないですか……」

闘技場の中心で見る星空は雲一つない満天だ。

明日は晴れるだろう。

## 第十一話 野に下る剣（前）

いつもよりしっかりと厚着した服。風除けのフードのついたコート。袋蓑には最低限の旅の支度しか入っていない。コートに隠すのは、それぞれの聖剣だ。

顔を隠すようにフードを目深に被る二人は、王都の門の前で落ち合った。

青年は、フードの奥にある眠たげな少女の眼を見て

「…よく眠れた？」

「ゼーんぜん」

「……実は僕も」

何となく感覚を共有したりしていた。

昨日も青年は夜遅くまで前聖騎士と手合わせをしていたし、少女の方は準備や挨拶を早めに済ませたものの、何だか感傷に浸ってしまっただけで寝付けなくなってしまったのだ。

典型的な、遠足の前日の子供と同じである。二人して溜息を吐く。アルフレドは何気なくヴィナヘイムの旅装を見て、首を傾げた。

「そういえば…背中に背負ってるそれ何？」

「あー、バレちゃったかー」

「分かるよ。何かはみ出してるし」

言う通り少女のコートからはみ出した、棒のようなそれは明らかに違和感がある。

乳白色で、傍目からは細い象牙に似ているか。

「これはハイト家の弓だよ…ほら、士官学校で柵の肥やしになってたやつ。昨日、駄目元でストラトス教官に譲ってくれて頼み込んでみたら、呆気なく快諾してくれてねー。…あ、ここに矢はないけどね。流石にこれ以上の荷物は嫌だったし」

「抜け目ないね。そういうところ」

「えへへー」

周辺はまだ暗い。明け方前だ。僅かに丘陵の向こうから朝日が地平線を照らしている。

わざわざ人気のない時間帯に発つのも、人目に触れてはいけない理由があるからだ。

聖騎士が王都を離れることは、国民には内密だ。何時かは勘付かれるだろうが、暫くの間でも隠し通す必要がある。

――重大問題だもんね……

しかし、王の命令は絶対だ。聖騎士は王に遣える者だ。王の憂いや要望は果たす。

今回の命令にも例外はない。対の聖騎士である二人の思いは同じだ。――後悔なんて、してない。

「そろそろ…案内人が来てくれる筈なんだけど……」

少女は呟く。

ヴィナヘイムは幼少期に郊外で生活していたが、それも幼い頃だけの話だ。主に王都で生活してきた二人にとって、王都の外は未知なる世界だ。地理感などない。

それ故に、彼らのイザベルへの旅を案内してくれる人物が必要不可欠なのだが…

ヴィナヘイムは首を回すと、門の端に人影を見つけた。

「御二人とも……」

「あ……」

すぐに彼らは人影へと走り寄る。

彼の姿は昨日も見た。人の良さそうな壮年の男性。制服の称号は兵卒よりも一つ多い。

「衛兵長さん……！」

「…しつ、ここでは個人名は控えましょう。何処で誰が聞いているか分かりません」

唇に指を立てて、彼は手招きをした。慌ててヴィナヘイムも口をつむいで進む。

門の下に行くと、そこには衛兵長以外にも人影があった。聖騎士の青年にも負けない位の長身の影。灰色の外套に、どこかで見たことがあるフード：彼はフードを除けて、顔を露にした。

監獄では気にも留めなかったが、彼はくすんだ色合いの黒髪を持っていた。エンシエントでは珍しいそれを揺らす。珍しい灰色の瞳は吊りあがった目つきでこちらを一瞥した。

あまりにも見覚えがありすぎる人相。視認した途端に剣幕を張るのは、銀髪の青年。

「お前……」

「：確か：ギルフォンスⅡハインケル：でいいんだよね」

ヴィナヘイムの問い掛けに、元刺客の青年は頷いた。

彼は昨日と同じ灰色のコートだが、手には牢屋に居た時と同様に手枷が嵌っていて、両手は拘束されていたままだった。

「：どういふことだ。衛兵長」

「ちょ、待ってアルフ」

何時もの柔和な雰囲気を消し去り、アルフレドは氷点下の詰問を発して詰め寄る。

ヴィナヘイムは青年を宥めて黒髪の青年を見た。青年は応じて、乾いた唇を微かに動かす。

「……オレが着いて行きたかったからだ」

「え……？」

代わりに、衛兵の長は説明する。

「：実は、イザベルとは、先の戦からお互いの交流がとても乏しいのですよ。王都にもイザベルからの行商人は来るにしても、こちらの人間であちらの地形を知っている人は、ほとんど居ないんです。文化の大元はエンシエントと同じなので、言語の相違で困ることはないかもしれませんが、案内人の手配はどうしても難しくて……」  
言わんとすることは分かる。

「……つまり、その罪人に案内を頼むと？」

アルフレドの口調は何時になく厳しい。

「彼たつての希望です。正式な契約として道中の案内をすると。身代わりとして、牢の中にいる仲間を置いていくと：無事に案内を務めたら、彼の仲間への刑罰を軽くする約束です」

「ああ。オレが契約違反を犯したとき、あいつ等は煮るなり焼くなり好きにすればいい」

ハインケルは言って、アルフレドを見やった。対する彼は眉を立てて、今にも剣を抜き払いそうだ。

「…その言葉の、どこが信用できるんだ？」

「ちょ、ちよっと待った！」

ヴィナヘイムは二人の青年の間に割って入る。両人の視線を強く感じながら

「…私は良いよ。別に」

「ヴィナ…？」

「いいじゃん。どうせこれしか方法ないんでしょ。…それに、裏切ったら殺すし」

涼しい顔で言って、少女は昨日の敵と対峙した。

「……殺させないでよ」

独り言のように呟いて、踵を返す。

アルフレドは納得のいかない顔をしていたが、抑止力の『裏切ったら殺す』が効いたのだろう。すんなりと引き下がった。尤も、彼にしてみれば『裏切ったらこいつを殺せる』という意味だったのだが。赤髪を掻き上げて、少女は一息に言い放つ。

「衛兵長さん、開門してくださいな」

「え、ああ、はい：！」

やや頼りなさげな声と共に、重厚な門が開けていった。

エンシェントの王都の門を出でて、野を下る。

陽が昇り始めて、丘陵に橙の線を引いた。

イザベルの首都までは、早くとも片道で二、三日はかかる。王都



から程近い農村で馬の手配を済ませ、三人は準備を完全に済ませて再び道程に行く。

馬のひずめの音が、湿気を含んだ草原に木霊した。

先頭に行くのは、黒髪の青年。ギルフォンスⅡハインケルと名乗った元刺客。数奇にも、背後に行く赤髪の少女を殺そうとした相手だ。

フードで朝の日差しを遮りながら、ヴィナヘイムは手綱を握る。慣れない馬だが、乗馬が全くの初心者というわけではない。その上、本来ならば戦に借り出される筈の戦馬を内密に下ろしてもらったのだ。これは王の配慮に感謝する他はない。

——これなら、結構早めに到着出来るかも……

淡い希望。同時にイザベルに着くのを先延ばしにしたい気持ちもある。矛盾だ。

エンシエントの王から託されたイザベルの王への手紙は、無くさないように丁重に布に包んで少女の上着に縫い付けてきた。肌身離さず持つておかなくてはいけない。

手紙の内容については知らされていない。

もしかしたら、降伏文か。はたまた、宣戦布告の文か。

どちらだったとしても、アルフレドとヴィナヘイムの役目は王を信じてこの『お遣い』を完遂すること。命の危険は常に付き纏う、危ない旅路。

ヴィナヘイムは、前を見据えて先に行く灰色の背中を見た。

「…ねえ」

気軽な声掛け。

「……なんだ」

「君って言うのも何だし…貴方のことは何て呼べば良い？」

これには、黒髪の青年も、後ろの銀髪の青年も僅かに怯んだ。

——あれ？

また自分は何か変なことを言っただろうか。気まづくなって補足する。

「いや、短い間だけど……一応ね」

無視されるかな、と思ったが意外にもしっかりとした答えがあった。

「…………ハインケル」

ひとまず胸を撫で下ろす。

「そう。じゃあよろしくね。ハインケル。私のことはヴィナヘイムでいいからさ」

「……………」

ハインケルは灰色の瞳で、こちらを一瞥した。

「…………何？」

「…それは、聖騎士であることの余裕なのか？」

「へ？」

ヴィナヘイムは、問われた内容が上手く理解出来ない。

——余裕？ ……って…？」

「オレは実感した。お前たちの寝込みを襲っても、オレでは間違いなく負けると…特に男の方はな」

「……………それで？」

珍しい。ハインケルを嫌悪していた筈のアルフレドが乗ってきた。

応じて続きを話す。

「女の方はそうでもないと感じたが…そもそもお前はあの時不調だったと聞いた。全快した今、オレがお前を殺そうとしても、返り討ちに遭うだけだろう？」

「…………それは、まあ」

おちおち殺されてやる義理はない。

「オレには聖霊因子を制御する力はあるが、人並み程度だ。呪印や刻印の類も持っていない。…………イザベルには、聖霊因子を扱えるお前たちの様な存在は殆ど居ない。…居なくなってしまった」

「…そうなの？」

純朴な問いに、青年は首肯する。

「だが、大軍で攻め入られたら、お前たちの祖国は間違いなく陥落する」

言い切る彼の表情は見えない。

「……だから、何なんだよ」

苛立ちを込めて、アルフレドは手綱を引く。：馬が嘶いた。いなな

「それだけの話だ。お前たちが一騎当千の働きをしようとも、国民が虐殺にあつたらそこまでだと」

淡々と語る声音に変化はない。本当に、予期した未来を語っているだけのだろう。

だから、少女は肯定も否定もしない。

「…確かに、そうかもしれないね」

「……ヴィナ？」

「うん。きっとそうなんだと思うよ。…でも」

ハインケルは僅かにくすんだ黒髪を揺らした。

「…でも？」

「良いんじゃないかなあ、それで」

青年二人はやはり絶句する。

少女は慌てて付け加えた。

「いや、その、何て言うのかなあ。…そうなんだよ。実際はそうなんだと思う。だけど、やっぱり『そうあるべき』を『そうさせない』為に私たちが居るんだよ。今じゃ確かにエンシェントは滅ぶかもしれない。イザベルのことはよく分からないけど、強いってことは分かるし。…でも、やってみないと分からないよ」

ただたどしく語る言葉は、果てしなく甘いのだろう。

しかし、少女は理想論を語っていると自覚しながらも、やはり願わずにはいられない。

『戦やってみないと』分からない可能性を。

——…そして、第一に。

「戦なんて…端から起こらなければ、一番良いんだけどね……」

人同士が争い、鬨ぎ合うのはとても哀しいこと。しょうがないことなのかもしれないけれど、やはり無用な戦いは避けるべきだと思う。…これは譲れない。

恥ずかしそうに赤髪を掻いた少女に、白い青年は嘆息した。

「……ヴィナは、ほんつとに……」

——甘い、と言おうとして、言葉を変えた。

「お人好しだ」

溜息混じりに言う意見に、掠れた声が重ねられた。

「……ああ。本当に」

前に行く、異国の青年のものだった。

目を見張って、二人の聖騎士は見詰め合う。……がすぐに目尻を下げて、少女は問うた。

「貴方はどうなのハインケル、貴方には『そうなって欲しい』ことはないの？」

「……」

馬の足音が響き、沈黙を埋める。

黒髪の青年は尋ねる言葉に答えずに、代わりに外套の襟元をきつく締めた。

「……雲行きが怪しい。……早く行くぞ」

ぶっきらぼうに発した言葉には、先程よりも抑揚があるように感じた。

> i 3 2 7 4 0 — 2 3 4 3 <

## 第十一話 野に下る剣（上）

暗い森の中に、日常では無い筈の灯りが灯る。

人の手によって発した焚き火の炎だ。

火を囲むのは数人の男女。アルフレド、ヴィナヘイムそしてハインケルの三人だ。

ハインケルの『今日はここで野宿にする』という提案により、日没頃には森に着いていた。三人から離れた位置には馬が留めてあり、鞍くらを取り払って今は寛いでいる。木に括られた手綱たずなの届く範囲なら自由に行き来出来るようにしてあるので、必要ならばすぐ近くの川まで水を飲みに行くだろう。

彼らはと言うと昼は軽く済ませた分、夕飯は重めの物を食べた。王都で調達してきた干し肉と固いパン。ただし保存性を持たせるためにどちらも加工済みだ。そのままでは固くて食べられない上に消化に悪いので焼いて食べた。火を通すと大分味は上がる。

食糧も彼らが飲むために調達した真水も、まだ余裕がある。

焚き火は半ば炭になりながらも、時折思い出したように火の粉を散らす。

小虫程の大きさしかない火の散布を眺めながら、ヴィナヘイムは譲り受けたハイト家の弓を磨いていた。本物の象牙ぞうげと似た弓の弦は細くしなり、大きさは立てかければ成人の肩元まであるだろう大弓だ。

火に照らされて淡く翳る顔は、弓を手に入れたことが余程嬉しかったのだろう。歓びの残滓が窺える。

「……思ったよりも順調だ。明日には国境を越えられるだろう」

黒髪の青年は指を弾きながら言う。

「……イザベルに入ってから王都まではどの位かかる？」

反応して問うたのは銀髪の青年。ハインケルを嫌悪し、殺意を隠

すことなかったアルフレドも、今では多少ばかりか妥協をしているようだ。

今日日、道中の的確な判断と、地理的な博識を垣間見た所為だろう。

ハインケルは、ヴィナヘイムの予想通り山賊の出身だった。イザベルとエンシエントを渡り歩いて来たという彼には、普段王都の内に閉じ困る聖騎士が持っていない情報を多く持っていた。

道中の彼の判断はどれも的確で正しい。だからこそ今迄順調に來れたのだろう。

アルフレドも事実として彼の役立ち方を知っているから、無下には出来ない。

「……でも流石に疲れちゃったな。腰が痛いかも」

困った顔で呟くヴィナヘイムは、衣服の入った袋蓑を腰元に当てがっている。：何でも、尻が痛くて地面に直接座れない、とか。

「：確かにね。明日になって酷くならないと良いけど……」

アルフレドも賛同する。

聖騎士としての嗜みとして乗馬はしたことがあるが、経験的には数える程だ。

二人に対して黒髪の青年はしれっとしている。元山賊だという過去が乗馬の熟練度を物語っているのは明白だ。

赤髪の少女は不意に弓を布に包んで袋蓑を担いだ。老人臭い掛け声と共に腰を浮かせる。

「あいたたあ……今日は疲れた。：私はもう寝る。お休みー」

「もう寝るの？」

「だって夜更かしが一番響くんだもん。睡眠不足は女の子の大敵だし……」

言いながら、焚き火からやや位置を置いた森の木の下に陣取る。

彼女は日中馬の鞍に駆けていた毛布を取り出してテキパキと寝床の準備をしていた。二人の青年は形容しがたい気分になりながら少女を見つめた。

「…ヴィナ……あのさ……」

アルフレドが言う前に、少女は落ちていた木の枝を取って地面に一本の線を引いた。

「これで良し。よく聞きなさいよ二人とも。……この線越えて入ってきたらぶっ潰す」

修羅場の如き物凄い剣幕で言い切ると、少女はすぐに毛布に包ま  
った。

——信用無いなあ……

アルフレドはまたもや形容しがたい心境に陥った。

——ま、当然か。

ここは王都ではないのだから。

彼女の図太さには感心するが、外部であっても常識でものを考え  
ずに土地柄のルールに順応する、という意味では正しい。

内心苦笑していると、唐突にハインケルが口を開いた。

「…お前の相方は…いつもああなのか？」

「………どうだろうな」

素っ気無く応じると、銀髪の青年も立ち上がった。

「火はお前が寝るときに消しておいてくれ。僕はもう寝るよ」

「了解した」

ハインケルが頷いたのを見て青年は踵を返し、横たわる少女を囲  
う線の向こう側に毛布を引き出した。

一度だけ、アルフレドは振り向いて問うた。

「……お前は一体どうしたいんだ？」

何を、とは言わなかった。

「………」

黒髪を伏せて、青年は顔を隠す。

「まあいいさ。お休み」

呆気ない言葉と共に、白い青年は床に沈んだ。

———どうしたい？

自分でも、どうしたいのだろうとは思う。

——よく、分からない。

彼らの案内を終えたら自分は用済みだ。その後のことは知らない。

敵国の主城に向かうのだ。殺されたって文句は言えない。寧ろ危害を加えないで返してもらえる可能性は皆無に等しいのではないか。

そうなる、成る程。

——オレはあいつらを殺す手助けをしているわけか……

実感すると、何故か心持ちが重い。

牢屋に居た時からのもやもやは、一向に無くなる気配を見せない。ヴィナヘイムを見たときに感じる、違和感も。

そもそも自分は、何故この者たちの手助けをしているのか。今からでも、寝込みを襲えば良いというのに。そして自国へ逃げ帰れば良い。

だが、それが無理だというのも承知している。

——浅はかだな。

返り討ちに遭うだけだ。

青年は自由になった両手を見た。昨日ならば手枷が嵌められていた。有る筈の物が無いのは、今朝、少女が青年の手枷を自らの聖剣で断ち切ったためだ。

——理解できない。

敵を野放しにするのと何が違う。

あれが強者の余裕なのか。：違う気がする。あれはそんなものじゃない。

——あれは……

深い思考の海に沈んでいた青年は、けれど外部の異変に気がついた。

長い間野を駆けてきた、彼だからこそ感じる事が出来た微細な変化。



——もしかして……

「居るのか……『聖霊』が……」

青年の眩きは、誰にも聞かれることなく闇夜に消失した。

## 第十一話 野に下る剣（中）

水音が響く。

夜はまだ明けていない。辺りはまだ暗い時刻だ。

川辺で布を濯いでいた赤髪の少女は、自分ではない何者かの気配に咄嗟に後ろを振り返る。

木の陰に半身を隠してこちらを窺うのは、灰色の外套を身に纏った影だ。

「……………」

無言の返答に、ヴィナヘームは吐息混じりに胸を撫で下ろす。

「…ああ…吃驚した…居るんなら言つてよ…」

「何をしている？」

ハインケルは簡潔に問う

「ああ。私ったら旅の荷物少なくしようとして、衣服あんまり持つて来てなくてね。……でも二、三日間も同じ服着たくないし…水浴びしたついでに昨日来た服洗っちゃおうって思い立って」

「…今の時刻にか？」

「当ったり前でしょー。下着とかも混じってるんだよ……て、こっち見たら殴るから！」

青年は言われた通りに木の陰に背を預けて、少女から視線を外した。

その間に少女は川面に揺れる衣服を回収して、それらを布に包む。…それをさり気無く木の枝に挟み置き手を空かせた。

「…はい、もう良いよ」

服の袖口を結んで短くしていた丈を解き、少女は腰を拳で小突く。彼女の赤い髪や肌が湿っているところを見ると、水浴びした後というのには本当なのだろう。野を下る旅は辛いことが多い。女性であるし、彼らよりも衛生的な面や気持ちの面の問題もあるに違いない。

「実はあんまり眠れなくて：暑いからかな：中途半端な時間に行動開始しちゃったよ」

暗闇の向こうで、少女は笑う。人相は余り視認できなくとも気配で分かる。

「：ハインケルはどうしてこんな時間に？」

「：：：聴こえるか？」

「え？」

疑問を発すると同時に、ヴィナヘイムの耳に音が届いた。音の正体は、長く尾を引く咆哮。

どこかで聴いたことがある。対象を震わせる雄雄しき声。：何故今迄気がつかなかったのか。それとも気がつくことが出来ないようになっていたのか。

「：何、もしかして狼：？」

「やはり聴こえるか」

「どういうこと？」

「そのままの意味だ」

咆哮は鳴き響きながら、音量を増していく。

「近付いて：来てる：？」

「：まさか、まだ『聖霊』が残っていたとはな：」

「どういうこと：？」

問い掛けの台詞を反芻する。

——聖霊って……

聖霊は、大昔に滅んだ筈だ。だから今はその因子しか残っていない：：

「人里育ちの者はあまり知らないだろう。：聖霊はまだ確実に存在する。まさか：こんな辺境の森を住処にしているとは思わなかったけどな」

「貴方：聖霊に逢ったことがあるの？」

「一度だけ」

ヴィナヘイムは絶句した。聖霊と呼ばれる何かは、竜や一角獣、ベガサス

小人族と並ぶ伝承の中の生き物だ。

姿形の伝え聞きは全く残っていないので、会う人により姿を変えらるだとか、透明な存在で人には感知は不可能なのだとも謂われてきた。

「…冗談、よしてよ…逃げないで…」

得体の知れない存在と真っ向から向き合うほどに無謀ではない。

——が、少女の焦燥と反比例して、青年は覚悟を決めていた。

「……対の聖騎士を起こして来い」

「え…？」

「逃げることは無理だ。この森を抜けなければ巻くことは到底不可能」

止めの一言。この森は国境付近に広がっている。川を下流に沿っていけば出られるが、二、三里は先の話だ。他の道は危険だから通るなどハインケルにきつく注意された。

逃げ場は無い。

「…隠れるとか……」

「相手は聖霊だ」

「……う…」

聖霊は万物の流派の始まりにして、万物を構成する初まり。…聖霊因子を扱う上での初歩の初歩だ。

狼の鳴き声は近くで響く。

——嘘でしょ…

嘘であって欲しい。

…と、茂みから白い影が浮上する。

「…ああ、くそつたれ。人が寝てるときに……」

「アルフ！ 大変なの！」

「分かっている。狼だな。従犯獣め……」

嫌悪感を濃く見せる銀髪の青年。少女は思い出した。家筋がエンシェントの国教の信者である彼にとって、宗教で悪魔の象徴である狼や蛇の類は鬼門だった。狼と出くわせば切り殺しかねない組み合わせ

わせだ。

——やばい。嫌な予感しかしない……  
背中に冷たい汗をかく。

「……そんな……どうし……」

少女が回れ右をしようとした瞬間。一際大きな咆哮が聞こえた。  
……間違いない。すぐ背後から。

「……………」

息を吞んで振り返ると、川岸に何か居る。闇夜さえも無効化する  
銀の毛並みの光沢は、波打って波紋を広げる。

木立の間から出でてきた存在は、ゆっくりとこちらを睥睨した。

『……人の子らよ。我が圏域に何の用だ』

頭に直接響いてくるような声。

向こうの川岸には、大きく美しい一頭の銀狼が立っていた。

——何、あれ……

おかしい。何故人の言葉を喋っているとか以前に、あの存在は  
何なのだ。

——『認知』出来ない……？

居る、間違はなく。存在するのに。

まるで蜃気楼。まるで陰影。まるで白昼夢。まるで……『不在』

——本体はどこだ？

『……答えよ。人の子らよ』

やはり銀狼は炯眼でこちらを見ている。川を隔てているというの  
に、一息に喉笛を噛み千切られそうな威圧感。迫力。

ヴィナヘイムは喉を嚥下させてから誰に尋ねるでもなく

「……聖、霊……なの？　これが……？」

『……いかにも。我が圏域と知っての狼藉かと訊いている………答え  
よ人間！』

「……………」

人語は、咆哮と相成った。鼓膜が突き破られそうな衝撃が三人を襲う。

風が巻き起こり、森の木の葉を揺らす。嵐の中の如き激しさ。即ち怒涛。

ヴィナヘイムの腰に吊られた剣帯が、風よって擦れ合う音を立て…突如、二人の男女の剣帯に吊るされた聖剣を見て、狼は目を見開く。

『――汝ら、聖騎士か！』

「え…？　へ、あ、…はい！」

少女は条件反射で間拔けた返事をしてしまった。

『聖騎士が、何故王都を離れるか』

「貴方は…聖騎士をご存知なのですか…？」

『…良いだろう。ハンデットの子らよ。何も伝え聞かぬ聖騎士の眷属よ。お前たちの系譜の役割は、唯一つ。王都を出ないことだというのに』

「…え？　でも…私たちは…」

『王都の守護…よもや目に見える目的だけとは思うまい。聖騎士よ。お前たちの本来の役目は何ぞや』

「それは……」

来るべき、聖戦……

『――そう。哀れな王の末裔。彼の世祖は今に何を伝えたというのか。…否、承知して伝えておらぬのか。…人間の考えることは分からぬ』

「貴方は…一体…」

『我。汝が風見し十六夜を明く使徒…リベリオン』

「その、宣誓……」

驚いたのは兩人。

聖騎士の、誓いの条文。自分たちが、聖騎士と成り得る闘技大会で告げた祝詞。

「何故…その、台詞を……」

『私の存在意義は未だ果たされぬ。…だが、しかと心根に刻めよ聖騎士。聖戦は来るべき未来。…過去の清算の為にあるのだから』  
銀狼は大きな体軀を揺らし、後ろ手へ回った。僅かに銀の身体に影が射す。

ヴィナヘイムは反射的に叫んでいた。

「待って！」

『時は待たぬよ。ハンデットの末裔よ。…次に見える時は戦の渦中と心得よ』

狼の声は相変わらず響き、霞が懸かっていく。  
だ——め。

このまま『アレ』を行かせてはいけない。

心は着いていくのに身体は離れていく。この感覚を自分は以前も味わったことがある。

——ああ。まただ……

また、手が届かない。

## 第十一話 野に下る剣（下）

目覚めは殊更に重く……三人が全員が皆、そうであつたらしい。馬に揺られながら、傷む腰を酷使して進む。

一昨日の夜のことについて、口を開くものは居ない。言葉にしてしまうことで、実感が出ることを恐れているのか。

聖霊——狼——聖騎士……

繋がりそうで、繋がらない。

根本的に、あの狼の言うことをどこまで信じればいいのか。気がついたら、全員が川辺で気を失っていたのだから。

夢と片付けるか。：内容が内容だけに幻想ではないだろう。

信じるか。：現実的な論法で説明出来そうなことは一つも無い。

決着がつかないままに、日を重ねる。

昨晩は何も起こらなかったし、今だって現実には現実らしくある。

ただ、旅路のみが埋まっていく。

エンシェントと西に位置するイザベルとは、両国に森を挟んでいゝ。森の中ほどには河川が通っており、辿っていくのが一番安全で確実な道筋なのだそうだ。

川を下って、もうすぐ一日と、半日。

そろそろイザベルの領土に入るだろう。イザベルに入ってから川は王都へは向かわず海に流れるので、ここからはまっすぐに西南へ向かわなくてはいけない。

途中ではいくつかの農村もあり、必要ならば野宿ではなく宿に泊まることも提案されていた。

この提案は、ヴィナヘイムにとっては手を振って喜ぶべきこと……なのだが。

——そういう気分になれないのって、悲しいな。



こここのところ、旅路の会話はめっきり減った。険悪な雰囲気にな  
っているとか、喧嘩をしているわけではない。やはり元凶は、一昨  
日現れた銀狼に尽きるのだ。

——リベリオン……

銀狼はそう名乗ったか。

——我。汝が風見し十六夜を明く使徒

…何故、陛下の勅命と聖剣の授与と返却のみにしか使わない宣  
誓を…

——聖戦は来るべき未来。…過去の清算の為にあるのだから  
…過去の清算とは、聖戦の真実の意味は…

分からないことが多すぎて、考えるのも嫌になる。

ただ、考えは集束しつつある。

——帰ったら、絶対に陛下を問い詰めてやる……

王の従者らしかぬ内心だが、その位しないとすつきりしない。国  
王が本当に何も知らないのなら、そこでこの問題はお終いだ。

それに……

——今は、目先のことを考えないと…

何せ、イザベルはもうすぐそこなのだから。

問い掛けは幾つも生まれた。

…けれどすぐに、行く宛てを失って霧散する。

——狼……

狼は、国教では蛇と並ぶ悪魔の象徴だ。暗い色。夜行性。頸を曲  
げることが出来ない、悪魔らしい習性。国教を信ずる者ならば、誰  
もが嫌悪する存在。

アルフレドも例外は無い。…だがあの、白い狼はどうだ。  
どうしても、悪の遣いには見えない。

——あれは、寧ろ……

聖霊と言った。聖霊は遠い昔に滅んだ。御伽噺の世界の話。浸透している史実はそれだ。しかし、史実が事実とは限らない。

…つまり不本意この上ないが

——あれが、『聖霊』

どこにでもあって、どこにないもの。

自分たちが使う聖霊因子の元形・原型・全体……

正直なところ、銀狼を前にして感じたのは圧倒的な力の差。生々しい怖れ。

怖いものなんて、もうないと思っていたのに。…大人になった途端にあんなものが現れた。

怖いものを無くすには強くなるしかない。

あれよりも強くなるためにはどうすればいい？ 何をすればいい？

——アルフレドにとっての答えは、すぐには見つかりそうになかった。

そうして聖剣と聖騎士は野を下り…

宿敵の国、西の連邦軍国イザベルは目の前に迫っていた。

## 第十二話 異国の地

国には、それぞれで特徴が顕著に表れるものがあるという。

一つに建物、衣装、食事などの見た目的なもの。

一つに思想、宗教、性質などの人の内面に表れるもの。

…そしてもう一つは…

「…人酔いするう…」

蒼い顔で呟く少女たちは、人にぶつかりそうになりながらも寸でのところでかわして行く。

奇妙な見た目だった。

二人は足元まであるコートを羽織り、フードを目深に被っている為人相や性別さえも分からない。

それでも区別がついたのは、少女が細い声音で呟いていた為だろう。

「こんなに都会だとは思わなかった…」

「ホントに人が多いね。迷子にならないでよ。ヴィナ」

少女の連れであるだろう青年は、彼女と同じコートを身に纏っているが、一般的な女性よりも長身な少女より、更に頭一つ分は背が高かった。

すれ違っていく人々の中には彼らに好奇の視線を送る者たちも居たが、ほんの少数派だった。

多少の『個性』は塗りつぶされてしまう程に、その場所には人が多かったのだ。

場所は、西の大国イザベル。人が行き来する場は、関所だ。

関所と言っても王都に入る手続きなどはなく、ほとんど好きなように人々が行ったり来たりを繰り返す。

その様は、普段閑静な場所で生活している彼らにとっては目に毒だったのだろう。

少女——ヴィナヘイムは路傍の石を蹴飛ばしながら、やっこの思いで壁際まで寄る。

青年——アルフレドはフードを摘んで上げて、大きな関所を仰いだ。  
「速いよー。もうちょっと待ってよ、ハインケルー……」  
泣き言のような少女の声。

「お前たちの速度に合わせては日が暮れる。馬は預けて来たぞ」  
灰色のコートの人物、ハインケルと呼ばれた青年は無情に言っただけを進む。

「……いいか。オレが案内できるのはここまでだ」

「うん。有り難うね。今まで」

「……一応、礼を言う」

素直に感謝する少女の言葉に後付けするのはアルフレド。

「帰りの道も必要ならば案内しよう。ただし……王城に入ったらあちらのルールに従わされるのは道理だ。……だから、良いか。オレの言う方法で安否を知らせろ」

人のざわめきの渦中で、彼らは対の聖騎士に耳打ちした。

「……うん。分かった。必ず毎晩するよ」

「……了解した」

「もし、何の連絡もなく一週間が過ぎたら、オレは自由にさせてもらう。努々忘れるな」

フードの端から覗く瞳が、こちらをきつく射る。

しっかりと兩人は頷いて、挨拶の変わりに視線を交錯させた。

「……じゃあ、行って来るね」

「……お前も、精々気を付けろ」

アルフレドの粗野な言葉に頷き返し、ハインケルは歩みを止めた。  
二人の後ろ姿が、人並みに吞まれて小さくなっていく。最後の欠片さえ見えなくなる瞬間に、彼は一人心地に呟いた。

「……どうか、無事に」

異国の雰囲気を肌で感じる二人は、物珍しがりながら前に進んでいた。

「凄いなあ、ホントに」

呟いたのはフードの隙間から赤髪をはみ出させる少女。

二人は王城へと続く道を歩いていった。

辺りには高い建物が犇き合っている。祖国のエンシェントの石造りの白い建物と違って、レンガなどを積み重ねてあり、町並みは朱系統の色に染まる。明るい雰囲気だ。

市場でもないのに道先には小売店がテントを張り、大声を張り上げて卸売りをしている。

店先の品を物色する者の中には、他国からの行商人と見られる姿も混ざっていた。

連邦国と言うのは、基本的には小国が集まって出来た国家だ。だが、イザベルの場合は、列強軍大国イザベルが周りの小国を領地にしていった結果に出来た連邦国で、厳密には連邦とも言えないのかもしれない。

戦や警備を執り行うものたちの名称も、エンシェントは国立騎士団としているが、イザベルでは国軍となっている。階級の称号も全く違うものだ。

それでも、太古のイザベルからエンシェントは派生したのだと言われるほどに、文化には似ている点もあるのだ。搾取した国の文化をふんだんに取り入れたイザベルは欠片程しか元の原型を保っていないが、両国には言論、天文学などで似通った部分も数多ある。

実を言うなれば、その部分に助けられている事柄もまた多い。

人混みをかき分けて、青年と少女は進んだ。

ハインケルの話によれば、王城は王都の奥に聳える四つの塔を見張り台とした広大な敷地の中にあるのだという。よって、外部からの来訪者は東西南北何れかの城門を潜らなくてはいけない。

このまま真っ直ぐに向かえば、北の城門に突き当たる。

眼前に直立する塔を眺めて、二人は城の堀ぞいに進んだ。

高い門は鉄の柵に閉ざされ、門の前には数人の衛兵が模範的な態度で目を光らせている。

けれど、アルフレドとヴィナヘームはさも当たり前のように、門へと歩み寄る。

気が付いた衛兵たちは、門に近寄ってくるフードに長外套という不審な二人組みを見止めるや否や、静止の声を掛けた。

「貴方たち！ これより先は……」

「こんにちは。衛兵さん。実は私たち、お使いを頼まれているの」  
フードの奥から、少女のものと思しきやや高い声音が聞こえた。

「……？ 君は……」

「私達『エンシェント』の遣いの者です。……国王からの文書を届けに参りました」

「……何だって？ そんな話は聞いていない！」

疑い見下すような衛兵の様子に、今度は少女の背後に控えていた青年が前に出る。

「信じてもらえないのなら良いですよ。僕たち聖騎士の者ですが……」

言って、二人は上着を払って中の聖剣を見せた。一本は緩い曲線を描く小太刀。もう一本は大人の身長程もある長刀。どちらも芸術品と見紛う程の精巧な意匠。二つの聖剣には、エンシェントの王家の紋章が刻まれている。

「エンシェントの遣いを卑下にあうのは……どういふことかお分かりですか？」

青年は声音に殺気を込めて、優しくに言った。

豪華な王宮に慌てた叫びは木霊する。

息を切らして警備兵の制服を乱す男は、ある人物の前で傳いた。

「王！ 王！ 大変です」

「…何事か」

執務机に頬杖を着く人物は、苛立しげに詰問した。

「…遣いがっ、エンシェントの遣いがみました!」

「それがどうした。余は今忙しい。待たせておけば良からう」

造作なく流し、男はまた机の書類を崩しにかかる。…が、その手は次の警備兵の一言で静止した。

「それが! 待たせるなら人質を殺すと!」

「……何だと…?」

「衛兵を捕まえて、脅してくるんです!」

同じ頃のアルフレドとヴィナヘイムは、門の前に立っていた衛兵の首根っこを掴みながら聖剣を抜き払い、堂々と検問を突破していた。

### 第十三話 四面楚歌

旅装の薄汚れた身なりでフードも被ったままの二人組は、ここに来てやっと人質代わりに掴まえていた衛兵を解放した。

放された衛兵は長い間首元に刃を突きつけられていた為か、腰が抜けていたらしく、他の警備兵が担いで別室に移動するに至った。

そして今、アルフレドとヴィナヘイムは謁見の間に居る。

ここに来てようやく、彼らはフードと外套を脱ぎ払った。

現れたのは白銀の髪、端整な顔立ち。白い簡易騎士服。

続いて現れたのは燃える赤髪、まだあどけなさが色濃く残る顔立ち。黒い男物の修練着。

国の最高権力者の前で晒すにしては、些か不備の多い正装だろう。

「お初にお目に掛かります。イザベルの王」

アルフレドは張り付いたような笑みを浮かべて、王に挨拶をした。

「同じく光栄に思います。イザベルの国王」

ヴィナヘイムはこれもまた、わざとらしい笑みを浮かべて言葉に変える。

彼らは、立ったままに告げていた。

聖騎士の周りには左右に六人ずつが、列を作り並んでいる。

若い者も老いた者も女も男も居たが、誰もが両二名よりは年上だ。おそらく彼らがハインケルの言っていた十二軍師なのだろう。

彼らの前方、一際高くなった段の上には座する男がいる。

剃髪に鋭い眼光を宿した男だ。鋭い目や鷲鼻からは鷹のような抜け目なさが連想された。年は壮年期を過ぎた頃か。

男――イザベルの国王は告げた。

「…主らが聖騎士か」

青年と少女は、国の最高権力者にあくまでも膝を折らずに告げる。

「はい。聖騎士アルフレド・ハンデット・フェイルコールと申しま



す」

「同じく。聖騎士のヴィナ Heim・ハンデット・ベイカーです」

彼らの後に、鷹揚に国王は問うた。

「…聖騎士は一代に一人と聞いたが？」

「失礼。イザベルの王はご存知ないようだ。僕たちは少々事情が違っているのですよ」

「…ほう。まあ良い」

王は目の陰を濃くする。アルフレドは王の機嫌の変化を歯牙にも掛けずに続けた。

「僭越ながら、本題に入らせていただきます。…この度、僕たちが参りましたのは、貴殿の文に御返しする、エンシェントの王…陛下から授かりました文書を届ける為であります」

青年は懷から便箋を取り出した。王家の判が押された唯一無二の文だ。彼らが祖国の王から預かってきた代物。そして今回の旅の目的。

イザベルの王は文を一瞥しただけで、即刻切り捨てた。

「要らぬわ。――負け犬の言葉など読めぬ」

例えるならば、打ち水のように冴え冴えと。

明らかな、あまりにも直接的な拒絶。見下し。その場に居た誰もが、空気が張り詰めた気がした。

沈黙が降りる。

破ったのは突如。青年の笑声だった。

「……ふ、あはは……ああ『やっぱり』。陛下の仰った通りだ」

「本当に。陛下は予知能力でもあるのかしら」

笑う青年に、呆れる少女。

二人の聖騎士は表情を緩めたようだ。彼らを取り囲む重鎮は更に訝しむ。

「負け犬とまで言われるとは思いませんでしたが…おっと失礼」

「…アルフレドが、ばかみたいな顔でばかみたいなこと言うから悪いのよ。陛下にも言われたでしょう？」

二人は次の瞬間、言葉を重ねた。

「「形だけちゃんとしてれば良いって」」

その場に居たものは哑然とする。

一番早く反応した、十二軍師の内の一人の男は怒鳴った。

「：貴様あ！ 陛下の御前だぞっ！」

「ああ、そうそう。文書は見てもらわないと困るんですよ。イザベルの王」

無視してアルフレドはべりべりと文の封を切った。王の文の扱いにしては乱暴すぎる。取り出し、眼前で王に見えるように広げた紙面には墨で大きく一言。

『大馬鹿野郎』……とだけ書かれていた。

「なっ……！」

アルフレドは、今度は瞳から笑みの欠片も消し去り告げた。

「イザベルの王。失礼ながら貴殿を試させていただきました」

真っ直ぐに唯一人を見詰める姿は、真摯ですらあった程だ。ヴィナヘイムも同様に嘘偽りのない表情で、口元をきつく結ぶ。

言葉を継ぐのは隣の黒衣の少女。

「エンシェントが王。私たちの陛下は仰ったんです。『聖騎士は自分の主以外に膝を折ってはいけない』：と。だとしても貴殿にとつては、たかが小国の遣いがと、さぞかし歯痒い態度だったのではないですか？」

「そして貴殿は容易いことだったのに、先程人質となった衛兵を見捨てなかった。：それは体裁ゆえですか？ 僕たちの生意気な態度では、即刻、すぐ傍に居られる十二軍師に僕たちの首を落とすように命令することも造作ないと見ます」

「そして貴殿への陛下からの文書の扱いよう：どうにも私たちには理解できないのです」

一息に語り、二人は王者の応えを待った。

すぐ左右では今か今かと主の命令を待つ十二人が居る。

王は重苦しく告げた。

「…走狗めが。…下らぬ。それはエンシェントの国王の入れ知恵か」  
「はい。私たちは陛下<sup>あるじ</sup>の為に。彼の命令だけを忠実にこなします」  
再度の沈黙が降りた。

聖剣を携える二人には交戦の意志が窺えない。丸腰ともとれる体勢だ。

イザベルの王者はやがて、観念したのか吐き捨てた。

「…：勝手にするが良い。して、主らの国王は何を望んでおる」

「休戦状態の継続を」

「…何だと？」

王は疑いの目でこちらを見る。

あちらにしてみれば、終戦の締結ではないのかと不思議に思うのも無理はない。

何故終戦ではなく、休戦なのか。

「エンシェントの王は戦線放棄をしております。終戦は望むところではない。…ただ、休戦を延長して欲しいとの要望です」

真偽を見定めようと、鷹の眼が細められる。

「…何を考えておる」

「王は、確かに貴国との決着を望んでおられます。…ただし今はその時ではないと」

「…解せぬな」

「僕もです…けれど、陛下の御心のままに僕らは在りますから」

権力者が放った言葉に青年も同意する。困った風な笑みを含ませて。王は僅かに思案した後、頬杖を着いて信託を下した。

「…良かろう」

「陛下っ!？」

辺りは一時騒然とした。

軍師の中には身を乗り出している者もいる。

「余が良いと言っているのだ。…意見の有る者は出でよ」

「……………」

威厳を持つ声に、周囲は気まずさを孕みながらも黙り込む。誰もが

納得がいていないのは明白だった。

「聖騎士。主らは久方ぶりの客人だ。丁重にもてなそうではないか」  
椰揄を含む口調。

最後まで仏頂面を崩さないままに、男は王座から立ち上がり去って行った。

## 第十四話 敵中の車輪

案内された部屋は来客用なのだろう。

今迄の人生で見たことがない位に豪華だった。贅を尽くすとはこういうことかと身を以って実感する日が来ようとは夢にも思っていなかった。

広く、洗練された空間には高級そうな家具が並び、天井まで届く窓は大きく、その向こうにはテラスがあった。

「お疲れでしょう。こちらにてお休み下さいませ。異国の方」

「……………」

女中の後姿を見送って、扉が閉められた途端に少女は一息に駆け出した。軽いステップは速度を上げ、障害物の上に乗り上げる。

ふかふかとした羽毛布団に窒息しそうな程に顔を埋めて、少女は手足をじたばたさせ

「——うわぁ！　もういやいやいやいやあああああ！

！」

天蓋付きのベッドに滑り込みをする様子はまるで子供だ。彼女の激しい暴れっぷりにはベッドのスプリングも軋む、軋む。

先刻まで国の最高権力者と渡り合っていたとは思えない程に。

「有り得ない…！　有り得ないよ…！」

——死ぬかと思ったぁ！

自分とアルフレドが弁舌を垂れている間の十二軍師の目線など、怖くて気がつかないふりに精一杯だったのだ。

——うわぁ、怖いよー！

陛下の「少しお返しをしてあげなさい」の一言命令で、自分たちは間違いなく貧乏くじを引かされた。幾らエンシェントの王とイザベルの王が知己の仲だからと言っても

——絶対、絶対に怒ってたよ………！

「うわあ。うわあーあーあーあーあーあー!!」

めいっばい叫んで、胸の中の掃き溜まりを外に放出する。  
幾分かすっきりした。……気がする。

だが何だか泣きそうな気持ちになった。これから自分たちはどうなるのだろうか。今夜あたり十二軍師とかが暗殺に来るんじゃないだろうか……

「……………」

——うう……理不尽だあ……生きて帰りたいだけなのに……

「う……ああ……」

泣きそう。駄目だ泣くな。ここで泣いたら今迄我慢してきたのは何の為なんだ。

——頑張らなきゃ。まだ頑張り続けなきゃ。

止まってたまるものか。その身を犠牲にして自分の未来を繋いでくれた人がいるのだ。

「……………」

修練着の懷を探ると、一つの硬いものが手に触れる。

取り出すそれは、蓮の花を象った髪飾り。掌に握り込み、ヴィナヘイムは熱を持つ拳を額に押し当てた。

「…負けて、堪るか…!」

刺客がなに、暗殺者がなに、他国がなに。

そんなもの、その程度のもの、どんな逆境だって跳ね返せる力が無くては聖騎士を語る資格などない。これは試練。陛下が与えた練武とは違う試練。

「…いいよ。受けて立ってやる」

どの道信じられるのは自分だけだ。

青年は荷物を下ろして、窓際へと歩む。

薄い生地のカートンと遮光カートンが二重に窓を阻む。両手で布地を掴んで除けて、夕日を身体に浴びた。

——見張りは、いないのか……

絶対にテラスや戸口に潜んでいると思ったのに。

やや拍子抜けしながら、もう一人の連れの少女のことを危惧する。彼女は自分とは違う部屋に連れて行かれた。寝泊りする客室なのだから、別室で当然なのだろうが。

——泣いてないよな。ヴィナヘイム。

一見強気に見える少女は、実は常に崩れ落ちそうな脆さを内包している。

聖騎士ともてはやされる彼女は、表を返せば何のことはない泣き虫な一人の子供だ。

それを知っているのは自分だけか、彼女が心を許した僅かな人物だけだろう。青年はその内に入る。……だとしても彼女は自らの過去のこと、自らの不安なことは殆ど語らないが。

気丈を装っている。

気を使っているのか。

——そんなもの。不用なのにな……

或る昼下がり。

いつものことのように士官学校の中庭の廊下で眠る自分を、不思議そうに眺めていた赤髪の少女。

澄んだ瞳で、心底不思議そうに覗き込む未来の聖騎士。

……彼女の覚えていない記憶だ。遠い、過去の記憶。

だがアルフレドの中ではまだ色褪せることのない鮮明な思い出。

……大切にしているのは変わりない。

陛下のためでも、国民のためでもない。

彼はたった一人の少女のために聖騎士になった。聖剣を握った。その身に印を刻んだ。

ただ一つの誤算があったことといえば、守るべき対象が自分と同じ修羅の道を選んでしまったことだろう。

どうして、彼女はこの道を選んだ。

どうして、世界は彼女にこの道を選ばせた。

——皮肉だ：

知っている。彼女は聖剣よりも花の似合う少女なのだ。ただ、あるべき幸せを拒否したのは彼女自身。

誰の所為でもない。彼女の選択。即ち決断。

彼女はすぐ近くに居るのに、彼女はすぐにどこかへ消えていってしまう一つの大きな可能性。そうならないためにアルフレドは彼女を護ると誓った。

——ヴィナヘイム。

「ばかな奴……」

呟きは誰に聞かれるでもなく、青年の心を映した。

「どうしようもない……」

——けど。

「俺が、護らないと……」

広く豪華な回廊を行くのは、数人の影。

その内、豊満な体形を男装に包んだ美女はにっこりと笑って言う。

「可愛い子たちだったわね」

「……そう思うのはお前だけだろうよ」

応じるのは皺枯れた男の声。

「あら？　そうかしら。少なくともあの子たちの聖剣と紋章には興味があるんではなくって？　……その為にわざわざ遣いをやった特別な殿方もいらっしゃるようですし」

揶揄を含む口調は一团の緊張感を逆撫でする。

「エヴァ。滅多なことを言うものじゃあないよ」

別の誰かが言う。

「フフ。だって事実じゃありませんの」

美女は悪びれる様子もなく告げ、背に流す豪奢な金髪を払った。



「本当に面白いわ。弱小国家の遣いにしては若く力も大きい。殿下の御前であれだけ啖呵を切れるのですもの。部下に引き入れたいくらい」

「…………それは、…どうでしょうね……………」

一際小さい声が反論する。

「どうしてそう言うのかしら？」

「…彼らは…：エンシェントの王に…全ての忠誠心を、傾けているように…：見えます…」

「確かに。素晴らしい心根の持ち主ね」

女性は満足そうに賛同する。

「…：彼らの…：…：刻印…：それから聖剣。…彼女の…：…背の弓も…：相当な業物…：…：おそらく、我々が触れることは、無理…：…」

「触れることさえも無理なのかしら？」

「……………はい…：憶測では、ありますが…」

途切れそうな声の次には、確定した声音。

「どの道。殿下への無礼の数々、その身を以って贖わせるしかあるまい」

「まあ。やる気ねえ。わたしも混ざりたいわ」

「やめんか二人とも。殿下は未だに判断を保留しておられる。勝手な行動は慎まれよ」

「……………」

「残念ねえ…」

くすくすと忍び笑いを洩らし、美女は謳う。

「ああ、楽しみだわ。急いていらっしゃいな。先行方」

## 第十五話 敵中の予感

一つ壁を隔てた向こうの熱気は、こちらまで伝わってくるようだった。

広い、恥ずかしくなる位の鏡と硝子張りの脱衣所。流石王宮と言うべきか、隅々まで拔かりが無い。

来客専用の施設ということも関係しているのだろうか。だとしても、一人で使うなど広すぎる空間だ。返って落ち着かない。

ヴィナヘイムはそこに居た。衣服を纏わぬ姿にタオルを隙無く巻いた彼女の前には、きちんとした身なりの女中が居た。

「もう、いいですから！　ほんとに！　出てってくださいっ！」  
赤髪を振り乱して猛反発する少女はぎゅっと前を睨む。

「ですが……」

困った風な侍女の声。有無を言わさない強い拒否。

「ですが何もありません！　……絶対に入ってこないで下さい！」

「はあ……承知致しました。では衣類をこちらで洗わせてください」  
ヴィナヘイムはいそいそと今日一日着ていた衣服を丸めて、侍女に押し付けるように渡す。

最後に念を押すように言って、布を巻いたままに戸の向こうへと隠れた。

「絶対に、絶対に入ってこないで下さいねっ！」

しつこい程に言い重ね、乱暴に浴室の扉を閉めた。

——他国ではこれが常識なの？　それとも王宮はこういうものなの？

頭を抱えながら、ヴィナヘイムは蒸気に満ちる空間に一人閉じ籠もった。戸を確かめると、残念だが内側から鍵は掛けられないらしい。

来客としての待遇は良かった。良すぎた位だ。

広い客室を与えられ、満足のいく料理を与えられ、貸切の浴場で身体を洗えるのだから。ここ数日に渡って水浴び程度しかしていなかった少女にとっては、素直に喜ぶたいところでもある。：が

――背中なんて流さなくてもいいっての……

安心してシャワーを浴びようとしたところで、いきなり侍女が侵入してきたときは驚いた。というよりは魂消た。

水の溜まったタイルをじっと見つめながら、好待遇過ぎることに返って不信感を募らす。

そもそも、自分たちは敵国の中に居る。：自覚が湧かない。夕食に毒でも盛るかと思ったがそんなことはない。先に毒見したアルフレドによってそれは実証されている。

――何だかなあ

胸騒ぎがする。

肌身離すなど言われてきた聖剣は浴室の扉の裏側に立て掛けてある。本来ならばこんな場所にまで持ち込みたくはないが、目を離れた隙に奪われても嫌だ。

十数人は平気で浸かれるだろうという大浴場。今は少女一人きりだ。

考えてもしようがないので、大人しく布を解いてシャワーを頭からふっ掛けた。少し熱いくらいだが丁度言い。何せ、昨日の今日まで冷水で身体を洗うことしか出来なかったのだから。

「ふー……」

――疲れた。

短かったが、旅路ではいろんなことがあった。元刺客の案内者。

初めての野を下る経験。隠密行動故の不便さ。……そして

――リベリオン……

あの銀狼はそう名乗った。

聖霊が既存の動物の形をとっている事実は意外だったが、だとしてもあの狼から滲み出る雰囲気は老獪な威厳を持っていた。言われれば納得してしまう。

問題は、聖霊がまた残っていたことだろう。元山賊のハインケルに至っては一回だけ出会ったことがあると言っていた。彼が出会った聖霊は大きな鳥の形をしていたという。

——信じるしか、ないんだよね……

信じたくない気もあり、少しだけ好奇心を擦られる部分もある。けれど、あれは軽薄な気持ちで関わって良いものではないのだろう。本能在そう告げているのだ。

悶々としながら髪から身体の順で洗い、泡を流しきる。幾分かすつきりとした気分で浴槽に浸った。

足を伸ばし有り余る風呂など、滅多にお目に掛かれない。

手を天井に突き出して長く息を吐く。誰も居ない場所で小さく呟いた。

「なるようにしかならないかなあ……」

「そうそう。人生ってそういうものですわ」

——なのに、返事があった。

ヴィナヘイムは壮大に驚愕して飛び去る。

「ひやあ！」

「あら。酷い態度ですわ。わたし、さっきから居ましたのよ？」

丁寧な口調のする方を見ると端の方に人影が見えた。

女性だ。金の髪を結い束ねて上げ、平然として浴槽に浸かっている。局部は湯に隠れているが、豊満な体形は同性であるヴィナヘイムが見ても艶かしい。

王城の人だろうか。だとしても客人専用の浴室に居るのはおかしい。他の客人？ 有り得ないわけではないが可能性は限りなく低いだろう。

当たり前の疑問を口にする。

「あ…貴方は……」

「失礼。申し遅れましたわ。わたし、十二軍師のエヴァールブリュンスタットと申しますの」

——十二軍師!?

確かに、今日日謁見の間で対峙した十二軍師には女性も混ざっていた。人相までははっきりと確認していない為に照合は出来ないが、彼女が居た気もする。

彼女は何の躊躇いも無く湯から立ち上がり、少女の方へと歩み寄ってくる。

幸い、彼女の身体は布に包まれていたのだが……

——負けた……大きさも……バランスも……

まず体形の圧倒的な戦力差を見せ付けられ、ヴィナヘイムは呆気にとられる。

二十歳にも満たない少女と、円熟した美女との間に戦力差が出来るのはしょうがないことなのだが、仮にも女の子であるヴィナヘイムの心に大きな傷を付けるには充分だった。

何時の間にかすぐ隣に居たエヴァが完璧な笑みを浮かべる。

「以後、エヴァと呼んでくださいな。ヴィナヘイムちゃん」

「……あの……」

言い難そうに少女は濡れた唇を開いた。

「何かしら？」

美女は余裕の笑みを浮かべる。

次の瞬間、ヴィナヘイムは叫んでいた。

「どうしたらそんなに胸がおつきくなるんですかっ!？」

「……」

奇妙な間が降りた。

暫くきょとんとしていたエヴァは、突如として肩を震わせる。

「……ウフフフ。面白いことを訊くのね。初対面でそんなに直球な質問をしたのは貴女が初めてだわ」

「あ……ごめん、なさい……」

体形的ハンディキャップは誰にでもあるものだ。大人の身体つきには程遠い少女はその意識も他者より強く。

しかし言葉に出して尋ねる必要まではなかったのだと、少女は羞恥から俯いて赤面する。

金髪の美女はどこか嬉しそうに少女の様子を見

「貴女、可愛いわね。：いいでしょう。その可愛さに免じて一つ良いこと教えてあげる」

「え……？」

「今晚は、疲れてるでしょうけど深寝入りしないことね」

エヴァは告げ、浴槽から上がっていく。素通りできない言葉に、少女は問い掛けで追い駆けた。

「…それって、どういう意味……」

「怖い狼さんが、貴女を狙っているみたいよ？」

それっきり美女は何も話さずに浴室を後にした。

残されたヴィナヘイムは、浴槽に顔の半分まで沈めて泡を吐き出す。

——やばい。上せそう。

ともかく、まだすっかりと安心出来るわけではなさそうだった。

## 第十六話 夜毎の演舞（上）

湿っぽくて程固いベッドに慣れていると、ふかふかな布団というものはどうにも居心地が悪い。

これで寝返りは何度目だろうかと青年は思う。

逐一数を数えているわけではないが、少なくとも何十回はした。

——これじゃあ、床で寝たほうがマシだ。

決意して青年は寝台から降りて床に横になる。といっても、床にも厚い絨毯が引かれていて、身体当たりに痛さは感じない。

こっちは疲れているのだ。体裁など気にしていられない。その上今晚くらいはゆっくりと眠らないと、人間としての通常運営が儘ならない。

朝、起こしに来る侍女は驚くだろうが、知ったことか。

アルフレドは思い直し、床にシーツ一枚で寝転がった。あまりにも無防備な寝姿である。

「………」

一度は閉じた瞼が、再び開けられる。

：どうにも、近頃の自分は睡眠を阻害されることが多い。

——わざとか？

ならば元凶には然るべき私刑に処さねば気が済まない。

銀髪の青年はむっくりと起き上がり、枕元の長靴に手を掛ける。

目を擦って、豪華な部屋の窓の向こうを注視する。

堪忍袋の緒が引っ張られるのを感じながら、彼は粗暴に投げかけた。

「……おい」

返事は無い。

「おい、居るんなら隠れてないで出て来いよ。殺気が分かり易過ぎだ」

テラスへと目を向けて、青年は一直線に歩んだ。

躊躇い無くカーテンを除けて、窓も蝶番を取り払って開ける。

「…逃がしたか……」

夜風が額に降りる髪を撫でる。月の無い夜だった。

踵を返して室内に戻ろうとした――刹那。

頭上から男が降ってきた。

「……っ！」

屋根の上から斧を振り上げて降りたつ姿はまるで戦鬼。白髪を振り乱して渾身の力を込める。

アルフレドが紙一重で避けていなければ、今頃は無様な肉片が崩れ落ちていたことだろう。

――危ないなあ……！

襲撃した男はゆらりと青年へと振り返る。彼が着地ざまに戦斧を叩き付けた場所には切片と大きく拉ひしゃげた後がある。生身で喰らったなら一発であの世行きだ。

テラスから出でて野へと降りた青年は、間合いを離して聖剣の鞘を抜いた。確認の意味を込めて呟く。

「…十二軍師か……」

「………」

白髪を振り乱す老齡の男は答えない。代わりに斧を持って突進してきた。

――それが、答えか！

青年は真っ向から斧を受け止める。

火花が散って、鼓膜を張らす衝撃が襲う。

「……！」

ぶ厚い斧を薄刃の長刀で受けきって、青年は口端を上げた。

ちりちりと刃が削れる音と共に引き上げて、返し技へと転ずる。

頭上に掲げた腕を男の開いた脇に叩き込む。

しかし、肉を裂いた実感はない。

手応えは硬い。斧で受け切り男は充血した目で青年を睨む。その



表情はまさしく鬼の形相。

けれどアルフレドは戦きもしない。

逆に、笑みを深くして剣を弾く。

——良い、良い闘いだ。

これこそが、闘争。闘劇。闘演。青年は歓喜を胸に秘めて、喜びを刃に込める。

「はあ——！」

裂帛の気合と共に剣を切り込む。

強かに剣を受ける男は白髪を振り乱して剣を押しやる。力の奔流は空気を切り裂き音を立てた。

鏖競合いに持ち込み、純粋な力比べへと移る。

閃光が弾けて、離脱。

すぐさまに相手の懐に飛び込む。

戦いに必要なのは何だ。：簡単だ。力、速さ、そして飽くこと無い戦いへの執着。

どんな下手な者でも、技量が足りていなくとも、刃が人に当たれば血を流す。致命傷を決れば死ぬ。人間とはそういう生き物で、武器はそういう風に作られている。

だから、誰もが圧倒的な速さと力には蹂躪される。

差がない達人同士の戦いには、これに様々な要素が加わって天秤が動くのだ。

「————っどあぁぁ！」

男は斧を振りかざす。

青年は踵に力を込め、寸分の間に横合いに跳ぶ。

半円を描いた軌道は男の胸元を舐め、顎先に突き付けられた。

男の首を薙ぐ、直前。

「——そこまでだ」

凜とした声が時を止めた。

アルフレドは剣を相手の首筋に当てたままに、新たな声の方向を見やる。

そこには漆黒の髪に、黒い瞳。片目に傷を持つ男が立っていた。片腕を不自然に垂らした男は、今まさに落とし首の直前の老人へ目で合図する。

冷たい声で銀の青年は問うた。

「…あんた等、十二軍師だな？」

「……………」

返事が無くとも、アルフレドは確信した。

何の予備動作も無く、刃を白髪の男から外し鞘を回収する。老齡の男は最初に驚愕の心中を表情に表し、充血した目で青年を睨む。

踵を返すと、漆黒の髪を持つ男と共に凄んで闇に同化していった。

「…聖騎士。この借りは必ず返す」

地獄の底から響くような、ぞっとしない声。

アルフレドは背後に聞きながら、鞘に聖剣を収めた。

## 第十六話 夜毎の演舞（下）

浅い眠りの中、夢と現が混ざる位置。

——とん……とん……とん……

規則的な物音は、段々近付いてきた。

——……と……と……と……と……

すぐ、背後。

背後に、何か居る。

「っ………！」

ヴィナヘイムは気配のする方と逆方向に寝台から転がり落ちた。

無論、わざとだ。

膝を立てて、ベッドに立てかけておいた聖剣である小太刀を掴む。

「……誰っ！」

低い体勢で辺りを窺う。昼間は高級そうに見えた家具類は、今は形を齧めて輪郭だけが浮き上がる。刀剣の鯉口を押さえながらにゆっくりと立ち上がる。

と、首裏に冷たいものを感じた。

同時に、よく響く声が項を撫でる。

「動くな」

「……！」

刃が、数ミリ首に食い込む。鋭利な切っ先が。

「聖剣を渡してもらおうか。ヴィナヘイム・ハンデット・ベイカー。」

……それから、お前の左腕もな」

——ほーら、言わんこっちゃない。

こうなることなど、分かっていたのだ。何もわざわざあんな美女に示唆されなくとも覚悟していた。

「……嫌だと、言ったら？」

「どの道頂いて行く」

冷たい声。即答だ。

ヴィナヘイムは聖剣をゆっくりと五指から放し……  
落ちる瞬間にベッドのシーツを巻き上げた。

弾指の間に、彼らの視界は白に染まる。はためく白布は波を描いてゆつたりと舞い、ヴィナヘイムは塞いだ視界で即座に中段蹴りを見舞った。

手ごたえが足裏に伝わる。…が、すぐに消失した。

相手が受身を取ったことは見えなくとも分かる。瞬間、布を貫いて剣先が現れた。

咄嗟に距離をとって、彼女はそれをかわす。

男は剣を一振りにして、串刺したシーツを端に捨てる。

その場に居たのは一人の壮年の男性。

暗い室内でぼやけてみえる容姿は、尽く黒い。漆黒の黒髪に黒い目。ただし双眸は片方が閉じられている。目を凝らして見ると、彼は片目に古い傷痕を負っていた。隻眼だ。

男は自らの得物を握り込んで、間合いを確かめた。

異様な武器だ。

二枚刃の直剣。柄近くには小さく施術文が刻まれている。鋭利な切っ先は、斬ることよりも決ることに特化しているようだ。

アルフレドの持つ長剣と並ぶ程に長い刀身。重さもあるだろう。ヴィナヘイムの抜刀剣で応じるには押し負けてしまう。些か不都合だ。――て、そんな悠長なこと言ってられないけど…

やれることをやるまでだ。寝首を掻きに来たのならば、多少の抵抗は相手の抗議の種にならない。

刀剣に指を沿えて、擦り足で間合いをとる。

応じるように男も片腕で剣を持った状態で半身を前に出しながら、円を切る。

片腕の刻印が僅かな熱を孕む。

先にくびきを外したのは赤髪の少女。

一息に前に迫り出して、男の眼前に現れる。足を引く体捌きで避け

た男は相手の背に刃を叩きつけようとするが、振り返った少女の受け刃に無効化される。

力負ける前に少女から鎬削りを離し、二人の距離は空く。

広いとはいえない一つの室内だ。何も考えずに剣を振るえば自壊する。制約を加えられた条件下での戦いは、少女にとっても襲撃者である男にとっても久しい。

よって、本能のままに武器を振るうなど言語道断。

——やり難いな……

気を張り詰め、五感を研ぎ澄ませて、反射の回路を原始に返す。ヴィナヘイムの澄んだ瞳はまるで、ただ相手の所作だけを捕らえるレンズ。闇の空間で一際存在感を放つ。

「……っ」

直感が足を前に押し出す。

途端に、顔横を貪欲な刃が難いだ。冷たい風が頬に当たる。

咄嗟に足を抜いて、その場にしゃがみ込み返し技をやり過ぎず。体を転がして離脱すると、追ってきた断頭刃を受け止める。腕力を込めると、剣全体から聖霊因子の奔流が舞った。

「————く」

上方から圧搾機の如く伝わってくる力を流す。

：けれど、それも限界があった。

「——はあっ……」

力を斜めに掛けて、相手の剣の軌道をずらす。

踵に、膝に、足全体に気を込めて、立ち上がるのと同時に一気に切り込んだ。

華の香りが舞う。

聖剣の軌道は男の耳を浅く裂いて、けれど突いた瞬間にヴィナヘイムの体を衝撃が襲った。

「か、は……」

腹部に強烈な圧力。

男に蹴られたのだと理解するのに、僅かなタイムロスが生じた。

それは常人からすれば刹那の対応であったが、相手の男にとってはまたとない隙。

胃の中の物を吐き出しそうになりながら、迫ってくる刃をか辛うじて回避。

後ろに跳んで、距離を稼いだ。

「はぁ……っ……う……」

逆流しそうになる胃液を飲み込んで、片腹を押さえながら立ち上がる。

——効いたぁ……今の……

内臓を痛めていても何らおかしくない。肋骨が折れていないことが救いだっただ。がちがちと、顎が痙攣して歯が鳴り合わしそうになるのを抑える。

「……やってくれる、じゃない……!」

大丈夫。

喋れる内は、まだ余裕がある証拠だ。

「……」

男は二枚刃の剣を構え無言に告げていた。更なる闘争を、と。ヴィナヘイムは無理に立ち上がり、腹部を押さえる手を離れた。

——きつい。

これは……死ぬかもしれない。少なくとも、あちらは殺す気できている。

けれども、恐怖を抱いて怖じ気づいたら負けだ。

ならば、こちらでも死ぬ気で行かなければ。

苦い、胃液の混ざった唾を吐き捨て、刀を収めた。腰を僅かに沈めた抜刀術の基本体勢。

「……っは、ぁ」

——次で、決めないと。

死ぬ。ただ現実として。数十秒後に自分は死ぬ。

ぞくりと背中を這うのは死の恐怖か。それとも命を賭した戦闘への慄きか。

——構うものか。

ヴィナヘイムはここに居る。そして、これからも。

剣鞘が鈴の音を立てた。

迅雷は交錯し、刹那に勝敗は決した。

「……………ほう」

男はここにきて、初めて声をあげた。賞賛の声を。

黒髪の男の片腕には、一直線になぞる剣太刀から血が迸っていた。掌にまで落ちた血を見て男は些細に口元を吊り上げると、振り向かずに部屋を横切った。

背後で少女が倒れこむ音がする。

「う……………くあ……………」

息も意識もまだある。身を振って激痛に耐えているだけだ。

血は一筋も流れていないが、先程男が蹴った位置がまた痛み出したのだろう。そもそも、痛みを鬼気迫る気合で押し込めていたのだ。無理は無い。

男は少女に一瞥をくれると、窓からテラスに降りる。

黒い後ろ姿はすぐに闇に同化した。

残されたヴィナヘイムは、赤髪を床に流して腹部を抱えた。

——ああ……………どうして……………

今なら止めを刺せるのに、そうしないのだろう。

攻撃の痛みは尚も身を苛み、けれど痛覚は緩やかに下降していった。——でも……………

「勝った…、の…?」

こちらは腹部への一蹴。あちらは片腕への斬撃。

計れるものではなくとも、相手に痛手を負わせることは出来た。

「…なら、いいや……………」

疲れた。

きつと今日はもう、自らの足で立つことも出来ないだろう。

「……………お休み、なさい……………」

誰にでもなく呟いて、少女は瞼を閉じた。





## 第十七話 焦心の朝

仏頂面を崩さないままに少女は告げた。

「……要りません。入りません」

「困ります…何か頂いてもらわないと……」

侍女は何度目かの困った声で反論する。けれど巖の如き少女の意志は揺るがない。

「入りません。ていうか食べたら吐きます」

「……そんなこと…仰っても…」

侍女が困るのも無理はない。

昨日からずっと、来客はこの調子なのだ。風呂場で背中を流すと言うと拒否し、差し出した洋服も全てが『うっとおしい』との理由で跳ね除けていた。現に今彼女が着ている服も、出せる服の中で一番簡素な男物の黒い上下の服だ。加えて朝になったら朝食を抜くという。

王城では来客は丁重にもてなすようにというのが慣例だ。だが少女の場合は気を遣えば逆に鬱屈がり、簡素なものを好む。放っておくという態度をまさしく体現しているのだ。

今迄こんな訪問者は居なかった。よって侍女は心底困り果てていた。取り敢えず、即物的で最高級な待遇をしていれば、これまでの訪問者は満足して帰って行ったというのに。

「何か、別に私なんか胡麻擦らなくてもいいですから。他の人たちの世話をしてください。それはもう心置きなく」

…終いにはこんなことを言い出すのだ。

「…では、せめてお茶だけでもお召し上がりになってください。王宮で育てているハーブティをご用意致します。少しでも気分が良くなられるように」

「……分かりました」

少女は、自分に負けず劣らず頑固な侍女の態度に根負けしたのだから。渋々に要求を呑む。

侍女と少女の二人は来客用の食堂に向かった。食堂と言っても会食用に設えた特別な部屋で、広さと豪華さは他の部屋にも引けを取らない。

広い空間に出ると迎えるのは、長い卓に一寸の狂いもなく並べられた重厚な椅子。銀食器。奥の席には見覚えのある姿が座していた。

少女――ヴィナヘイムは食堂に着いた途端に放心した。

「……何で、居るんですか……」

ヴィナヘイムの呟きに、その人物……男物の軍服に凹凸の激しい体を押し込んだ円熟した美女は、飲んでいた紅茶から唇を離して笑顔で手を振った。

昨日の晩以来だ。彼女……エヴァ・ブリュンスタットは悪びれる様子もなくそこに居る。

「お早う御座います。よく眠れたかしら？　ヴィナヘイムちゃん」

「……………は、あ……」

どうしてだろうか、頬が引き攣る。

少女の表情を見ても、和やかに彼女は続けた。

「……無理しなくても分かっているわよ。昨晩はユナイトとヘルカインがお世話になりましたわ」

「……………？　それって……」

言葉の続きは、食堂の入り口に立つ青年が発した。

「成る程。貴女の差し向けですか……」

アルフレドは靴音を鳴らして少女の隣に並ぶ。

「もしかして、アルフの所にも来たの……!?」

「ああ。……一体どういうつもりですか？」

青年の詰問に、女性は一息置いてから話す。

「どうもこうも御座いませんよ。殿方が勝手になさったことですもの。わたしに非を問うのはおかしいのではなくって？」

言って、全くの無音で紅茶を啜る。

「でも、貴女だって十二軍師だろう」

「ええ。：ですが、十二軍師と言うだけで、誰もが誰とでも仲が良  
いというわけではありませんの。寧ろ敵対している者や、腹の内が  
窺えない者同士だって多いのですから。今回のことは：予期してい  
ましたが、時期尚早な者が勝手に突っ走った結果ですわ」

他人事よろしく語る彼女の言葉は、嘘偽りない本音のように思えた。  
エヴァはあまり肩書きに拘らない性格なのかもしれない。

「貴方たちを襲った軍師は：黒髪に隻眼の方がユナイトⅡクロスア  
リア。白髪で老いた方がヘルカインⅡファブーニルと言う名ですわ  
よ。二人とも戦果による昇級をした猛者ですわ」

「そういう貴女は？　：ヴィナとは面識があるようですが、僕はま  
だ紹介を受けていませんよ」

「わたしとしたことが：とんだ失礼をしてしまいましたわね。わた  
しは十二軍師のエヴァⅡブリュンスタット。父の代を継いだ軍師で  
すので、力の程は高が知れていますが：…」

アルフレドは一步踏み出して追求する。

「嘘をお吐きにならない方が良い。：貴女の腰にあるその施術武器  
は何ですか？」

視線の先には、女性らしい腰元に吊られた鎖があった。

「：フフ。流石は他国の聖騎士ですわね。：この縛鎖は我が家の家  
宝ですわ。銘は『ラムダ』……聖霊因子の効果は『軌道』。でも今  
は制御を掛けていますの。：少しは安心して頂けたかしら」

銘がある施術武器は二つの条件が付け足される。

一つ、百年以上前に造られた物。

一つ、聖霊因子の効力がずば抜けて強いもの。：この二つを満た  
す物だ。この規約はイザベルであれ、他国であれ変わることはない。  
銘は語っていないものの、ヴィナヘイムとアルフレドの聖剣：そし  
て王家に受け継がれる皇剣・天剣も、真名である銘があり勿論この  
類に入る。

「やっぱり、施術武器遣いだったんですね……」

ヴィナヘイムは納得して頷く。…と、目を見開いた。

「…もしかして…あの、昨晚の…ユナイト、さん？ あの人の武器にも強力な施術が…？」

「その通り。彼の剣は二重刃でしたわね。聖霊因子の効果は『重複』…銘は『インフィニティ』。わたしのラムダとは相性が悪い武器ですわね。彼のものにも制御が掛かっていたのではないかしら？」

饒舌に喋る彼女に、青年はいぶかしの念を向ける。

「…何故そこまで教えるんですか。身内の情報でしょう」

「フフ。だってわたし、ヴィナヘイムちゃんに勝って欲しいのですもの」

悪戯っぽい妖艶な笑みを浮かべ、エヴァはティーカップを受け皿に置く。少女は曖昧な返事を返した。

「……好意は、嬉しいんですが…」

「ヘルカインは神出鬼没だけど、ユナイトは何時も修練場に居ますわよ？ …再戦なら自由にすると良いでしょう」

後ろ手に言って、二人が引き止める間もなく、美女は颯爽と去っていった。

## 第十八話 再戦（上）

一人の男が、重厚な建物の中に居る。

その場に居るのは彼一人だ。

礼装用の称号や鎖が取り外され簡素になった黒い軍服に、刈り込んだ深い黒髪。片目には縦一文字に亀裂が入っており、閉じられている。…隻眼だ。

腰には緩く湾曲した長剣を携え、彼は空間の中心に移動した。

四方を石作りで囲まれた部屋だ。窓はあるが、硝子<sup>ガラス</sup>は嵌まっていない。

訓練用の部屋だった。

主に師範との稽古に使われる場だ。ただし、普段からこの場に入りする者は少ない。

今在る黒髪の男：ユナイトⅡクロスアリアが常用的に鍛錬場を主に使用していたからだ。

ユナイトは鞘に納まらない剥き出しの長剣を眼前に掲げた。禍々しい輪郭を宿した、黒みが掛かった銀刃の得物。二重刃は絡まりあって、剣先では一つになる。

刺突ならば一刀の釘となり。

斬撃ならば、二振りの剣と化す。

聖霊因子が初激を生み、余波が重なり連激と相成る。

それが、彼の施術剣……インフィニティの名を与えられた百年来の名剣だ。

彼はゆっくりと剣を構えると、下段に切り下ろした。

僅かに空気が波動を生み、霧散していく。

一步、下がって、剣を掲げ、踏み込みと同時に剣を振り下ろす。

一挙動の素振りだ。

単調な行動を、何度も繰り返す。

インフィニティから生じる『重複』の気は辺りに流れの空気を作っていく。

「いわゆる、彼の『場』だ。」

殺陣の範囲に入ってきた物ならば、何らかの干渉を与えることが出来る。その点では抜刀術に見られる間合いと意味が似ているか。彼は黙々と素振りを続けた。

二重の刃が奏でる空切りの音は次第に大きくなっていく。技が研ぎ澄まされていっているのだ。

集中力を殆ど一刀に賭け、ユナイトは剣を振るっていた。

……そう、その時まででは。

「――見つけた」

声がした。

やや高い声音だ。声の主が若いことと、女性であることの証明だろう。

入り口から聞こえてきた声に、ユナイトは振り向いた。……と、同時に彼は施術剣で対象に切り掛かった。

刃鳴り。

「……っ！ あっぶないなあ！」

対象……彼女は驚きを見せたが、すぐに腰の刀を抜き払ってユナイトの剣を受けきった。

彼女は目を丸めた後に、笑ったようだ。

唇を浅く舐めて、少女は退避。刀剣を鞘に収めた。

「いきなり斬り掛かるなんて、ね」

「躰しっけのなっていない猟犬が」

続いて聞こえてきたのは、憎悪の混ざった男の声だった。ユナイトにとって、聞き覚えのある……

「喧嘩早い奴はどうしようもないと思うぞ……なあ、十二軍師」  
「……………」

少女の後ろから現れた銀髪の青年は、皮肉たらしい笑みを端整な

顔に載せ、口端を上げた。

少女は修練場のたたらを踏み、ユナイトへと近付く。

手はしっかりと腰の刀剣の鯉口に当てたままに

「昨晚はどうも有り難う。…ユナイト・クロスアリア軍師。丁重にお礼がしたいのだけれど。今からでもいいかしら？」

わざとらしく片手を頬に当てて言う。

彼女はその片手も刀の柄に掛けて、言い放った。

「私たち、報復はしっかりするように躰られているので」

「舐められるのも、寝首を搔かれるのももう懲り懲りなんだよね」

…彼等、ヴィナヘイムとアルフレドは氷の眼差しを以<sup>も</sup>ってして、  
軍師へと得物を向けた。

## 第十八話 再戦（下）

刺を孕む空気は、一帯に落ちる。

「夜襲なんてする人には当然、情けなんて掛けません。それに：まだ昨晚の勝負はついてない」

少女は告げ、目の前の黒い人物を睨んだ。

少女に敵意を向けられる男：ユナイトは緩慢に二名の聖騎士を片目だけ見やると、無感情に呟く。

「二対一か……」

ヴィナヘイムは刀を持ったままに眉根を上げ

「まさか。ちゃんと私だけで落とし前はつけますよ」

言葉を継ぐのは、隣の青年。

「ただし：もしヴィナヘイムに危害を加えるようなことがあったら、即刻、手前の首を撥ねる」

抜き身の長剣を肩に担ぎながら、吐き捨てるように言う。

——矛盾しているな……

どの道、二対一と何が違うのか。

否、劣勢であることよりも性質が悪い。彼らは自分が一人の相手をしている内に横合いから刺すことも可能なのだ。元凶は自らである分には、彼らの言い分も正しいのだが。

ただ、まどろっこしいのは嫌いだ。

——要するに……

簡単だ。二人分の片をまとめて付けければ良い話だ。

ユナイトは頷きもせずは無感情に言い放った。

「いいだろう」

「：先に言っておく。アルフレドは出る必要はないよ。これは私がやるべきことだから：昨日掛けられた情け分も」

決意を言葉にする、静かな声。



少女は近付いてきて、僅かに腰を溜めた。抜刀術の基本体形。『打って出る』ではなく『待つ』。『やり返す』ではなく『返り打つ』ことに特化した体勢だ。

対するユナイトも、眼前に刃を持ってくる。

所作に応じてアルフレドは修練場の壁際に寄った。暫くは傍観の姿勢でいるようだ。

銀髪の青年が、高らかに告げる。

「――始め」

途端、連激が弾けた。

一気に間合いを詰めあった男と少女は中央で刃を鳴らす。

鬨ぎ合った刃物からは熱と光が迸った。聖霊因子だ。

花の香りが舞うと共に、少女は刀剣を僅かにずらし、突きの体勢を作り出す。

男は感応して平の刃で即座に防御。

一際甲高い音が空間に木霊する。

アルフレドは二人の攻防を見ながら、客観的に洞察する。

あの男の剣…

――聖霊因子を故意に凝縮させたもの。所謂、いわゆるヴィナヘイムやアルフレドが手にしているものと同じく施術武器と呼ばれるものだ。

しかも、銘があるとなればかなりの業物。

固有の施術制御は発動されるだろうし、あのユナイトと言う男でなければ使いこなせない荒馬だろう。それは彼の身のこなしと一体化した剣技を見ていれば、あの剣が使い慣れていることは分かる。

銘はインフィニティ。効果は重複。

つまり、一回の攻撃の量を増すタイプ。ヴィナヘイムの聖刀剣、アルフレドの聖長剣、どちらとも似か寄らない。

――分が悪いか…？

ヴィナヘイムの聖剣は、力や量で押すタイプではない。

女性らしい…というよりは、女性であるからこそだ。体質的に力に頼りすぎてしまっただけは過不足分が多すぎる。だから方向は逆へ

といったのだが。

——相手、強いな……

聞くところによると、ヴィナヘイムと剣を交えるユナイトという壮年の男。彼女の寝込みを襲ったらしい。それだけでもアルフレドにとっては許しがたい、自らの手で断罪するに充分過ぎる理由だったのだが、被害者である少女本人がやり返したいという要望により、それは阻止された。

ただし、青年の監視付きという条件下ではあったが。それでも譲歩した方だ。

——全く。

四六時中一緒にいることが到底不可能だと分かっているにしても、やはりアルフレドは胸のわだかまりを消せずに居た。

出来ることならば、自分でケリを付けたかった。

でも、それは少女も同じだったようだ。だからこそ青年はこうして見守ることしか不可能なのが現状。

少女が負けれると思っているわけではない。：それでも、もしものことで後悔するのは絶対に御免だった。彼女が危なくなったら、自らが盾になっても果し合いを止めることも厭<sup>いと</sup>わない。

そんなことしか、できないのだ。

齒痒い：では語弊があるか。

——悔しいな。

自分の手が届く範囲は、存外に狭い。

アルフレドは攻めを連ねる彼らの視界から入らぬところで、何時でも行動が起こせるように身構えていた。拔身の聖剣がちりちりと聖霊因子の胞子を飛ばす。

思い立てば、一秒の間にユナイトに斬りかかり、首を落とすことも可能だ。虚勢でも何でもなく。ただ事実として。手っ取り早い選択が出来ないのは、一重に彼の大切な少女の為なのだが。

ヴィナヘイムは男の剣筋を辛うじて受け止める。

両手に『重複』の効果が掛かり、足元に力を込めて踏ん張る。

弾き、離脱。

「…は…」

吐き捨てるように息を継ぎ、近接。

ユナイトは上段へと構えを上げ、迅速の居合に備える。

少女は鞘を滑走路とし、刃を繰り出す。

上段から叩き落としの一撃は、刀剣を掠めて地に落ちる。

——行ける…

傍目から見ていた青年にも、剣を下げたユナイトは無防備に見えた。今ヴィナヘイムが攻撃すれば、相手に直接当たる。良くて致命傷だ。

剣鞘から出でた二の閃。

少女は確かに上袈裟斬りを相手の胴に引いた。

白い青年は表情を弛緩させて、兩人に告げた。

「勝負あり。…もういいだろ」

「……………」

沈黙が重なる。

胴の軍服を切り裂かれたユナイトは、皮膚を僅か数ミリしか傷つけていない。

線を引き、薄く血が滲む以外に大きな外傷もない。

ヴィナヘイムは吐息を漏らし、刀を鞘に納めた。

あの太刀筋からすれば、臓物をひべらかしていてもおかしくはない斬撃だった。

それでも男の傷が浅い切り傷のみなのは、ヴィナヘイムが施術剣に『抑制』の意志を載せたためだろう。そうでなければ今頃は辺り一面が血の海だ。

勝者の少女は視線を上げて男を見、

敗者の男も視線を下げて少女を見た。

「…速いな」

滅多に口を開こうとしなかったユナイトが、言葉を述べる。

「有難う…御座います。貴方も攻撃、重かったです」

ヴィナヘイムは少しだけ困惑した顔をして、言葉を選ぶ。

「お願いします。もう夜襲はやめてください」

「頼んでも、俺がどうするかは分からないだろう」

「ええ。…でも、言っても通じないとは思いたくないんです。…

私は……」

目線を落とし、心許なさげに

「私は…貴方との闘いも、良いものであったと思います。そういう人とは、後ろめたさもなく、堂々と剣を交えたいんです」

真摯さを押し出し、必死さを黙殺した言い草。

この場で少女のことを一番に理解している青年は気が付いていた。彼女はこの男…自分を襲撃した、殺そうとした男でさえも憎めずにいるのだ。

——なんだかな。博愛主義者なのかなあ。

前例があることもあり、アルフレドは複雑な心境で二人を交互に見やる。

ユナイトは唐突に少女から視線を外し、踵を返した。

無言で修練場を後にする。

引き留めようか迷う少女の肩に、銀髪の青年が手を置いた。

「もう、いいだろう？」

二度目の言葉だ。

「…うん」

少女は先ほどの猛りもなく、小動物よろしく頷くと青年へと向き直った。

僅かに、彼女の肩先が震えている。

心身共に戦闘への対応から脱し、今更ながらに怖気づいているらしかった。

アルフレドはすぐにヴィナヘイムの心境の変化に気が付くと、ぼそっと呟いた。

「ほんつとに、ばかだなあ…」



## 第十九話 敵中の観点

白と緑に囲まれた庭園がある。

白は咲き乱れる花の色だ。緑は見事に剪定された木々の葉の色。広場の中央には、前代の王の人物彫刻が残されている。

事実よりも、多少威厳高らかに、多少権力の誇示を混ぜた欺瞞の像。ゆうに大人一人分の背丈を超えて有り余る『無駄遣い』を眺めて、金髪の美女は腕を組んだ。

どうしたらこの像を傾けさせれるのか、という思考に落ちて。

——地震とか起きないかしら。特大の、この像とか一瞬にして粉碎するくらい……ずかがーんと。

支離滅裂な上に、地震の滅多に発生しない地域だからこそその思考を留める。

その背に、厳正そうな声が掛けられた。

「…やはりお前か。エヴァⅡブリュンスタット」

「あら。ユナイトⅡクロスアリア軍師じゃ御座いませんか？ ど  
う致されたのかしら？」

男は剣呑に眉を寄せた。

「恍<sup>とほ</sup>けるな。異国の聖騎士を煽<sup>とほ</sup>っただろう」

「…煽<sup>とほ</sup>ったとは失礼な。事実を伝えたまでですわ」

「事実…？ その事実さえ、お前の手駒に嗅ぎ付けさせたものだら  
う」

「否定はしませんか」

くすりと一笑し、美女は元独裁者の像に肩を預けた。

「…それに、何なんだ。あの女」

言いながら、男は微少ではあるものの狼狽した。

「ああ。ヴィナヘイムちゃん？ 可愛い娘だったでしょう」

「……」

「あの娘がどうかした？」

「あいつは：確かに強い。インフィニティの制御有りのままでは俺が負ける程に。だが、剣を収めた途端のあいつは何だ……気の弱い、ただの女になっていた」

話しながら、自分が何を伝えようとしているかの主旨が理解できない、といった様子で軍師の男は告げた。

エヴァは対照的に笑みを濃くする。

「強かで、か弱い：婦女子にしてみれば最も魅力的な要素ですわね」  
ややずれた見解は、わざとだろうか。

男は寡黙に女から距離をとった位置に立つ。庭園には午後の光が降り注いでいた。

——そこに、新たな影が加わる。

二つ。軽快な雰囲気醸し出す小柄な姿と、女性らしいシルエット。

一方の小柄な影の男が手を振ってきた。

「よお。ヒマそうだなあ。エヴァ」

からかいの色が濃い、子供じみた声だ。

「……………今日は、非番、ですか……………」

続くのは、途切れ途切れで、老婆のような掠れた声。小柄な影の隣を歩む、白いワンピースに同色の、つばの長い帽子姿の女性のものであった。

「ペイルバンカーさんに、ヴェンゼルさん………王城に居るなんて珍しいですわね。どうかなさいましたの？」

エヴァは絵に描いたが如く、淑女の丁寧な口調で諭し問う。

「どーしたもこーしたもねーよ。早とちり野郎が手エ出したって、もっぱらの噂じゃねえのかい」

「……急な、乱暴は、良くないと………思います………」

来訪した二人は頷きあって言い合う。

「ですってよ。クロスアリア軍師」

「……………」

「いやア、まあそれはいいさ。どーでもな。腐っても敵国の使者だからな。少しくらいボコッてもいいんじゃないやね」

小柄な男…ペイルバンカーは取り繕うと、頭を指で掻き回した。隣の女性、ヴェンゼルと呼ばれた彼女は、薄氷じみた日除けの帽子をそっと押さえる。

「……わたしは、聖騎士よりも……内部の……」

「そーそ。内乱が纏まってきやがった。そろそろ自治区の所為にもしてらんねエよ。…奴ら、大元を狙ってきやがった」

ふつつりと黙り込んでいたユナイトが、頭を上げる。

炯眼は顰められ、厳しさをより一層増していた。

「それは、つまり…」

「ああ。そうさ。喜べよ戦闘狂。近いうちに戦が始まるぜ。身内同士の腐り果てた、埒が明かない戦争がな」

小柄な青年は、嬉々として語った。

白いワンピースの女は、痛ましげに目を伏せた。

黒髪に隻眼の男は、自らの得物を見やった。

豊かな金髪の熟女は、紅の口唇に愉しげな笑みを載せた。

「あらまあ。本格的に面白いことになってきましたわね」



## 第二十話 翻りの螺旋

雑多に押し込まれた朱い建造物の群れ。

窓から俯瞰する街並みは変わらない。

この景色への違和感も、段々と薄れつつある。…その心変わりに、危機感を感じないわけではないが。

今日で、隣国にして異国。加えて休戦中の敵国であるイザベルに滞在し、一週間が過ぎた。

一か月前の自分であつたならば、現状に驚いて疑問を持っているだろう。そしておそらく、理由を知つたならすぐに納得できるだろうが。

豪奢で重厚な造りの部屋、天蓋付きの寝台という、果てしなく利用価値が不明なものにどっかりと腰を降ろし、手元の長物を磨く青年がいた。

銀色の髪に整った顔立ち。微笑んだならば、万人の殆どが彼に好感を抱くであろう青年だ。

彼は手元の長鞘を抜きはらい、聖剣を綺麗な布で拭いていく。

濁りのない、透き通った刃は長く、刃面は青年の顔を鏡のように映した。

柄元には、自国エンシェントの古代文字が彫られている。余程知識がない者でないと彫られた言葉の意味を訳すことは出来ないだろう。

その彫られた単語こそが、この剣の『銘』である。

聖騎士の施術剣：すなわち聖剣は、代々に特定の鋼で錬成される。今アルフレドの持っている聖剣も、先代の聖騎士が使っていた聖剣を焼き戻して溶解し、打ち直したものだ。

武器の種類や形状はおおよそ自由に変えることが可能であり、彼

の場合は体に馴染んだ長剣に仕上げてもらった。もう一人の聖騎士、ヴィナヘイムに至っても、あちらは刀剣であるものの、経緯は然りである。

青年は磨きあげた剣を掲げ、鈴の音と共に鞘に収めた。

——何時まで、こうしていればいい？

イザベルの国王が、エンシェントの国王に直々に返答の文を書きたいと申し出てから一週間。

何らかの思惑の許に軟禁もとされていることは明白だ。

この際、脱走でもしてしまおうか。

——難しいよな……

衛兵や侍女は常に聖騎士の周りに待機しており、わざとらしくて敵わない。

どうにかならないものか。

相方の少女は、毎日豪華な食事が摂れて喜んでいるが、青年の方はそこまで図太くない。

肩紐を潜らせて鞘を背中に担ぎ、青年は部屋の扉を開けて廊下に出る。

途端。

「「……………」」

こちらを見上げる視線があった。

アルフレドは目を丸めた後に、訝しげに問う。

「…何してるんですか」

「あ、えーっと。うん…何だろうね」

要領の得ない返答。

存外におっとりとした言い草に、アルフレドは不信感を募らせた。彼の目の前には、扉の前で三角座りをする男がいる。

年の程は大して変わらないであろう青年だ。櫛で梳いた後のようなさらさらとした茶色の髪を一括りにしている。やや顔の作りは童顔だったが、手足は長い。

謎の人物はよっこらせ…と一息に立ち上がる。

「こんにちは。聖騎士さん。それから初めまして」

「…初めまして」

探る視線はそのままに、軽く目礼。

「僕は、十二軍師の…ミーテッシャⅡミーツⅡマシュッツと言います」

「十二軍師…？」

アルフレドは耳を疑った。

どこか平和な青年の雰囲気は、今まで会った十二軍師のイメージとはかけ離れていたからだ。

「あはは…もしかして疑ってますか？ 言いたいことは分かりませんが、僕は真正正銘、十二軍師ですよ。末席ですけどね」

眉尻を下げ、気の弱い発言をする。ちらりと銀髪の青年を見やり  
「アルフレド・フェイルコールさん、でしたよね。フェイルコールさんとお呼びしてもいいですか？」

「…ああ、はい」

何やら、会話のペースが掴めないアルフレドは、胡乱に返事をする。

「僕のことは名前でも、家名でも…ご自由に呼んでください。…でも、出来ればミーテッシャと呼んで欲しいですね」

邪気のない笑みで、童顔の青年は言う。

アルフレドは所在なさに視線を逸らした。丁寧な口調で

「…それで、僕に何か用でしょうか…？」

「ああ。そうでした。実はですね…」

ミーテッシャは何故か嬉しそうに語尾を弾ませた。

「イザベルの王城、広いでしょう？ 僕、フェイルコールさんを案内しようと思って」

当然、お断りしますというわけにはいかなかった。

折角の誘いを断るのは先方に失礼でもあるし、実を言うと本分は、そんなことよりも……

——偵察、とは違うか。

イザベルの王城の中は知らない部分が多い。丁度良い機会だ。王城の構図を頭の中に叩き込んでおければ幸い。そして、軍師と名乗る青年が、何の意図で彼を連れ出したのかも興味がある。

無論、観光じみた王城案内だけが目的ではないだろう。

生け捕りにされる可能性もあるが、その時は全力で抵抗すれば最善だ。：それでどうしようもなかった時は知らない。

「ここが、軍の士官の方々の食堂ですね。一般兵卒とは分けられているんです……」

ひっきりなしに説明しながら、ミーテッシャは王城の別館を行ったり来たりする。

アルフレドは彼の後に着いて行きながら、適当に相槌を打っていれば良かった。

青年は指さし語る。

「王宮は中央にあります、王城の中に兵卒の修練場、宿舍もあるんです。ちょっと纏め過ぎかもしれませんがね」

「王城は、敷地がだいぶ広いですね」

言葉を挟んだ銀髪の青年に、童顔の青年は嬉しそうに観応する。

「：ええ。王都の三分の一はあります。ああ、でも北側の一帯は王城の中の森ですから、所有しているだけで利用価値は少ないですね。時々軍の演習に使いますが……」

ミーテッシャはアルフレドの些細な質問にも丁寧に答えた。

二人が広大な距離を、王宮からぐるりと一周し終える頃にはもう昼時を過ぎていた。

「ごめんなさい：夢中になっちゃって……もうお昼ですが、お腹は空いていませんか」

綺麗な髪を揺らし、幼い顔で問うてくる青年。

アルフレドは取り繕い、少しだけ口端を上げた。

「いいえ。僕は大丈夫です。貴方こそ、長い間歩きっぱなしだったんじゃないですか」

「あはは…突っ走ってましたよねえ…僕、軍師の中でも話せる人がいなくて、同年代の人とこんなに話したの、すんごく久しぶりなんですよ」

最後の方は、殆ど独白だった。

——ふうん。

先日、十二軍師の女が言っていた言葉を思い出す。

——派閥、かな……

個性が強い、自己主張が強い人物は、互いにぶつかり合う傾向にある。

この、ミーテッシャという青年は、割と押しが弱く個性も薄い存在なのだろう。成程、周りに押し潰されるわけだ。

尚更に何故、年若い青年が軍師なのか、疑問は深まったが。

二人は話しながら別館へと移動し、来客専用の食堂へと歩みを進めていた。

一帯には、白い薔薇が咲き誇っており、緑と白の協和が見事だった。エンシェントにも薔薇園はないことはないのだが、ここまで手入れが行き届いているかと訊けば、答えは非だろう。

緑の園を何気なく見渡していると、アルフレドは一つ、場違いなものを見た。

「あの……」

思わず、前行くミーテッシャを引き留めた。

「はい？　どうかしましたか？」

「あれは……」

指示した視線の先には、純白の像があった。

白薔薇と同色の細身の像。一人の女性の、どこか抽象的な裸体が彫ってあった。殆ど大まかな輪郭のみの、実際の女性の裸身とは程遠い代物。ただし、顔だけは克明に彫っており、表情に柔和さを感じる。髪は豊かにうねり、石造の足元まで伸びていた。

「ああ。あれは『フレイ』ですよ」

「フレイ……？」

「モデルになった人の名前で、題名です。：どうしてここにあるのかは一切謎なんですけれど：何でも、何代か前の国王の作品だそうで」

暫く、アルフレドは無自覚の内に石造に見惚れていた。

「：綺麗でしょう？」

「ああ：」

浮き立って見える存在感。

今にも動き出しそうな表情の躍動。

「美しいな」

思わず飾り気のない言葉で応じ、青年の聖騎士は少し苦笑した。後ろ髪を引かれる思いを無視して、アルフレドは踵を返す。

「良いものを見ました。行きましょう」

「ええ」

ミ―テツシャも応じ、場から立ち去ろうとしたその刹那。けたたましい鐘の音が鳴り響いた。

> i 2 9 9 6 8 — 2 3 4 3 <

## 第二十一話 決意と謀反

けたたましい鐘の音は、部屋で書物を読み漁っていた少女にも届いた。

反射的に立ち上がり、膝に載せていた書物がばらばらと床に落ちる。どれも、イザベルの書庫から無理を言って持ってきてもらった物だ。「何……?」

ヴィナヘイムは呟くと、椅子に立て掛けていた聖剣を引っ掴み、部屋の一面に取り付けられた大きな窓へと走った。

鐘の音は外部から。

客室から窓の外へと目線を泳がす。

「もう……ここからじゃ分かんない!」

言う間にも鐘音は激しさを増し、比例して騒がしさも増していった。――火事……? もしかして事件……?

ヴィナヘイムは今度は反対に走り、部屋の両番の扉を勢い任せに開け放つ。

廊下の向こう側では、侍女たちが慌てて駆けて行く。捕まえて問い詰めようと思いついたのも束の間、少女の背に呼び声が掛けられた。

「ヴィナヘイムちゃん!」

自分をこういつた呼び方呼ぶのは、最近では唯一人だけ。

勢いを殺さずに振り向く。

「エヴァさん? これは一体……!」

軍服の美女は少女へ駆けて来ると、息を乱しもせずと言った。

「反乱が、遂に起こったようですわ」

「反乱?」

「ヴィナヘイムちゃんは、うちが形だけの連邦国家だっていうことは知っていますわね……何処にでもいるのですよ。上部に不満を持つ民衆は……」

「それって、つまり……」

——国家への反逆、謀反。

「今までは、地方で多民族がそれぞれに行っていた抵抗行動だったのですが……どうやら、民衆は手を組んだらしいですわね。多勢ですわ。今、王城に真っ直ぐに向かっていますの。もう、王都に入り込んできて……」

早口に喋るエヴァの顔には、明らかな焦燥の色が見えた。

「軍師で押しとどめるにも……予想のない謀反ですわ……出撃にも時間が……」

「そんな……」

二の次がきけなかった。

本来ならば異国民である自分が、巻き込まれる道理ではない。目の前の女性は、言い聞かせるように鷹揚に告げる。

「いいですか。ヴィナヘイムちゃん。今から地下経路へ案内します……そこから王都の外まで脱出を……」

ヴィナヘイムは一度俯いて、唇を噛んだ。

——人生、何が起こるか分かんないって……言うけど……こんなことってない。

選択は、一つ。

地下経路を通って安全な場所に離脱する。もうじきここは戦場と化する。

しかし、違和感を禁じ得ない。

……果たしてそれが最良なのか、と。

返答の文を持ち帰らずに、エンシエントへと戻り、王には何と報告する。

他国で戦が始まったので逃げ帰ってきました。

……別に間違った判断ではない。けれど。

————逃げる……？

——逃げ帰る……？



———何から、逃げるって？

ヴィナヘイムは顔を上げた。

エヴァは少女の顔を覗き込んでから、はっとする。  
そこに、非力な少女の面はなかった。

「エヴァさん。敵はあとどのくらいで王城<sup>こし</sup>に辿り着きますか…？」

「……必死に抑えているけれど、以て一時間前後…かしら」

絶句するのを押さえて、軍師の女性は答えた。

——まだ。

「エヴァさん」

——まだ、余裕がある。

少女は息を浅く吸って、大切の一言を告げた。

「私に時間を下さい」

## 第二十二話 跳躍する因子（上）

風が吹く。

鮮やかな赤髪は煽られ、流れるままに軌道を描いた。

いつも通りの黒い服。男物の粗野な修練着。長袖の腕元をたくし上げ、余った袖口を結んでいる。露出した腕からは刻印も覗いていた。

少女は険しい顔で、前方を睥む。

雑多な赤煉瓦の町並み、その向こうには関所を超えて草原があり、丘を越えてこちらに向かう群れがある。

有志の反乱軍だ。

本来ならば、異国民である自分が関わる必要のない、関わるべきでない事柄。

逃げて罪ではなく、むしろ居残る方がおかしいだろう。

それでも、少女：ヴィナヘイム・ハンドェット・ベイカーはそこに立った。

王城の最上階、国王が年に数度の行事の時は、ここから顔を見せる。謁見の高台。普段なら誰も出入りしない場所だ。

ただし今は、砲台や石弓の類を並べる兵士の姿が見受けられ、行き交う雰囲気は騒がしい。

場違いな少女は腰に刀剣を挿し、肩には巨大な弓を担いでいる。

真っ直ぐに見据えるは、彼方の軍勢。

「ヴィナ」

少女は愛称で呼ばれ、振り返った。

「アルフ、遅かったね」

「それでも急いだ方だよ」

駆けて来る銀髪の青年の背後には、軍服の青年が居た。視線をアルフレドに戻し、ヴィナヘイムは告げた。

「何と言われても、私はぎりぎりまで戦うよ」

青年は、眉を吊り上げようとして：止めた。

「……言うど、思ってた。逃げ帰るのは嫌いだろうからな」

「……ごめん」

頭を垂れる少女に、青年は溜め息交じりに告げた。

「謝るのはなしだ。ただ、勝算のない戦はするな。危なくなったら逃げるからな」

少女は、顔を綻ばせた。

「うん！」

聖騎士の青年は、聖騎士の少女の頭に手を置く。

それだけでヴィナヘイムは戦える勇気を貰えた。

「俺は前衛に立つ。お前はここで、存分にやってしまえ」

「言われなくても！」

アルフレドは頷くと、少女に背を向けてその場から去って行った。

「ヴィナヘイムちゃん」

もう一つの声は、後方から。

「エヴァさん！」

「見つけたわよ。頼まれたもの」

金髪の女性は、後ろの荷車を指した。

数人の兵の手によって運ばれてきた荷車には、合計百本にも届きそうな細長い棒が積まれていた。

先には羽が、もう一方の先には三角型の小さな刃物を取り付けられた矢だ。白羽は丈夫そうで、一本でも簡単に折れそうにはない。

「職人物で丈夫ですし、礼拝も済ませてありますわ。どれも立派な施術武器ですよ」

「わあ、有難うございます！ 恩に着ます……」

「恩を感じるのは場違いですわ。それはこちらの領分。……今からでも脱走して頂いてもよろしいんですよ……？」

語尾は遠慮の気が強かったが、赤髪の少女は気にしない。

「私の覚悟です。逃げ帰るのは、嫌いなんです。……例え敵国助力

でも：私は、自分の正しいと思ったことをします」

確固たる口調には、迷いがない。

円熟した美女は、嬉しそうに口唇を吊り上げた。

ヴィナヘイムは体を前に向け、一段高くなった上段へと登った。

反乱軍は、もう王都に侵入し始めている。

砲台の類はまだ火薬の準備が十分ではない。石弓もこの距離では届かない。

無論、この距離で矢を放っても、敵に掠めもしないのだが……

ヴィナヘイムは背に担いだ施術弓を腕を回して取り持った。

象牙のような白、紅い紋章。大きく見事な弧を描く大弓。

弦はぴんと張って、寸分の緩みもない。

遠くない過去、エンシェントの士官学校の倉庫で見つけ、教官に譲ってもらったものだ。

御三家であるハイト家の家宝的武器。

ヴィナヘイムは誰にも聞こえない声で囁いた。

「……我——汝が風見し十六夜を明く使徒」

次に息を吸い、少女は叫んだ。

「皆、下がってて！」

少女の鬼気迫る雰囲気、気圧された兵たちは、僅かに後退する。

ヴィナヘイムは足を肩幅に開き、弓を自らと水平に構えた。

弓技は、居合の次に自信がある戦法だ。

弓はゆっくりとしなり、指又に挟んだ矢を持っていく。

呼吸は細く、長く、視線はただ一点に収束され

手指や腕から、聖霊因子が迸り、淡い光と華の香りを生んだ。

きりきりと、弓が音をあげる。

引き絞り、研ぎ澄まし、見越す。

弓のしなりが臨界点に、達し、達し——

小気味の良い音と同時に、矢は放たれた。

矢は真っ直ぐに軌道を描き、通常ではありえない距離を跨ぐ。水平に空へと向かった矢は、唐突に飛散し、聖霊因子の雨を降らせた。

真下の反乱軍へと、真っ直ぐに。

少女は結末を見届けずに、また矢をつがえる。

今度は先程よりも短く、矢は放たれた。

真っ直ぐに飛び、やはり飛散して反乱兵へと流星の如く降り注ぐ。

少女は速撃ちを繰り返しながら呟いた。

「ハイト家の…紋章は、兎……………」

構え

「兎の意味は…生殖…繁殖」

撓み

「野に下り…増える……」

定め

「つまり……」

引き絞り

「『拡散』」

放つ。

言葉通りに。矢は聖霊因子を撒き散らしながら広がっていく。野に。

弓は瞬く間に数を減らし、同様に進撃する反乱軍の数も減ってきた。聖霊因子の雨に慣れない者はすぐに気を当てられて酔い伏す。

大幅な戦力を削ぎ落とせるのだ。

ヴィナヘイムはそれでも残った反乱軍へと矢を放ち、因子の拡散を連続で行う。

矢を撃つ道具となる。自らの肉体が聖霊因子の回路となっていく。

放たれた矢が十数本をゆうに越えた時、その影響は出た。

少女の腕から、一滴、赤い滴が垂れた。

白い腕に赤い筋が辿られ、筋は流れるごとに太くなる。

刺と華を冠した茨の刻印は赤黒く変色し、不気味に滲んだ。

それでも少女は射手を止めない。

ただ直向きな姿勢に、イザベルの味方の兵ですら咄然としていた。矢を射る少女を見ていたエヴァは、何時の間にかに背後に立つ

ていた女へと話しかけた。

「変ですわね…あの娘」

「……………ええ…」

老婆のような声で応じるのは、先日彼女たちと話していた白服の人物、ヴェンゼルと呼ばれていた女性だ。

「……………不思議、です…ね…」

「どうしてかしらね。敵国の内情にここまで尽くすのは…謎ですわ」

——身もぼろぼろにして。

「あの娘の仁徳、なのかしらねえ……………」

エヴァは呟き、ヴェンゼルへと向き直った。

「どの道、あのままじゃぶっ倒れてしまいますわ。…止めないと」  
射手の少女へと歩もうとする美女を、白い女が引き留めた。

「その、……………必要、は…ないです……………」

白いスカートを翻し、女性はいナヘイムへと歩み寄った。ごく自然に少女の横に立って、俯瞰風景を望む。

集中して無我の域に入ったヴィナヘイムには、彼女の存在は認知できなかったようだ。

息を荒くして、少女は血の滴る片腕を構えてただ、撃つ、撃つ。

——脅迫概念…でしょうか…？

白い女は横目に必死な少女を見やって、思う。そうして少しだけ顎を上げた。

僅かに、白い喉元が上下する。

それが『予備呼吸<sup>ブレス</sup>』だと、見た者は気が付けただろうか。

彼女は歌った。

見事に調和された旋律。

普段の彼女の老婆のような声とは似ても似つかない、本来の声。  
細い音域はか細く、淑やかに。安定された音域は、確かな地盤と安心感を伴<sup>ともな</sup>って。

聴く者を魅了する、女神の歌声。

彼女の衣服の鎖骨の辺りが、風にはためく衣服によって露わにされる。

そこには禍々しく、黒と紫で変色した歪んだ刻印があった。聖騎士の物とは違う『呪印』とよばれる体を蝕む憑代だ。

彼女：ヴェンゼルは、この憑代の元、聖霊因子を収束し、歌声として発していた。

音は均等に一帯に伝わり、変化は目に見えて起こる。

敵の反乱軍隊が、勢力を落として来たのだ。

王都へと侵入し、王城を目指していた者たちは、突如聴こえてきた歌声に心を奪われ、同時に深い眠りについていた。

一時的に彼らを睡眠、又は仮死状態に陥らせる聖霊因子の子守歌。ヴェンゼルはその効果を、遠方の敵に向かって放っていた。

螺旋を描く音の余韻は、広く響く。

大群は街頭で倒れ伏し、ヴィナヘイムの弓矢に当てられた者も加えて大幅に力量を減少させた。

うっとりとする後引きを残し、子守歌が終わる。

それと同時に、矢を射っていた少女が倒れ伏した。

ヴェンゼルは、落ちてきたヴィナヘイムを優しく抱き留める。

「よく……こんな……に……頑張って、くれました……ね……」

面に聖女の微笑をたたえ、対照的な老女の声でヴェンゼルは少女を労った。

## 第二十二話 跳躍する因子（下）

王都。その西側に位置する広大な敷地は城だ。

四つの見張り塔を従える、イザベルの王城。

高い塀は煉瓦で積み重ねられ、取り囲む四つの門以外からの出入りは不可能となっている。

しかし、突破されない可能性などない。

敵の先陣はもう王都へと侵入したという報せもあった。

將軍と軍師が受け持つ中隊は、それぞれの門前に配置され今か今かと戦の時を待っていた。

城下との出入り口の内の一つ、北の城門。

銀髪の青年は長鞘を肩に担ぎ、迎撃命令を待つ兵卒の群れを掻き分けていく。

いかにも誰かを探している姿勢といった風貌。

「——おいおら、そのガキ」

響く粗雑な声は野太く、彼の人柄を如実に表した特徴だった。

青年にとっては意外なことに、目的の人物は自ら接近してきた。

小柄で、がっしりとした体格の男。齢は見定められないが、壮年期だろう。槍を片手に構えている。立派な施術武器の長槍。

男はじろりと剣を担ぐ青年、アルフレドを睨む。

何となく愛想笑いを返したが

——うわぁ。敵意剥き出し。

内心では少し身構えていた。

「初めまして。：貴方がスコールⅡペイルバンカー軍師でよろしいですか？」

アルフレドは、値踏みするような相手の目つきに物怖じせずに、淡々と述べる。

「勝手な都合で悪いのですが、こちらの前衛に加えては頂けないで



しょうか」

男の険悪な目つきが、更に歪んだ。

「…はン、話には聞いているがな…一体どんな慈善活動だ。吐き気がする」

男の苦い顔にも、青年は微笑で応じる。

ペイルバンカーは、ふと青年の背後に視線を巡らせた。

視線の先には、小さく丸まる影が一つ。

「テメーもだよ、マッシュツ」

「……あうあ…バレてしまいました…」

アルフレドの背中に隠れるように居座るのは、ミーテツシャ…ミ  
ーツ…マッシュツと名乗った青年だ。ただでさえの童顔が、怯えて  
縮ぢこまると余計に幼く見える。

ミーテツシャは小動物じみて震えながら、小さく呟いた。

「初陣が防衛戦線だなんて…うう…」

「同じことだろうが、ぐずぐず言ってんじゃねえよ鬱陶しい」  
ぼりぼりと頭を掻いて、ペイルバンカーは踵を返した。

アルフレドに無遠慮な視線を送る。

「聖騎士サマねえ…大そうな名前持つてんじやないかよ、ガキ」  
対する銀髪の青年は、相変わらぬの穏やかな物腰で口添えした。

「……一つ訂正をよろしいですか？」

慇懃に声を掛ける。

「は？」

「聖騎士は…何も聖なる騎士という意味ではないです」  
ペイルバンカーはいぶかしみに眉を詰めた。

「聖騎士は、聖霊の騎士という意味です」

——沈黙。

>i33859—2343<

「何だよ、それ」

「…そのままの意味ですよ」

露骨な男に、安穩とした青年。挟まれる臆病そうな青年がもう一人。

「あ、あの…フェイルコールさん…ペイルバンカー軍師……」

「おい、まだそこに居たのかよマシュッツ。お前の中隊は……つと、まだ与えられてなかったんだっただ。…しょうがねエや。単騎でやれ」

指さし何気なく言う小柄な男に、幼く見える青年は更に小さくなった。

「うう…、初戦で戦死しそうです……」

「縁起でもねエこと言ってんじゃねー。シバくぞ」

「う…すみません…善処します……」

いきなり態度が萎しぼんだところから、ミーテツシャがペイルバンカーを苦手なのだと如実に分かる。

——ところで…

アルフレドは疑問を浮かべる。

ミーテツシャの施術武器は見れない。彼は聖霊因子の使い手ではないのだろうか。

…と、ミーテツシャは懷から手甲を取り出した。

よもやそれが武器というわけではあるまい…という予想に反して、彼は手指に手甲を嵌めていく。白銀の、艶消しの防具だ。使い方によつては武器になるだろう。

「…そ、それじゃあ始めます……」

青年は緊張した面持ちで告げ、聖騎士と軍師の前の街道に立った。彼は腰を落とし、手甲に包まれた片腕を地面へと突き出す。

途端、信じられないことが起こった。

ミーテツシャが掌を地面につけると、局地的に浅く陥没し、街道の石詰の地面が地割れたのだ。

「何を……」

「静かにしてろ、ガキ」

アルフレドの驚愕の声は、ペインバンカーの制止に途切れる。

どこか茫洋とした目で、ミーテッシャは呟いた。

「……………百…二百…五百……………こちらに向かつてくるのは……………百、五十七……………」

「方角は？」

ペイルバンカーの声に、無感情に応答する。

「王都北の裏門から…小隊規模の集団が…五つ、中隊規模の集団が二つ……………距離…おおよそ一キロ向こう……………正教教会から…只今、迂回……………」

「よし、十分だ」

満足そうな声に、童顔の青年が立ち上がる。

その顔には先程の機械的な色はなく、彼らのよく知った気の弱そうな顔があった。

アルフレドはすぐに合点がいく。

「……………貴方は…もしかして、聖霊因子の通信者ですか…？」

「ええ。ほんの近くしか分からないんですけどね……………」

申し訳なさそうに答える青年。

「いいえ。エンシエントにも通信者はほとんど居ません……………稀有な能力です」

アルフレドの語る言葉に虚偽はない。

聖霊因子の通信者とは、大気や大地に微少に広がる聖霊因子の流れを読み取り、人の動きや動植物の密集具合まで探れてしまう者のことだ。

ただし、多くを才能に頼る通信者は、人数が殊更に少ない。昨今では減少し続け、彼らの存在は生きる伝説に近いのだ。

ミーテッシャは通信者の才能を見込まれて軍師に選ばれたに違いない。やっとな謎が氷解した。

「軍勢は分散しています。最も多勢なのは西門ですが……………」

「なら心配いらねえよ。西門にはクロスアリアがいる。ネズミ一匹たりとも通さねえさ」

「幸いです」

頷きあい、彼らは街頭を望んだ。

一般市民は避難しているか、家屋の奥に隠れているのだろう。来訪した時の騒がしさは微塵もない。

街道はただっ広く、開け放たれている。

その中央に、光の粒が舞い降りた。

「あれは……」

銀髪の青年が呟いた途端に、光は弾けてほんの微かに甘い香りが広がった。

知らない者が匂えば、薔薇科の華の香りだと予想するだろう。

だが青年には、すぐにぴんときた。

――ヴィナ？

空を見上げると、一筋の光、閃光。

――ハイトの……そうか、『拡散』。

近接では無意味な効果を、彼女は逆手に取ったらしい。

このままでは進軍部隊は聖霊酔いしてしまう。大幅な戦力の低下だ。アルフレドの隣に立ったペイルバンカーが、わざとらしく口笛を鳴らした。

「ほう。あの光、てめエの連れか？」

「ええ。おそらく」

「やるねエ。あのお嬢ちゃん」

男は意味ありげな視線を青年に送った。

「……お前はどうかかな？」

「……見ていれば分かりますよ」

二人は視線を交錯させる。

それだけで相手の心情など汲み取れた。

「二人とも！ 先頭がそろそろ来ます！」

焦った童顔の聖霊通信者の声に、二人の男は前を見た。

怒涛の勢いで駆けてくるのは、身なりも人種もまちまちの義勇兵。

「全く、玉碎覚悟って、原始人かつつの……」

小柄な男は槍を天に掲げた。

「帝に刃を向ける不屈き者には制裁を加える！ てめえら、覚悟はいいな！」

応じる声が、背後から聞こえる。

鼓舞する勢いは、奔流となって隊を動かした。

「腰抜かすんじゃないぞ！ 聖騎士！」

「余計なお世話ですよ！」

そうして、二つの勢力はぶつかった。

## 第二十三話 休憩閑話

白い服の女は、ベッドに横たわる少女の頬にそつと手を当てた。少女の意識はない、今は深い眠りに落ちていることだろう。

——熱は……ないみたいですね……

本人が聖霊の氣に当てられたわけではなさそうだ。自分を聖霊因子の回路・道具として使ったことの代償が、疲労として出ているだけだろう。

——ぐっすり眠って、良くなると、いいんですが……

穏やかに願い、白い服の女性、ヴェンゼルは傍らの椅子を持って来る。

腰掛け、少女の寝顔を見守った。

——人の寝顔を窺うのは……趣味が悪いでしょうか……

だとしても、誰も見ていないのだからいいかな、という気もする。

一騎当千の働きを見せた異国の聖騎士。

少女は件の戦闘から丸一日経っても目覚める気配がない。

十二軍師やその中隊にこっぴどくやられた反乱軍は、脱兎の如く王都を後にした。

幾らか残った敵の義勇兵は、王城の牢屋に捕虜として収容されている。

元から、思い付きや鬱憤晴らしに近い行動だったのだろう。衝動的な戦はすぐに終わるのが、世の摂理だ。

——浅はか、です……

十二軍師と、彼らが率いる中隊にその程度で勝てると思ったのか。それとも玉碎覚悟の特攻だったのか。

しかし時に、がむしゃらに捨て身になった人間ほど怖いものはない。彼らには賭すものや守るものがないからだ。無軌道な人の心理は読み難い。

結果論として、勝ったから良いのだが。

——陛下は、どうお考えなのでしょう……

ただ淡々と、利益を求めてきた鉄の男。それが今のイザベルの王だ。

十二軍師も、武力による力の示威行為だ。時代が違えば恐怖政治と揶揄されても仕方ない。

——まあ……今の十二軍師は、欠けていますが……

十人だ。十二の軍師と謳っておきながら、彼らは在るべき形に二人足りない。行事の際に代理が立てられることもあるが、だから何になるというのだろう。

しかも十人のうち、彼女、ヴェンゼルとミーテツシャ||ミーツ||マシュツツ、モルディアス||レヴァンティンという三人は、与えられるべき自らの中隊さえ持っていない。

肩書きがあるだけだ。

——ちよつと、後ろめたいですよね……

どうしようもないことなのだが。

……と、窓の外に視線を馳せたヴェンゼルは、一つの音を聞いた。

木を小突く、ノックの音だ。

「……どうぞ」

相も変わらず容姿に似合わない皺枯れた声で、ヴェンゼルは応じる。

「……失礼、します……」

扉の向こうから現れたのは、銀の髪を持つ青年だった。

「貴方は……確か、……」

「アルフレド・ハンドット・フェイルコールです。突然にすみません。……ヴィナヘイムの様子はとうでしょうか」

「ああ。貴方、だったのですね……彼女、なら……そこに……」

寝台を指し示す。

青年は足早に、寝ている赤髪少女の傍らに傳いた。

「……はあ……」

寝台に頬杖をついて、溜め息。

ヴェンゼルは不思議に思いながら話しかける。

「疲労、ですね……本当に、よく……頑張ってくれました……」

「聞いています。貴女がヴェンゼルさんですね……ヴィナヘイムを見ていてくれて、有難うございます。……あの歌は貴女のものでしたか」  
「ええ」

静かに頷き

「……アルフレドさん、貴方も……最前線で、戦って……おられたとのこと……感謝、します……」

「いえ、僕は……」

アルフレドはヴィナヘイムの穏やかな寝顔を見ながら言う。

「僕は、……ヴィナヘイムの指示に従ったままで……」

「……そう、ですか」

ヴェンゼルは椅子から立ち上がり、踵を返す。

「……聖騎士、さん……」

「はい？」

呼ばれ、立ち去ろうとする女性へと視線を上げ

「一つだけ気になったのですが……」

一息

「ヴィナヘイムさんは、どういう脅迫観念に捕らわれているのですか？」

空間に沈黙が降りた。

————脅迫概念。あるいは、脅迫観念。

————しなければならぬ————しなくてはいけない。

逆に、————してはいけない。という意味も含むが。

——成程。

ヴェンゼルの表現は的確だろう。

目の前の少女、ヴィナヘイムは生き急ぎすぎだ。

彼女の育ちの所為なのか、性質なのか。



白衣の女性が立ち去った後も、アルフレドは部屋に残った。

昨日の戦闘は、自分は掠り傷程度の負傷しかしていない。負傷とも言えない程度の代物だ。

それさえも、自らの聖霊因子の余波で受けたものであり、他者に傷つけられたわけではないのだから、無傷の生還といえるだろう。

無論、周りの布陣やミーテッシャやペイルバンカーの助力も欠かせないものだったが。

――全く……

少女のどうしようもない性<sup>さが</sup>に気が付かなかったわけではないし、むしろアルフレドは一番に知っているはずなのだ。

知っていても、どうにもできないこともある。件<sup>くだん</sup>は彼女の問題だ。

時として命を捨てるような行動にまで駆り立てる何か。取り除けるのならば、とつくにそうしている。

言い示すなれば、彼女は二つの文言に縛られている。

――逃げては駄目、戦って向かい合わなくてはいけない……ってところか。

実に抽象的な概念。

何から逃げてはいけないのか、何と戦って向かい合わなくてはいけないのか。

ヴィナヘイムの悪いところは、対面した全てから逃げることを放棄し、戦うことを強要しているところにある。

だが、何からも逃げずに、全てと戦うことなど……

――不可能に、決まってるのにな……

文字通りの不可能な化け物じみた行動は、是非とも止めてほしい。必要な時に逃げないで戦えばいい。

しかし、彼女の脅迫概念はそれさえも許さない。

だから、いつも彼女は身も心もぼろぼろにならなくてはいけない。

――ふざけてる。

人間は誰しも、向かい合って戦うものと、そうでないものと、……立ちふさがる障害を乗り越えたり、迂回したり、避けたりしながら、

折り合いをつけて生きていくのに。

それが、普通だというのに。

――逃げることは、罪じゃないんだがな…

逃げて、力を温存して、以後に障害に再び向かい合うのも良し、別の道を選ぶ方法だってある。

選んで迂回した道の果てに、同等の障害が立ちふさがっていない補償はないが。

要するに見戲だ。追いかけること何が違う。

全速力で走っていても、着いて回ることもある。止まっていたって、追いつかれることもある。

千差万別。

一つだけの共通点は、どうだって足掻いていきたくてはいけないこと。

これすらも、使命感や脅迫に近く感じてしまうのだから、本当に人の名の生き物は不便だ。

アルフレドはヴィナヘイムの肩口の毛布を掛け直してやると、膝を起こした。

…が、同時に少女も寝返りを打つ。

「……ん、うあ…いたた…、…？　アルフ…？」

「おはよう」

「おはーよー……」

欠伸交じりの挨拶。

少女、ヴィナヘイムの率直な実感。

「疲れたあ……」

「そりゃあ、銘有りの弓を連続でぶっ放してたら、疲れるだろうな」  
青年は賛同。やや声音に刺が有る。

「……あはは…怒ってる…？」

「怒ってるかもしれない奴に『怒ってる？』って聞くのは、火に油を注ぐ行為だとは思わないのか？」

「……あ、う…す、すみませんでした…」

少女は居住まいを正して寝台の上で正座すると、ぺこりと頭を下げた。

——怒ってやればいいのに。

内心、思う。

「別に、いいけど」

反面、口をつく言葉は天邪鬼だ。

「……………」

気まずい沈黙。

先に口火を切ったのは、銀髪の青年。

「ヴィナ」

「うん」

「僕は別に、ヴィナが無茶をすることには怒っていないんだ」

「…え？」

「程度にもよるけどね…それよりも」

アルフレドは息を継ぐ

「一人は駄目だ。一人で抱え込むのは、一人で何でも何とかしようとするのは…どうあっても、やめてくれないか」

切実な声だった。

頼む、よりは懇願する、に近い表現。

ヴィナヘイムの眼が見開かれる。…暫時、すぐに申し訳なさそうな色を映した。

「…うん。ごめんね…」

俯いて、二人は何時までも黙っていた。

## 第二十四話 王者の威厳

その建物の内にある部屋はどこも豪華な造りだったが、例外なる一室に比べれば、質素にこそ見えただろう。

鏡の如き大理石の床、天井から降りるガラス細工のシャンデリア、銀の窓枠には彫刻が施されている。嫌味でない程度の家具が、一定の存在感をもって主の帰還を待っていた。

王の執務室だ。

この城の主であり、イザベルの名を冠する土地と民を収める権力者の居場所。

部屋は無人だが、一国の王に存分に相応しい威厳を持つ。

そして、待ち望まれた部屋の主が入ってきた。

老齡寄りの壮年の男は塵一つない床を踏み鳴らし、机と一対になった執務椅子に座した。

禿頭に厳しい柳眉、鷹の眼。

免疫がない者が睨まれたのなら、文字通り蛇に睨まれた蛙と化するだろう。

大国を収める者の威厳だ。

人と土地を掌握するには、並大抵の覚悟では済まない。地上で過酷な生業なりわいはいくらでもあるが、王者の職務も充分過ぎる程に過酷であった。

何しろ、いつ重臣に寝首を掻かれてもおかしくはないのだから。

王は机上に積み上げられた書類に目を通していく。紙面のほとんどは、検閲をくぐり、王の許可の印を待っている。

いわば確認作業だ。

「陛下」

文字を読み上げる王が、声に耳を傾ける。

眼は紙面を追うままに

「……入れ」

承諾の声と同時に、重厚な扉が開かれた。

「御前に。アスモデイルクオルライズが参りました」

現れたのは、老齡期の好々爺とした男だった。

律儀に片膝を付け、深い礼を捧げる。

「前座はよい」

「は」

老人は立ち上がり、曲がった腰元に手を添えた。

イザベル国王は、老人に炯眼をやる。

「アスモデイ、余の命……その結果を見せてみよ」

「は、……陛下に仰せつかりました、呪印封印の件ですな」

王は頷いて先を促す。

「……地下宝物庫に保管・封印しておりました国宝呪印……全て使用不可能な状態に陥っております」

「どうのことだ？」

「我が国の呪印……只今宿り主が確定しているもの……つまり、『アイン』『ツヴァイ』『ミュウ』『クシー』『インフィニティ』『ガシマ』『オミクロン』『ラムダ』『エプシロン』以外のもの……『シグマ』『エータ』『アスタリスク』。この三つが、呪印から離脱しております」

王は僅かに眉根を寄せた。険悪な顔。

「十二ものうちの、三つが同時にか」

「……はい。管理者も驚きを隠せぬようです」

「解せぬな」

老人……アスモデイも同調して頷く。

「陛下、私ども王国錬金術師が死力を尽くして定着を行っております……今暫くの御慈悲を、どうか」

「その必要はない」

王に傳く老人は、顔を蒼白にして次の言葉を待った。

「現在より、『シグマ』『エータ』『アスタリスク』……以上の呪

印所有権を放棄する」

「王！？」

とち狂った声で、アスモデイは王に詰め寄る。

口をつくのは、明らかに慌てた弁解。

「お待ちを。我々の力を以てすれば……」

「頭ずが高いぞアスモデイ。お主の反論は認めておらぬ。余は無駄なことは命じぬが？」

王の静かな一喝に、老齡の男は押し黙った。

「賽は投げられた。……乖離していくものを引き留めるな。その様なものに一寸ほどの意味も価値もないのだからな」

「……は」

苦々しい返事。

「列強の敵は内乱だ。王都は時期に戦火を巻くであろう。反する者には血の制裁を。……変わらぬことだ。迎え討ってやろうではないか。未だ見ぬ怨敵を」

高らかな宣誓ともとれる、尊い声。

アスモデイは頭を垂れて、跪く。

「……陛下の仰るままに。反乱軍殲滅の指揮をとりましょう」

「期待しているぞ」

「はっ！」

力強い返事と共に、老人は深々と頭を下げ退室していく。

また独りとなった空間で、王者は空虚に呟いた。

「……力を欲するあまり軌道から外れ、世界の理から外れた罰か」  
窓の外から王都の町並みを望み

「遂に下されるようだ。聖霊の断罪がな」

## 第二十五話 闇演の園

彼女は言ってくれた。

どんなに苦しくても、貧しくても、惨めでも、人を愛してはいけない理由はないし、世界を愛おしく思っただけにはいけない理由はない。だから、どんなに苦しくても、負けてしまいうでも、死にたくなっても、

誰かを愛していて、世界を愛おしみなさいと。

だって、憎しみ合うよりもずっとその方が幸せだから。

まだ、幸せになりたいと願っているのなら慈しみの心を持ち続けなさい。

たとえどんな場所でも。

たとえどんな時であっても。

涼しげな鞆鳴りの音が広く響く

閃光。衝撃。

光／力／香り

目を焼く白い光／掌に伝わる衝撃／華の芳香のような香り

離脱する二対の影。

長剣を持つ青年：アルフレドが押し返し

刀剣を握り込める少女：ヴィナヘイムは靴底をすり減らして後退。  
交錯する視線。

一触即発の、鋭い炯眼が交ざる。

火蓋を落とす。

「————はっ」

息の塊を吐き出す。

同時に鞘走り

刹那の抜刀／一の閃／二の斬撃／三の薙ぎ

一刀で閃き、二刀で斬り上げ、三刀で横に薙ぎ払う。

一体となった流れる順型。

青年は二の斬撃までを流し、三の薙ぎを長剣で受け止める。

鎧削りの耳が痛くなる音。

伝わる重圧。

力場、消失。――違和感。

掌で感じ／視界が捉え／頭が理解

返し刃で青年が応じる。

弱点へと跳ね上げられた少女の刀剣。

僅かな隙：けれど決定的な機会。

青年は返し刃で胴を狙う。

少女、反射的に得物で追いつかないと判断。新たな隙を生むのを覚悟で横に回避。

受け身を取って、断頭刃を潜る。

青年、膝立ちの少女へ斬りかかる。

少女、力を流して回避、次の瞬間には立ち、抜刀の基本体勢をとる。

視線が交錯。

『まだ終わっていない』／『終わらせる気もない』

了承／合致

青年：正眼の構え。

少女：刃を鞘に収めた腰だめの状態。

――すなわち、臨戦体勢。

渾身の一撃を見舞うに最も効率的な状態。

渾身の一撃を食らうに最も近い状態。

勝負。

速さ／強さ／技／運

持てる全て相乗。天秤に乗せた答え――――



踏込み。

摺り足。

弾指の単位に接近。

中段からの研ぎ澄まされた突き。…青年。

軌道に乗せた袈裟斬りで下から弾く。…少女。

両者の指先に伝わる痺れ———実感。

刃の軌道修正。

退避する少女。追う青年。

踵に力を込め、固定。

ひねりを加えた抜刀。対する上段からの叩き下ろし

衝突／かん高い音は耳を劈く／全身で押し返す。

心臓が鳴る。

血管が高速で流れる。

息が詰まる。

けれど———両者はまだ立っている。

ならば答えは一つだ。

長剣から毀れる白い因子。

刀剣から毀れる朱い因子。

闘志のあらわれ。

両者の、抜刀／振り上げ

接触／刃鳴り／離れ／返し／欺き／湾曲／狙い澄まし／受け／跳

ね返し／反転／力の向きを変え／斬り／防御／鈍い音／剣落とし／

手元／振り上げて躲す／詰め／鎧を重ね／押し／流し／横合いへ

———斬撃

またもや防御。

見切る。

頭部を粉碎する一撃を辛うじて避け

足払いを後退で躲し

迫りくる得物を一挙動にてさばき

空いた後部をひねりで追いつかせ、守る。

足を戻して一刀を後退ですり抜け  
懐にいる相手へと無慈悲な長剣を振り下ろす。  
身を返して退避。

詰めの斬撃。

的確に守護。

「……………はあっ…」

息切れ、

視界が霞む、

限界が見える。

——『まだまだ』

両者の意志、不変。

しかし身体は如実に告げる。

本気の攻防ができるのはあと数度きり。

それからは意味のないことになる。

「……………」

二人の結論はいつも平行線を辿る。意見のすり合わせさえない。  
交わらないが、遠ざかることもない。

——それで、良いと思う。

息は荒い。喘息のように。

意識は遠い。無理に繋ぎ止めているだけだから。

視界は滲む。汗が染みた所為だ。

現実味のある痛み。

けれど目の前の現実の朧さといったらない。

目の前にいるのはあの少女だろうか？

目の前にいるのはあの青年だろうか？

——どちらでもいい。

どうでもいいことだ……けれど、どうしても。

自分の意志は曲げないと。

だから彼らは走り出した。

終わらせるという意志を伴って。

広い武芸場に、二重の息が木霊する。

どちらも苦しそうで、時折咳き込んだり、息が不規則になることもしばしばだ。

感極まった声で言うのは、赤髪の少女。

「っあー、っーかーれーたー！ー……」

すぐに咳き込む。気管に何か詰まったらしい。

武芸場の壁にすがり、座り込む銀髪の青年は吐息交じりに洩らした。

「お疲れ……にしても、病み上がりなのに全力でやるとはねえ……」

青年と少女の決闘は何も初めてではない。

聖騎士となってからの恒例行事。今回は異国での勝負となったが……結果はやはり引き分けだった。

一通り咳き込んだ少女は反発する。

「……アルフが悪いんだお！　もうちょっと女の子を労われ不埒者ー！」

「いや、全力でやらなかったら、承知しないって言ったのそっちだろう」

「……くそう。平行線上だぜ……」

「はいはい」

武芸場の地面に惜しみもなく大の字に転がるヴィナヘイムは、一息で起き上がって額の汗を拭った。

「汗かいた……水浴びしたいよ……」

「もうすぐ夕飯だろう。その後に真っ先に入れば？」

少女、不満顔で

「今すぐ入りたいわ……」

「我が儘言わない。順番決まってるだろ」

アルフレドは宥め、立ち上がる。

「三食昼寝付きなんて生活も飽きてきたな…これ以上ヒモになると、何か人間として大切なものを失いそうだ」

「同意ー、早くエンシェントに帰りーたーいー」

ヴィナヘイムの悲痛な叫びに共感したのは、銀髪の青年ではなく大人の女性の声だった。

「そうですわねえ。これじゃ軟禁しているのと変わりないですものね」

「……………いつからそこにいたんですか？」

少女はいぶかしみの目線を、背後の女性に向ける。  
相変わらず一寸の隙なく軍の制服を着る女性、エヴァに。

エヴァは余裕たっぷりに豊かな金髪を払って告げた。

「いやですこと。もうヴィナヘイムちゃんが驚いてくれない。詰まらなくなつたものですわね…」

感慨深げに言う。対し少女は

「いや、しょっちゅう神出鬼没っぷりを見ていたら慣れますよ」

「あらア？ 適応性があるわね。流石ヴィナヘイムちゃん」

「いえ…そういうわけじゃ…」

複雑な表情で言いあぐねる少女に、青年が助け舟を出す。

「…それで、ブリュンスタット軍師、一体何の要件ですか？」

「話が早いわね…もう少し世間話してからでも良いのではなくって？ 即物的な殿方は嫌われますことよ？」

「余計なお世話です」

エヴァへの身の振り方を覚えた青年は、しれっと言う。

熟女は不満げな顔をした後、溜め息を混ぜて言った。

「それがですわね……」

この僅か十数秒後、全速力で逃げようとする少女を押さえつけるのに、熟女と青年は珍しく共闘するはめになった。



## 第二十六話 宴会の果て（上）

そこかしこで、人々の談笑が聞こえる。

社交辞令の混ざった淑やかな挨拶。誇示の混ざった謙遜。

「……………」

青年は溜め息を吞み込み、半眼で辺りを見た。

大きな会場。着飾った人々。コテコテな服装。華美な洋装。

「……………」

もう一度、溜め息を吞み込み、喉へと嚥下させた。

指を挿し入れ、襟元を整える。

——流石、列強と言うべきなのか……

他国の舞踏会。

エンシェントとは、やはり豪華さに差ができる。

祖国にも貴族は居たし、王侯の一族・御三家は好待遇には違いなかったが、けれど……ここまで出し惜しみなく行事を執り行うことは滅多になかった。

それこそ、新しい王の戴冠式くらいなもので。

——こんなところでも、国力の違いかあ。

現実的だ。即物的でもある。

舞踏会用のぴっちりとした上着、借りた腕章や、剣を吊るベルト……全てが鬱陶しい。

幾ら着飾ったところで、自分は他国の使者に過ぎない。部外者だというのに。

壁際で、それとなく周囲のざわめきを傍観する。

——遅いなあ。

入口付近に屯する人は多いが、見知った姿は一向に現れない。

——逃げたかな……

あの少女のことだ、充分に有り得る。

少し、様子を見に行こうか。

思い立ち、彼が足を動かそうとしたところで、やっと望んだ人物が現れた。

その姿を見止め、ある種の納得と、諦念を感じずにはいられなかった。

——うわぁ。凛々しいー……

黒服を着こなす、長身な少女。

小物の類はどれも細やかながらも上品な造り。腰元には意匠の凝った腰帯と、挿されているのは見目美しい細身の刀剣。

耳に特徴的な赤髪を掛けて、髪を整えてある。髪飾りに小さな留め具が一つ。

一 の字に引き結ばれた口元、冴えた目つきには、隠しようのない意志の強さが滲み出ていた。

男装の麗人：こと、ヴィナヘイムは、青年を探し当てるなり、小走りに駆け寄って行く。

> i 3 0 0 5 1 — 2 3 4 3 <

「お待たせっ」

「……あー、うん」

反応に困る。

何故か少女は嬉しそうだった。

「見て見て、これ似合う？」

「……………」

——男装が似合うのって、褒めるべきなんだろうか……いや、ヴィナヘイムにとっては褒め言葉なんだろうけど……

悶悶としながら、取り敢えず告げる。

「…うん。とても、似合ってる」

嘘ではない。

「やった」

嬉しそうに撥ねる少女の背後には、これもまた、反応に困る人物がいた。

「…本当はドレス来て欲しかったのですけれど…。ああも全力で抗議されてはしょうがないですものね」

「ブリュンスタット軍師……」

アルフレドはその人物の名を口にする。

目の前の女軍師は、今日までは軍服と言うわけにはいかなかったのだろう。女性の正装であるドレスを着ている。

それは良い。それにしても…

——派手だなあ。

露出度が高い上に、真っ赤な上に、ぴっちりとしたカクテルドレスを着るというのは……何だかわざとらしい。豊満で締まるところは締まった理想的な体型を示威しているのか。

ヴィナヘイムとは別の意味で、会場の紳士の視線を釘付けている。「エヴァさんみたいに……に自信があるわけじゃないんです。それに、こっちの方が動きやすいですし」

少女は事なかれに言うが、……の部分に複雑な事情を感じ得ない。「いいじゃないですか。ひらひらのふりふり、着たくなかったんですの?」

「……遠慮します」

私服にさえ女の子らしさの欠片もない少女だ。その手の恰好には抵抗があるのだろう。

…憧れが微塵もないと言え、嘘になるだろうが。

アルフレドは以前からの疑問を口にする。

「それにしても、何故僕たちまで参加を? 見たところ、貴族と

王族の宴席のようですが……」

「不思議に思うのも無理はありませんわ。…そうですわね。実は、この場で、陛下から重大な発表があるというので…わたくしは、貴方たちを連れてくるように頼まれただけですの」

「重大な、発表……?」



ヴィナヘイムが鸚鵡返しに訊く。

「ええ。詳しいことは軍師にも伏せられていますわ。…これ以上は何も」

詳しい話を知らないという、エヴァの話の真偽はどうあれど、王者からの発表がするという事柄に虚偽はなさそうだ。

—どの道、大人しく待つしかないか……

まだ宵の口。宴は始まったばかり。これからもっと賑やかになるだろう。

「まあ、お二人も社会見学だとも思って、ゆっくりしててくださいませ。食べ物や飲み物は侍従に声を掛ければ、持ってきてもらえますわ」

—社会見学、な……

確かに言うとおりかも知れない。自分たちの触れることのない世界だ。

「では、失礼いたしますわ。…良い夜を」

エヴァは華麗な足取りで去っていく。彼女が青年と少女の二人から離れた途端に、取り巻きと思しき男たちは、彼女に群がっていく。

—女王様気質。

「ヴィナ、行こうか」

「うん」

男装の少女を連れ、大きなダンスホールを移動する。

見知らぬ顔の二人を、物珍しそうに見ていくのは、来賓の貴族だろう。

肌や髪の色に差異はないにしろ、雰囲気や風体で違いが分かるのかもしれない。

—それに……

この場で男装などしているのは、ヴィナヘイムくらいなものだし。

—ま、こいつらしいか……

似合っているし、良いこととしよう。

「喉乾いちゃった」

「そうだね」

近くに構えている侍従に頼めば、手に入るだろうか。

ダンスホールの一角にはバイキング形式で食事を摂る場所がある。そこにも貴族の輩が集まっているので、どうにも手が出しにくいのだが：

「ヴィナは待っててよ。軽食と、飲み物取ってくる」

「え：アルフ、私も」

「一人で充分。テラスで夜風に当たっておいで」

「：うん。。それじゃお先に」

予想よりも簡単に引き下がった少女は、青年の後姿を人垣に見送ると、踵を返した。

壁際の窓は開かれているものも多い。

その内、幾つかはテラスへと続いている。

――少し、夜風を浴びよう。

：というのは口実だ。場の煌びやかさにうんざりしているのが本音。

ヴィナヘイムは剣帯を鳴らし、壁伝いに進む。

途中に、何度も貴族の者らしき紳士淑女とすれ違う。

豊かな背格好。余裕のある立ち姿。

正直に申すならば、ヴィナヘイムは貴族があまり好きではない。

国民や農奴の賄った品物や金銭を吸い取っているいるから……ではなく、単純に、人として違うと実感させられる部分があるからだ。

彼らは、生き残る苦しみを知らない。

生きる苦しみは知っているだろう。だが、生きていく為の根本的な苦しみをしらない。

例えば飢え。肉体労働。

体の奥から何かを欲する、衝動的な飢餓。

体験したことはまずあるまい。

元は貧困層の生まれで、養子縁組してからも弱小貴族で育ったヴィナヘイムは、何時も貴族との概念の違いを感じてきた。

彼らに悪気はないが、そうさせたのは彼ら自身だ。

ならば、責任も相殺される。

――羨ましいのかなァ。

楽に生活できて、未来を保障されている彼らが。

――嫉ましいのかも……

大して激しい感情ではないが、嫉妬が全くないと言えば嘘になる。

――あー、もう、やめやめ。

場違いな所にいるから、性にもないことを考えてしまう。

――考えることなんて、私の専門じゃない。

割り切って、足をテラスに踏み込ませる。

……と、そこに。

思っても見なかった先客がいた。

## 第二十六話 宴会の果て（中）

思わずヴィナヘイムは息を詰まらせた。

夜風は涼しい。宵闇は心地よい。

丁寧に手入れさえ、木々を剪定された庭園が、うっすらと会場から零れる灯りを受けて照らされる。

理想の避難所。

そこまでは良かった。

しかし、目の前の石造りの手摺に凭れ掛かる人影。…彼とは、出来れば顔を合わせたくなかった。

黒い服。軍服に腕章や勲章が付いた礼装。型に嵌った衣装も、目が精悍で、体つきが強靱な者が着ると様になる。

特徴的な黒髪。片目に傷を受けた隻眼。

忘れもしない、自分の寝首を掻こうとした張本人。

「ユナイトⅡクロスアリア…軍師…」

反射的に目の前の人物の名を呼んで、少女は身構えた。

自分に夜襲を仕掛けた人物。再戦後、関わってくることはなかったが。

「……………」

男は振り返り、片目を少女に向ける。

表情に変化はない。冴え引き締まった顔付き。

「…聖騎士か」

やっと、音を紡ぐ。

ユナイトはヴィナヘイムの服装を上下見ると、何故か腰辺りで視線を留める。

剣帯の位置だ。

「成程。どんな時であろうと、手放さないと」  
言葉数の少ない淡泊な台詞。

ヴィナヘイムにも、示そうとする部分は掴めた。

あくまで鷹揚に告げる。

「…聖剣は私たちの象徴です。常に肌身は離さず持ち歩いています」

「殊勝だな」

「嗜みです」

会話が途切れた。

入口付近から、さり気なくテラスの隅へと移動する。

少女は気まづくなるのを、会話を繋ぎ止める行為で咄嗟に予防した。もはや条件反射だ。

「……行かないんですか？」

勿論、舞踏場にという意味だ。

「性に合わない」

——確かに。

思わず納得してしまった。

彼は良くも悪くも典型的な軍人氣質なのだ。遊びごとに現を抜かす気は毛頭ないのだろう。

その点のみを鑑みるならば、ヴィナヘイムと思考が似ている。

——あんまり…意識したくないけど…

似ているとはつまり、同質の人種だと考えて差し支えないからだ。他人と他人はイコールで繋がらない。僅かな相似形があるだけ。

今度は、珍しくユナイトが問う。

「そういうお前は？」

「似たようなものです…どうにも、賑やかなのは…」

——性に合わない…という言葉を直前で呑み込む。…代わりに「嫌いなんです」

ずばりと言い切った。いつそ清々しいくらいに。

「……苦手、ではなく嫌い、か……」

感慨深げに男は視線を流す。

こちらを向く視線に、僅かに動悸が速まった。

率直だからこそ目を離せない。彼の黒瞳に捕らえ込まれたよう。

「お前は…おかしな人間だな」

「はあ…」

「俺を…お前を殺そうとした俺を憎んでいないのか？」

——憎む？

はて、自分にその考えはなかった。

ヴィナヘイムは思案した後にとどろく言葉を紡ぐ。

「憎む…ですか。それはないですね」

「何故？」

「何故と言われましても」

黒い男は食い上がる。心なしか体も前に出ていた。

「質問を変える…何をされればお前は俺を憎む？」

何故か告げられた文言に、動悸が速まる。受動的な台詞は彼には不自然だった。

——尋問っばいなあ。

顎に手を添え、考え込む。

言葉を選ぶように。

「他人から…よく、抜けていると言われることがあるんです」

「…？」

ユナイトは訝しげな顔をした。

「えーっと…何と言うのか…私は、そういった憎む…とか恨むという感情が欠落しているようで…」

困って、少し笑う。

「だから、貴方を憎むことは出来ません」

これもまた、きっぱりと言った。

誤魔化しはない。

対する男は完全な無表情で問うた。

「…俺がお前を殺そうとも？」

「ええ。死んで意志が残っていたとしても…呪い崇めることはないですね。自業自得です」

「…お前の身内を殺しても？」

「……後悔はします。止められなかった自分自身に」

「ここでお前を犯しても？」

「……あー、その選択肢はないです。もしもの時は抵抗して……駄目だったら、舌嚙み切って窒息死しますし」

「……俺が死体愛好者だったら？」

「えー……どうしよう……？」

何故か、少女は目の前の男に問う。えげつない会話に少しも怯えることなく。

ユナイトは直感的に悟った。

彼女は……目の前の少女は、偽りの言葉を吐いていない。

ただ事実として、淡々と述べている。単純な自己解析だ。

——信じられない。

少なくとも、彼のような人種にとっては考えられないこと。

「……博愛主義者か」

赤髪の少女は首を振った。

「ちょっと違う気もします。私は喜怒哀楽激しい方ですし。詰まらない出来事に腹を立てることもしばしばです。……ただ、憎悪はそういったものとは別格にあるんですよね……」

「何故？」

「いやあ……そう問い詰められても……」

ヴィナヘイムは一度唇を舐め、続ける。

「……昔、母が言っていたことがあります……どんな状況でも……どんな場所であっても、世界と誰かを愛おしく思っていけないことはないって」

「……」

「慈しみの心は縛られません」

「それが、お前の意思か」

「ええ」

一度、意義を込めて頷く。

「……私は、大それたことを言える年齢でもないですし、仁徳だって

ないのですけれど……母の言っていたことは間違いないと、断言できます」

「信じているのか？」

「え？」

「お前の信じている道かと訊いている」

厳しい言い草だったが、先程よりは弛緩した声音。

ヴィナヘイムは快活に返事をしてみせた。

「はい」

同時に、少女の顔に明るい笑みが浮かぶ。

いつになく饒舌だった男は、ふつとりと黙り込んで歩み出した。

「……おかしな女だ。お前と話していると疲れる」

テラスの淵を歩み、少女へと近づく。

ユナイトがヴィナヘイムの正面まで来た所で、存外な出来事が起こった。

思わず、口唇から眩きが洩れた。

「……え……？」

ユナイトは膝を折った。

優美な仕草で、傳いて礼をする。

アルフレドとヴィナヘイムでさえ、腰を折る人物は唯一人だということに。

……そう、傳くのは自らが忠誠を誓った人物だけのはずだ。

軍人で誇り高き彼が、どうして自分に膝を折る？

——ちよつと……

「あ、あの……」

どうしたらいいのか、おろおろしてしまう。

垂れていた頭を上げ、ユナイトは一言のみ告げた。

「I have existence it's up to my dear」

異国の言葉だった。

流れる発音。美しい綴り。



暫時、安心してしまおう。

ヴィナヘイムが茫然としている内に、ユナイトは立ち上がった。片目だけの炯眼が、再度少女を見止める。

溢れ出る何かを押し込め、必死に目を合わす。

――あーつと、これ：なんだっけ。

ああ、そうだ

――蛇に睨まれた蛙？

いや、違う。絶対違う。

何かがおかしい。何がおかしいのかよく分からないけど……

「あの、軍師……？」

「………」

引き留めたが、男は踵を返し、躊躇いなく去って行った。

残されるのは、赤い影が一つ。

――あっさりしてるなあ。

今のは何だったのか。

彼は何を言った？

「まあ……いっか」

気にはなるが、引き留めてまで聞き出す内容でもあるまい。

それよりも、ヴィナヘイムは嬉しかった。

――ちゃんと、話の分かる相手だった……

少なくとも、冷血人間ではなかったようだ。

さり気なく拳をぐつと握り、髪に手を当てる。

耳元に触れると、金属質の感触が伝わってくる。

義母から貰った髪飾り。

――ミューハーさん：ヴィナヘイムは、ちゃんと生きています。

だから、どうか心配しないでと言いたかった。

「帰るから……絶対」

祖国に帰る。

剣帯を吊り直し、頬を両手で挟み叩いた。

――しっかりしないと。

聖霊の騎士に選ばれたからには、自分の肩には国の命運が掛かっている。

「よしっ！」

「ヴィナ！」

気合いを入れたのとはほぼ同時に、自分と呼ぶ声がした。

思わず脱力しそうになる。

振り向いて、見慣れた姿に体を向けた。

予想通りに、白銀の青年が立っている……しかし何か様子がおかしい。

「アルフ……？」

「いいから、早く、こっち！」

珍しかった。いつも落ち着き払っている青年が慌てているのだから。

——何事だろうか。

答えは青年の次の口にあった。

「イザベルの王の声明だ！ 呼ばれてる！ 早くっ」

「……え？」

考える暇も与えられず、少女は青年に引っ張られ、テラスを後にした。

## 第二十六話 宴会の果て（下）

会場は相も変わらずの盛況っぷりだ。

豪奢で俗世離れた雰囲気は、時間の流れさえ緩慢にしてみよう。

だが、先程のような個々が自由に行動している……という在り体は、そこにはない。

貴族や軍部の将校、招かれた客人は全て、舞踏場の一角を見つめていた。

——何かが始まるのだ。

アルフレドはヴィナヘイムを連れ、会場を突っ切って行く。

先程、ヴィナヘイムと別れた後、彼は白衣の女……呪印を持つ軍師ヴェンゼルに呼び止められた。

イザベル国王が、直々に伝えたいことがあると。

急いで、少女を引き連れ戻ってきた彼が目にしたのは、王の神託を待つ人々の姿だった。

謁見用の二階席。やや一段高くなった位置に、人々の視線は送られている。

二人は人垣に阻まれながらも前に進み、赤いドレスの女の許まで駆け寄った。

「お待ちしておりましたわ。御二方」

「……エヴァさん、これは……」

「陛下がご決断を下されたようですの」

——決断……

「それは……」

「分かりませんわ。けれど……貴方たちに関係のあることだと思えますの。……いえ、正確には、貴方たちの国に、でしょうか」

——エンシェントに……？

ならば、示唆する内容は一つ。

国交について：そして、戦ごとについて。

「分からないからこそ、御二人に先に注意をしておきましょう。  
：いいですか。これはわたくしが御二人のことを悪く思っていない  
前提での話ですが……」

囁んで含めるように、エヴァは告げた。

「陛下の指示次第では、我々軍師は、今ここで異国の騎士を殺す  
ことも厭いませんわ」

「……」

そうだろう。そうでないとおかしい。

——彼女はどんなにアルフレドとヴィナヘイムに友好的であろう  
と、敵国の軍師なのだから。

少女の表情が強張る。

青年は一步前に出て女軍師を牽制した。

「構いませんよ。仕事でしょう？」

「理解が早くて助かりますわ：尤も、最悪の事態が起こる可能性  
は低いのですけれど」

「それは……」

——どういう意味か問い詰めようとしたところに、制止が掛かる。

「陛下が見えました。：お静かに」

赤い女が言うと同時に、言葉通りに上段に王者の姿が見えた。

当初、会った時から変わらない剃髪、鷹のような目つき。

会場が、騒然となる。

王者は淀みのない足取りで壇の中央まで躍り出た。

「——急な召集の許、よく参られた。国の後先を担う者よ」

語りかける声は、貴族や軍の上層部への慰労が込められていた。

「皆の奮闘の末、この旅の反乱を退けられたこと、誠に感謝の意  
を感じる」

辺りを見渡し

「……反乱軍には、軍部が容赦なく立ち向かっていくことを決断  
した。他賊には屈しない。：我々、イザベルの尊属は、これを以て

して、我が国家の基盤をより堅牢に致す」

一度、息を吸う。

「――盤石たる我が国家に、栄光あらんことを」

どこからか、賞賛の声が聞こえる。

声は次第に大きくなり、拍手も混ざって喝采となった。

この場で部外者である聖騎士の二人は、顔を見合わせた。

周囲の人間に聴こえない程度の小声で、少女青年に耳打ちした。

「……凄いね、なんか……」

「うん……」

喝采が収束していく。

「そして今回、貴殿ら尊属を呼び出したのは他でもない。…隣国にして、我が国と休戦中の国…エンシェントについて、我らの決定を知らせる為である」

――来るぞ。

王はしかと告げた。

「――イザベルは、エンシェントに降伏する心持である」

――…！

何だって？

降伏…？

――そんな馬鹿な……

二人の騎士はまたもや目を見合わせる。

驚愕の視線を以て。

当然、会場の人々の間にも動揺が広まった。

勝てる戦をわざわざ自分たちから負ける意味が分からない…といった様子。尤もだ。

「――静粛に」

王の従者が一喝する。

鶴の一声に、会場は再び静まり返った。

「…貴殿らの心情も理解できないわけではない。エンシェントとは休戦条約を結んでいるが、こちらの優勢は覆されることはなかつ

た」

静かに莊嚴に告げ、王は炯眼を伏せる。

「――そう、今迄はな」

続けて。

「我々がこれから後にエンシエントを攻めようとも、しかし、間違ひなく私たちは負けるであろう」

言い切った。

場は、先ほどとは違った意味で騒然となる。

張りつめた空気。表面張力を僅かに揺らせば、杯が零れることは必須だ。

「――エンシエントには、恐れるべきものがある。

一つに、豊かな鉾山資源。恵まれた土地。

一つに、利発で狡猾な王者。

そして……王が従える騎士だ」

韻を踏むようにして、イザベルの王は言う。

「――対の聖騎士！」

「……！！」

二人して、顔を見合わせた。

――まずい。どうしようか。

反射的に二人は逃げようとした。何が起こるのかは分からないが、祀り上げられて袋叩きにでも遭ったら敵わない。ここはやはり、敵の陣地なのだ。

踵を返そうとした二人を、諸手が挟んだ。

「……おいおい、まさか逃げようってんじゃねえよなー？」

「……大丈夫、です……悪いようには……しません……」

壮年の男の声と、老婆の声。

アルフレドの肩にはペイルバンカーの、ヴィナヘイムの肩にはヴェンゼルの手が掛かっていた。

青年と少女は顔を突き合わせ、諦念の笑いを洩らした。

「……………はは……………」

「……うふふ……」

——逃げ場なし。

——勘弁してくれよ……

青年は内心で毒づいた。

「陛下の御前に」

アルフレドとヴィナヘイムは押し出される形で、王者の前に立たされる。

周囲の視線が痛い。

イザベルの統治者は、相変わらずの仏頂面で二人を指示した。

「この二人が、エンシェントからの使者。——対の聖騎士である」

——言っちゃったよ……

何時の間にか、王の周りには軍師が集まっている。

——やばい。

確実に断頭台上がった。

——軍師の面々：ユナイトやエヴァ、ヘルカインなどの知っている者もいれば、知らない者もいる。

勝てる気がしない。

総勢たる面々は、二人の周りを囲むようにして立つ。

——どうしよう。

——どうしようもない。

ふと前方を見やると、やはり王は威厳を持って立ち塞がっている。重い口が開かれた。

「——我ら尊属よ。よく聞くんがいい。彼らはエンシェントの頂点に君臨する騎士である。……そして、我が国の十二軍師を以てしても、彼らを負かすことは出来ない」

「……え……？」

王の告げる言葉に、二人は違和感を覚えた。

「年若い騎士であれど、彼らは一騎当千の猛者である」

——こっちの顔を立っている？  
どうして？

「イザベルの軍を殲滅することすら、彼らには容易いであろう」

——それはかなり誇張表現が……

青年の心中の眩きも、王には届かない。

「——我らは、彼らに屈服した」

「……ちよっ……！」

絶対に有り得ない。寧ろ逆ではないのか。

身を乗り出した青年と少女を、射抜く空気。

ユナイトが物凄い形相で睨んできた。

彼の眼は言っている。

——いいから黙って聞いている。

また、視線を巡らすと、エヴァは楽しそうに、ヴェンゼルは微笑ましそうにこちらを見ていた。

——何だ、これ……

胸底に、気持ち悪さを感じる。

——彼らは、何を企んでいる……？

「——我らは、エンシェントに降伏した上で、友好条約を結び直そうと思う」

ヴィナヘイムは、必死に物事の真髄を見極めようとしていた。

「国交も回復させる。各国の壁を取り払う必要があるであろう」

アルフレドは、相手の化けの皮をどうやったら剥げるのか模索していた。

「——全ては我の一存だ」

最後に、王は告げ、

——そして、腰を折った。

頭を垂れ、懇願する。

「我ら、誇りを汚すつもりはない。無益な戦いを避けることで、繋ぐ可能性を途絶えさせない為である。……尊属らには、御理解いただきたい」

一帯は啞然とした。

気高く誇り高い大国の王が、貴族とはいえ格下の相手に腰を折っ



ている。

見る者は、その光景に何を思ったのであろう。

一様に深刻な顔つきであつた。

動くことのない空間。

沈黙した時。

――しかし、動きはあつた。

エヴァが王に向かって、ドレスの裾を持ち上げ、淑女の見本の如き礼をする。見惚れるほど華麗な動作につられ、軍師の男は傳き、女はやはり服の裾を持ち上げて深く頭を下げる。

王への忠誠の証だ。

伝播する流れは、軍部の上層部であらう貴族らの腰をも折らせた。次々に、彼らは沈んでいく。

アルフレドとヴィナヘイムは、信じられない気持ちでそれを見ていた。

統率のとれた動きはやがて、その場にいた全ての人々を倒伏させる。

「――Yes, my lord」

何処からか、真摯な声がする。

――信じられない。

ここまで崇高で、完璧で、美徳な主従関係は見たことがない。彼らは、自らの信じる王者に全てを賭している。掛け値なく。

「――対の聖騎士よ！」

呼ばれ、二人は反射的に返事をしていた。

「「はい」」

「∴我らの併合を如何に見る？」

少女を遮り、青年は一步踏み出す。

心配そうな彼女に、大丈夫だと眼で合図して。

「∴美しい∴結束に見えます」

王は頷き、辺りを睥睨した。

「貴公らに問おう。我らは敗者だ。∴勝者の権利を述べ、敗者か

ら奪えるものを奪うがよい」

「形ある物に縋るのは……醜き拘泥かと」

アルフレドは真っ直ぐに、膝を折りもせず第一級権力者に伝える。

「貴国ほどの列強から頂いた評価、誠に賞賛の極みです……故に、私たちの国は、貴国に勝利した事実を誇りとしたい。……物の為に戦ったのではなく、純粹に勝ちの為に戦ったのだとして」

王は僅かに口元に笑みを浮かべた。

「……良い答えだ」

「光栄です」

「なれどこそ、自国はエンシェントと和平を行いたい」

「……勿論のこと。僭越ながら、歓迎いたします」

アルフレドも心持ち、眼を細める。

王は手を振り、神託を下した。

「――我らは宣言する。ここに、不毛な戦いの終息を！」

## 第二十七話 戦の終わり

つい数週間前、潜った城門に、見送りの影が見える。

あの時はここに入る為だった。今は出ていく為にこの場を潜るのだ。

いろんなことが有り過ぎて、数字に換算するとあまりに軽薄に感じられてしまう。

——長かったな。

帰国を望む心ばかりが急いて、時間は濃密に感じられた。

いつもそう、楽しいことや待ち遠しいことはすぐに終わるが、嫌なことや不安な事態は長続きして感じられる。

アルフレドは王城を振り返り、肩の荷を担ぎ直した。

背後でこちらを見る軍服の女性に振り返る。

「もう少し、ゆっくりしていかれても良かったんですよ…?」

「いえ、自分たちの本分は、王都の守護ですから」

青年の言葉に続き、隣の少女も

「それに、居候してるみたいで居心地悪いですし」

イザベルの国王からの降伏宣言があったのが、昨日の今日、返事を貰うという大義名分を果たした以上、他国の王都に長居する必要は感じられない。

そもそも、二人とも早く王城から出たくてしょうがなかったのだから、やっと…という思いが強いだろう。

「ヴィナヘイムちゃん、貴女さえ良ければ、わたくしの部下に永久就職してもいいんですよ?」

「…いやあ、それはちよつと……」

困った風に頭を掻く。

見送りのエヴァの背後から、新たな人影が現れた。

「……どうか、…お気をつけて」

老女の声に、若い容姿。白い衣服。

「…ヴェンゼルさん。今迄有難うございました」

「……いいえ。また、縁があれば…出会うこと、も…あるでしょう……し……」

「ええ。その時はまた」

エヴァは頬に掌を当てて、ほうと息を吐く。

「陛下の言葉には驚きましたわ。…頷ける点もあるのですけれど」  
アルフレドは問い返す。

「イザベル王の決断に、反論はなかったのですか？」

「ないと言えば嘘になりますけれど…それでも、あの方はわたくしたちの主ですからね」

——絶対服従の王。

「…それに、わたくしだって、エンシェントを攻めて屈服させることは難しいと考えていたんですの」

齒に衣着せぬ言い方。

彼女らしい物言いに、ヴィナヘイムは苦笑する。

「それはまた、何故ですか？」

「…だってえ。貴方たちがいるのですもの。返り討ちにされてしましますわ」

青年と少女は顔を突き合わせて笑う。

「僕たちを、何だと思っているのやら……」

「ですが、事実ですわよ？ ヴィナヘイムちゃんの弓技・剣技。

そして貴男の巧作・力量。一つでも充分に脅威に値しますのに、両者が揃って怯えない道理はないですわ」

率直な褒め言葉に、二人はまたはにかんで笑う。

「貿易も再開されれば、二国を行き来することも容易くなるでしょう。友好条約を結ぶことができれば、片方の国が戦の時、もう片方が助力出来ますわ」

——蓮托生か。

不思議だ。ついこの間までいがみ合っていた国同士なのに。

「…そもそも、両国の戦自体が過去の産物ですの。休戦状態は、殆んど戦線を廃した状態でしたし。形だけの戦争など、早く終わらせた方が得策ですわね」

青年は合点がいった。

つまりイザベルはもう、戦果に執着していなかったのだ。

「そうですね。…もう、戦時下だったのは、もう何十年も前の話ですし……」

エヴァも頷く。

「ええ。ですから、今回、御二人がいらっしゃったのは、こちらにとっても渡りに船でしたわ」

「……僥倖、だった…ん…です……」

形式上だけとはいえ、敗戦したのに、イザベルにはその未練がない。

——うまく、いったのかな……？

当初のエンシェント国王の命令は、戦争を免れさせろ…ということだった。

休戦、もしくは終戦という手段をとれと。

ならば、目的は達成された。

——しかも、思ってもみない優位で。

この報告が何よりもの土産だ。

「…良かったね。アルフ」

「ああ。…一時はどうなることかと思ったよ」

「私の所為かな？」

上目に訊いてくる少女に、青年は悪戯な笑みで応じた。

「そうでなくともヴィナの所為だね。いつも無茶ばかりして」

「……無茶してるのは、アルフも同じじゃない……」

「同じじゃないよ。僕は分を弁えてるから」

「何よ偉そうに」

彼女は唇を尖らせ、赤髪で顔を伏せる。

微笑ましいな、と思う。

エヴァが意味ありげな笑みと共に、二人の間に割って入った。

「手続きが済んだようですわ。……もう貴方がたを引き留めるものは御座いません。どうか、お気を付けて」

親交書の文を持たされ、ヴィナヘイムは律儀に頭を下げる。

「お世話になりました」

「同様に」

アルフレドも頭を垂れた。

「……ええ。願わくば、貴方たちの行く末に幸多からんことを祈りますわ」

「……また……どこかで……」

ヴェンゼルの言葉と同時に、遮っていた扉が開け、開門する。

「さようなら」

最後に一言を告げ、去る少女は歩みだす。

青年もそれに続き、振り返ることはなかった。

## 第二十八話 宿す予兆

「…行ってしまったわね」

一度も振り返らず街路へ去った影を、二人の女性が見送っていた。

「……ええ」

老女の声をしたヴェンゼルが、淑やかに頷く。

「全く…陛下も人が悪いですわ。彼らの『役目』知っておられたのでしょうか？」

「…その、そうですね…だから、彼らを、無事に…返した…」

「彼らの役目を見届けるのが先か…それとも、わたくしたちが呪印に吞まれるのが先か…如何なものでしょうね」

「………」

二人は沈黙し、やがてエヴァのみが背後を見やった。

「——何時までそこに居るんですの？ ユナイト」

「………」

無言で、彼女たちの背後から男が現れた。

朝日の中でも存在感を放つ漆黒、隻眼の男。

彼はエヴァへと歩みを進めた。

「…俺の勝手だろう？」

「ええ。勝手ですわね。…ですけど…貴方は宜しいんですの？」

「何がだ」

無然とした黒い男の声に、熟女はあくまで静かに提示する。

「…ヴィナヘイム・ハンデッド・ベイカーをあのまま行かせて」

わざと、彼女は少女の名を真名で告げた。

「貴方のインフィニティ…重複と並行して無限の意味を持っていたわね。あの娘の荊の刻印とは相性が合ったでしょう？ 近くに置いていれば、負担を軽減して、貴男の呪印の進行を抑えることも出来たでしょうに」

エヴァの言葉に、男は空を仰いで呟いた。

「荊は延々と続く、永劫の象徴である……か」

「そうですわ」

「馬鹿馬鹿しいものだな」

吐き捨てる。大した感慨もなく。

「…貴男は…あの娘を……」

「エヴァ…ブリュンスタット」

名を呼ぶ。

「…何ですの？」

「お前は昔から、他人の世話が好きだな」

「…ふふ、人徳ですの」

「どうだか」

男はついと視線を逸らし、そのまま歩き去っていく。

彼と擦れ違う形で、一人の青年が走ってきた。

息を切らして、エヴァの前に立つ。

「ミーテッシャさん？ どう致されましたの？」

「……ぜ、え……は、あの……ごほ、ごほっ、ふた……はあ……」

「落ち着きなさいませ」

「…ごめん、なさい…あの、二人は？」

「もう発たれましたわよ？」

「えー！ー！？」

これ程かという位に、眼を見開く青年。

宥めるようにエヴァは補足する。

「一足遅かったですわね。今から追いかけても遅いと思いますけれど」

「……そんな……うう……」

ミーテッシャの、一見可愛らしい顔つきが歪む。

「まあまあ。そんなに気を落とすことは有りませんのよ。…彼らに何か用が？」

「用、って程でもないんですが…フェイルコールさんに…別れの



挨拶が……」

「そういえば、やけに貴方は彼に懐いていましたわね」

「……うう……そういう風に見えましたか……？ 実は……彼のこと……少し気になっていたんです……」

「………」

聞いた彼女は、笑みを崩さずに一度首肯した。

「――成程。ミーテッシャさんは同性――」 「違います」

即座に否定が来た。

続いて、慌てて彼は弁解する。

「断じて邪な気持ちではなく……僕は、偶然、フェイルコールさんが皆に隠れて鍛錬をしている様子を見たのですが……あれは、素晴らしかったです」

回想を浮かべながら、少年と見紛う青年は話す。

「……聖霊因子が、たくさん飛んで、綺麗でした。……剣筋も、凄く迷いがなくて、真っ直ぐで……やっぱり綺麗で……」

拙い言葉ながらに、伝えようとしていることは分かる。

「彼の闘技に惚れ込んだんですね」

「……率直に言えばそういうことになります……正直、憧れました」  
照れ臭そうに、頭を掻く。

正直に、飾り気のない自分の本心が口に出せるのは、彼の長所だろう。

純朴な子なのだ。

――彼でさえ、軍師に選ばれ呪印を身に宿す。

「『アイン』は定着しましたの？」

「……え？ ええ……はい」

話の路線が外れたことに疑問を抱きながらも、ミーテッシャは素直に答えた。

「まだ、痛むことはありますが……有効範囲も大分広がりましたよ」  
「そう……幸いですわ」

「本当に、皆さんのお陰です。一般兵卒からの昇進は、全て陛下

に頂いたようなものです」

少し悲しげに、諦めの笑みを混せて青年は語る。

「……………」

エヴァは心中に複雑な思いを抱いた。

——何時まで、この子は感謝するだろうか…？

「…エヴァさん？」

「……いえ、何でもありませんわ。あまり長居しても衛兵たちの仕事を阻害してしまいますわね。…そろそろ失敬いたしましょう？」

「あ、はい」

小動物みたいに頷き、ミーテツシャは立ち去って行く。今迄、影の如く気配を殺していたヴェンゼルも歩みだした。

エヴァもそれに続こうとして、背後の閉じかける門を見る。

もう、青年と少女の姿は見えない。見える筈もないが。

一度だけ、門の隙間から吹き抜ける風を浴び、流れる空気に音を晒した。

「……貴女は何処に居ますの？ フレイ」

「久しぶり、ハインケル」

「……ああ」

「帰りの道案内、頼める？」

「…その為に残っていた。馬を預けてある。行くぞ」

相変わらずの簡潔な台詞に、少し肩を竦める。

アルフレドと共に、ヴィナ Heim も歩みを進めた。

王城からさして距離もない街角。黒髪の青年、ハインケルは住宅の壁に身を預けるようにして二人を待っていた。

彼が今も王都の中に留まっていたこと自体が驚きでもあるが、彼の仲間がまだエンシェントに捕らえられていることを鑑みれば、確かに勝手な行動は慎む必要があったのだろう。

ハインケルと別れる時、ヴィナヘイムは彼とある約束を交わしていた。

——「帰りの道も必要ならば案内しよう。ただし：王城に入ったらあちらのルールに従わされるのは道理だ。：だから、良いか。オレの言う方法で安否を知らせろ」

——その方法と言うのが、空矢を放つことだった。

夜半にハイトの弓を使い、矢をつがえないで聖霊因子のみを放つ。

そうすれば、流れ星の如き一筋の光が生まれ、遠くからでも視認できる。

光による信号方法を毎晩行い、安否を知らせた。いわゆる狼煙の代わりだ。

そして、昨晚は光の矢を立て続けで二本放った。——帰還の合図。客室からでも、テラスで十分に弓が放てたことが幸運だった。

「帰りの道程は？」

「行きと変わらない。今度は川を上る」

「了解」

二人は帰国できる嬉しさに胸を躍らせながら、その地を後にした。

## 第二十九話 祖国への帰還

初夏の風に身を当て、動く吐息を風に流す。

「……ああ、帰って来た……！」

感慨深く、王都の門境を一足で踏み越えた。

「生きて帰ってきたあ！」

「はいはい。ヴィナ、通行人の皆さんの邪魔だから、早く除けようか」

「……それはあっさりし過ぎじゃないの、アルフリー！ もうちょっとこう……感動したりとか……」

「感動するのは自分の家に帰ってからにしよう？ 陛下への報告がまだだよ」

「はいはい」

青年の言い分は尤もだ。

ハインケルも二人の後に続く。馬は王都の隣村に預けてきたので、無論、徒歩だ。

今迄の疲労はどこへやら、足取り軽く道行く人に声を掛けていく少女の背は、覇気に満ちていた。

「——おう、聖騎士さんよ、お出かけしてたのかい？」

「はい、少しだけ」

「アルフレド様、ヴィナヘイム様、御久しゅう」

「ええ。こちらこそ」

道行く人の声をあしらいながら、二人は商店街を歩いていく。懐かしくも、見慣れた光景。

「……何かさあ」

「うん」

「いつもと変わんないね……聖騎士が数週間王都を空けてても、案外、気にされてないんだ。……少し寂しいかも」

「そうでもないよ」

微笑んで、アルフレドは指し示した。

賑やかな商店街で、こちらに向かって突き切って来る小柄な影がある。

見覚えのある姿に、ヴィナヘイムはぞっとした。

「クラリス…？」

「こんのー！ その二人イー！！」

ハインケルが心なしか身構えたが、アルフレドが目配せで制止した。猪突猛進で二人の前に来た少女は、勢いをころさずにヴィナヘイムに抱きつく。

何事かと、周囲の住民の視線が集まった。

「うわ、ちょ…！」

当然の大きな衝撃に体は傾ぎ、路上に押し倒されそうになったのを、アルフレドの手で支えられる。

「ッ何なのよ！ イキナリ二人して居なくなったと思ったら！ アンタラアレですか！？ 遂に新婚旅行に出たのかと思ったわ馬鹿あー！ 親友にことの次第を伝えずに消えるとは何事だあ！？」

「……………」

アルフレドとヴィナヘイムは顔を見合わせ、諦めの笑みを見せた。

背後のハインケルが、訝しげに問う。

「…彼女は？」

「ヴィナの親友。…怪しい娘じゃないよ」

納得がいったような、いかないような顔つきで、黒髪の青年は取り敢えず首肯した。

ヴィナヘイムは久しぶりに会話する同級生に、申し訳なさそうな口調を発する。

「……クラリス…」

「心配したのよっ！ 王城の人に訊いても全く話してくれないし！」

「…うん。…隠密の勅命で王都を離れてたの…ごめん」

「謝って済めば警邏隊はいらないのよ！」

僅かに潤んだ瞳で、クラリスと呼ばれた少女は顔を上げた。

雀斑の散らばった顔に、明るい色合いの瞳をしている。齡は、ヴィナヘイムと変わらないくらいだ。

「聖騎士が、王都を離れちゃいけないのよ!」

「うん…今回は例外だったの…」

「…………ツ」

何か言いたそうなクラリスは、けれどヴィナヘイムの首に回していた腕を離して、抱きついていた体を引き剥がす。

「……あー、…いいよ…もう、帰って来てくれたからさ……」

ややあって赤面し、二人の帰還者に向き直る。

居心地の悪そうに、けれどはっきりとクラリスは告げた。

「…お帰り。ヴィナヘイム。アルフレドさん」

友人からの熱烈な歓迎を受け、数刻後。

二人はエンシェント王城の、謁見の間に居た。

——この場を訪れるのも、随分と久しい。

中央には、玉座に腰掛ける老齡の男性。そして——

「よく戻られた。帰還を待っていたよ」

記憶に齟齬のない落ち着いた口調で、聖騎士二人の主は言う。けれど、聖騎士二人は両者とも不思議そうな顔をしていた。

「……あの、陛下？」

「何か？」

最初に言葉を発したのはヴィナヘイムだった。

眼の遣りどころに困りながらも、一つの疑問を口にする。

「いや、その…何故、テレザ様が……？」

戸惑いを含んだ声。

「何よ女騎士、私がここに居てはいけないの？」

——途端、気の強い声がする。

聞きようによつては、偉そうで傲慢そうな印象を与える年若い女の声だ。

「いえ、そういうわけではなく……」

茶を濁す……とは、このような場面を指すのであろう。

少女と青年は、畏れ多くも面を上げ、傲慢な声の主を見やった。

王の玉座の隣に、似通った造りのもう一つの玉座がある。

本来ならば王の妃である王女の席だが、今は違う人物が座していた。

上質なドレスは、桃色の長衣。透き通る程に白い肌。全体的に柔

らかそうな肉付きなのに、見る者には華奢な印象を与える。腰まで伸びた髪は、生来の緩いクセを残していた。

見るからに、勝気なお嬢様、といった風貌。

王に仕える聖騎士の二人は、当然彼女が誰かも知っている。

——王位第一継承者。テレザ・エンシエント・オーフェン。

王の長女にして、唯一の愛娘だ。

彼女は普段は王都から離れた、今は亡き王妃と過ごされた後宮で、侍従たちと過ごしているはずなのだが……

「テレザももう十八だ。そろそろ後宮に籠ってもいられない」

「……」

王の言葉に、違和感を覚える。

確かに彼女は現国王の唯一の肉親であり、王位第一継承者だ。国の政治のことなどを学ぶ、王都の生活に慣れるという名目でも、正しい判断だろう。

しかし、アルフレドとヴィナヘイムの心中は同じ。

——聖騎士が国を空けている間に、移動することもなかっただろうに……

何だか、わざとらしい。

青年は一息ついて、確認を取った。

「……それでは、姫はこれから王城にて生活なされると……」

「その通りよアルフレド。これからは、毎日会えるわね」

——ピシッ。

王女のやけに嬉しそうな顔と、媚びたような余裕の笑み。甘ったるい猫なで声。

先程の、もう一人の赤毛の少女への対応とは天と地の差。

それを視認した途端、ヴィナヘイムは自身の堪忍袋の亀裂の音を聴いた。

——ああ。そういうこと……

やはり、生意気な姫は自分に喧嘩を売っている。

今も、隣の青年に向かって壇上から熱い視線を送っているのだから。

彼女が聖騎士の青年に少なからず懸想していることは、本人たちも周囲の人間も周知の事実だ。

何しろ、彼女はアプローチが過激だ。

どうだ、とても言いたげな顔で、華美な王姫はこちらを見下す。

——私への宣戦布告……？

どうあれど、売られた勝負は言い値で買う。相手が気に入らない女なら尚更だ。

ヴィナヘイムの心中に熱い対抗心が浮き上がる。

——いい度胸じゃない。

そうして、少女の受難の日々は始まった。



### 第三十話 新たな敵

王城は普段どおりの静けさと平和を持って佇んでいた。

古く、かつては要塞としても機能していた城の内部には、郊外へと出でる地下通路もあれば、敷地内に井戸も幾つか備えてある。明らかに籠城戦に備えた造りとなっていた。

石造りの王城は基盤がしっかりとっている。

その上、地理的な関係でエンシェントでは地震がほとんど起こらない。

盤石として建つ城は、王城内部に居たとしても力強さを肌で感じるのだ。

こうして廊下を歩いているだけでも、重厚な響きを響かせ、どっしりとしている。

ある種の荘厳ささえ感じれるのだ。

それも彼にとっては感じ慣れた感覚ではあったが。

「フェイルコールさん」

「…はい？」

廊下を歩く青年——アルフレド・ハンデット・フェイルコールは振り返った。

見ると、衛兵長の男性が通路を塞ぐ形で立っている。

「どうかしましたか？ 衛兵長」

「あの…その…実はですね……」

人の良いことで知られる彼は、何故か視線を逸らす。定まらない口元を動かし

「フェイルコールさんをお呼びできて欲しいと…今すぐに……」

衛兵長の言葉には主語がない。

アルフレドは一応に問うた。

「誰に？」

「あの…ですね……」

逡巡の後に発せられる言葉。

本日何度目かのその名前に、青年は溜息を吐いた。

緩慢な声が響く。

視界の悪い雑木林には、数人が適当な距離感を持って休憩していた。

「…いーち、にー、さーん、しー…ほら気合い出すー…」

「いやいや。気合い出てないのヴィナヘイムの方でしょ」

すぐさまに横合いから突っ込みが入り、倦怠げな声の少女は起き上がった。

彼女は赤毛を掻き上げ

「いーち！ にー！ さーん！ しー！」

「…叫ぶなよ」

「…ごめん何かこれが今の私に出来る最大限なんだ」

息継ぎもろくにせずになやべり、赤髪の少女は眉根を落とす。

「クラリス…あのね………」

「そんな目で見ないでよヴィナヘイム。どうしたの？」

「あのね…あのね…アルフレドがね……うふふ…ふふふふふふふふふふ」

「怖い」

クラリスと呼ばれた、ヴィナヘイムと同年代の雀斑の少女は腕を組み、神妙に言う。

「…何か帰ってきてから様子おかしいけど。どうしたのよあなたたち」

「その…実は…あの…姫様が……」

クラリスの頭には、つい最近王城に移ってきたという王の娘の顔が浮かんだ。

「テレザ姫？」

「そう。…姫様ね…城に入ったでしょ」

「みたいね。丁度、ヴィナヘイムとアルフレドさんが帰ってくる二、三日前だったかしら。私もその頃長期演習してたから、王城内部の情報には疎かったんだけど」

長期演習ということは、近くの野山で武芸の持久戦でもしていたのだろうか。

今だって、弓部隊の演習の真ただ中だというのに、予定を詰め過ぎだ。

——最近の士官学校の気合いの入りようには恐れ入なあ…。

他人事らしく思い、赤毛の少女は話す。

「まあ、この姫様がね…：アルフレドに付き纏っちゃって…：」

「付き纏う？」

「うん。分かり易すぎるんだけど…：たぶん姫様は、アルフレドのこ  
と…：」

少女二人の視線が交わった。

「「……………」」

クラリスは目を丸くする。

「それってやばくない？」

「うーん。まあ…：聖騎士と王族の結婚は認められてるし…：」

ヴィナヘイムは手首を回しながら、滑舌悪く呟く。

対する雀斑の少女は赤毛の少女の背中を叩いた。

「どこまで考えてんのよ。そうじゃないでしょ。…：アルフレドさんは？」

「凄く困ってる…：」

「でしようねえ」

ヴィナヘイムは足元の土を弄りながら、ぼそぼそと呟く。

「…：でも、現王の妹君様はアクルカ家に嫁いだでしょ。…：あの時だ  
って、ジャックさんは聖騎士だったし…：」

「だーかーらー！　そういう問題じゃないでしょ」

語尾を張り上げるクラリスに、ヴィナヘイムは拗ねた声を出す。

「：じゃあ、どういう問題なの？」

「あなたたちはそれで良いのかっていう：」

問い詰めようとした途端、凜とした声が両者の背に掛かった。

「——おい。休憩はもうすぐ終わりだ。点呼を取ってきてくれないか？」

「ストラトス教官：」

背筋を伸ばし武官用の制服を隙なく着こなす女教官へと、二人は振り返った。

クラリスは明るい色合いの瞳をストラトスに向ける。

「分かりました。取り敢えず一班だけでいいですか？」

「ああ。二班は遅れて訓練場に入ったからな。今休憩に入ったところかもしれん」

「：あ、私も手伝：」

ヴィナヘイムはクラリスに着いていこうとし：

「いや。いい。ベーカーは残れ」

教官の制止の声に止まった。

腑に落ちないながらも指示に頷く。

二人きりになったところで、女教官は口を開いた。

「：王からの勅命、ご苦労だったな」

「あ、はい：」

少女は生返事を返して、目線を泳がす。

「どうだったか？ イザベルは」

少し、意図が読めた。

教官は先日 of 勅の内容について尋ねたいが為に、ヴィナヘイムを引き止めたのだろう。

少女はあくまで落ち着いて語る。

「：…：大きな、国でした。軍国家として成り立っていて：十二軍師は誰も力を持っていましたし：」

「そうか」

ストラトスは近くの樹の幹に背を凭れ、空を見上げた。

「終戦に漕ぎ着けたのは、一重にお前たち聖騎士のお陰だろうな」

「…恐れ入ります」

「何を畏まる必要がある？ お前たちは多くの人命を救う重役をやり切ったんだ。胸を張れ」

言い切る教官に、何故か少女は申し訳なさそうに謙遜した。

「…でも、教官に借りたハイトの弓のお陰もありますし…」

「あの弓はお前にやる。…好きなように使うといい」  
ヴィナヘイムは目を見張った。

寧ろ、無理を言って叱られることを承知でいたのに、拍子抜けした気分だ。

「いいんですか…？」

「宝の持ち腐れ、だ。あれは士官学校の倉庫で腐るような代物ではない。ベイカー、お前が持っている」

「……はい」

僅かな間の後に、頷く。

正直なところは、弓が手に入って嬉しい。

けれど、それはあの宝武器に見合う人間で居続けろというメッセージでもある。それが少し重たい。

——責任が重たいなんて…感じたことなかったのに。

何か変だ。

エンシェントに帰って来てから、自分は心が落ち着かない。  
胸騒ぎ。底なしの不安が常に苛む。

——変なの。

重圧くらい跳ね返せなくてどうするのか。

思わず、不安が口を突いて出る。

「…教官…」

「どうした？」

「…聖騎士は…二人も必要なんでしょうか…？」  
奇妙な間が下りた。

地雷を踏んだのかもしれない。

けれど、告げたのはヴィナヘイムがずっと思っていたことだ。

ずっとアルフレドに守ってもらってばかりの自分は、聖騎士として存在しているのかと感じていた。

誰も咎めることはなかったけれど、形ない不安は漠然と心を侵食する。

木々のざわめきが空白を埋め、ストラトスは口を開いた。

「――お前たちは二つで一つの剣だ」

「……え……」

「一つの剣であり、聖霊の騎士だ。人間は元より欠けている。だからこそ人々は対に結びつく。……お前たちは二人でいることに意味があるんだ」

ゆったりと、しかし年輪の如き芯の強さを伴った言葉。

「ベイカー。いいか。お前たちは互いの攻撃の剣だ。同時に互いの防御の盾でもある。自分が相手の為に傷つくこと、相手が自分の為に傷つくことを避けてはいけない」

「………」

「お前が自分自身をどう評価しているのかは知らないが、対となる存在は鏡合わせだ。お前が自分を否定するならば、それは相手を否定しているのと同義だと心得ろ」

「……っ！」

――そんなこと、ない。

アルフレドは強い。否定なんかしない。絶対。

ヴィナヘイムはぎゅっと前を見据える。

女教官は少女の様子に満足そうに頷いた。

「……そうだ。良くも悪くも、一蓮托生を忘れてはならない……お前たちに必要なのは、それだと私は思うぞ」

「……はい」

しっかりとした返事をし、少女は歩み出した。

### 第三十一話 彼の意志（上）

王城。――綺麗に女中に掃除された部屋。  
エンシェントの姫の自室。

その入り口前で、所在なげな青年は目の前の人物を見た。

ふんわりとしたパニエ・スカートの薄桃色のドレス、腰まで丁寧に伸ばされた緩い巻き髪。頬は紅潮しており、目線は一点を見つめ続ける。

少女は身を屈めて、腰に手を当てた。

――絵に描いたような『それらしい』所作。

青年としては胸の悪くなる光景だ。

「遅いわ。アルフレド」

――エンシェントの国王の娘にしてたった一人の息女。王位第一継承者。テレザ・エンシェント・オーフェン。

彼女は拗ねているのに、待ちに待っていましたという喜びを隠せない顔をしていた。

やっぱり胸底が気持ち悪くなる。

アルフレドは静かに一礼した。

「姫様、何のご用でしょうか？」

丁寧な物腰とは反対に、口調は無然としており公私を混同しない役人的な表情を崩さない。

けれど、二人の温度差を少女はまったく気にしておらず

「そうだわ。用事があったのよ！ アルフレド、ついてきて頂戴」

――隠しきれない嫌な予感。あるいは予兆。

「…何処へ、でしょうか」

嫌々だとは表に出さずに、アルフレドは問うた。

「街よ！ 奥宮から出てきたはいいけれど、まったくエンシェン

トの王都を見ていないわ！ 下々の暮らしを見てみたいのだけれど」期待に胸を膨らませてます…と言わんばかりの瞳。

青年は溜め息を嚙下して

「…御言葉ですが、お姫様のお気に召すものは、何もないかと…」  
とういうか、何故自分が彼女の物見遊山に付き合わなくてはいけないのか。彼女付きの近衛兵や世話係も大勢いるというのに。

——面倒臭い。

…という内心の心情を悟られないように、あくまで事務的な顔を保つ。

「何よ？ 私に口答えをするの？」

——いいから引き下がれよ。

横柄な態度。

箱入り娘、深窓の姫君、世間知らず…そんな言葉がぴったり合う。

「いえ、滅相ありません」

もう一度礼をし、顔を上げる。

「…しかし姫様。外は危ないです。姫様にもしものことがあればと危惧するなれば、僕には貴女を連れ出すことは賛成しかねます」

——要するに、大人しく引っ込んでろ。

…という露骨な台詞を、何重にも包み込んで原型を留めなくした丁寧さと真摯さで告げた。

テレザは何故か嬉しそうに目を弓にすると返答する。

模範解答を読み上げる圧倒的な自信を持って。

「だから、アルフレドと行くんでしょう？」

「……………」

——勘弁してくれ。

そもそもアルフレドは、このテレザと言う少女を…姫だとか以前に人間として苦手なのだ。

どうにも、自分によく突っかかってくるというか、懐いているというか。

そして、どうしてだかヴィナヘイムには殊更に冷たい。



——気に入られているのはいいけど：

理由もなしに對の少女を毛嫌いする様は、見ていて不愉快だ。

目の前の少女はやはり目を燦然と輝かせ、青年の返答を待っていた。

無論、肯定してくれると信じきっている眼。

——……これだから：

自分を否定されたことがない、他社と比べられたことがない人間というのはどんな付け上がる。

むしろ、否定すれば彼女はこういった反応をするのかという事案も気にはなるが、それは自分の役目ではない。

——誰か言ってやってくれよ：

その『誰かさん』が現れるのが、いつの話になるのか定かではないが。

「：姫、僕は構いませんが、約束をして頂けませんか」

「約束？ いいわよ」

主導権は自分が握っていますとでも言いたそうな顔。

「まず：僕と常に共に居て、離れないでください。それから、王にきちんと外出の旨をご説明して承諾を戴くこと」

「お父様にはもう伝えたわ！」

少女の視線が僅かに青年の眼から逸れる。

——あ、嘘ついた。

アルフレドは確信した。

けれど、敢えて口には出さない。意地っ張りの姫と詰まらない口論をしても意味はないからだ。

「：分かりました。侍従を連れて参りましょう」

「駄目」

即、否定の声が来た。

「私とアルフレドの二人で行くの！ 分かった！？」

「……………」

おままごとに付き合わされている気分。

さっと内心が凍るのを自制で押さえつけて、勇めて冷静に承諾する。

「…分かりました。姫様」

「分かればいいのよ」

——苛つく。

午後からは騎士団の稽古に呼ばれていたというのに、台無しだ。最近、アルフレドは毎日再三呼びつけられてああだこうだと言われ続けている。

用事があると説明しても無駄だと、つい一昨日に悟った。

柔らかそうな、筋肉なんて全く付いていません、スプーンより重たい物を持ったことがありますという腕、思い切り掴んで説教してやりたい。

——勿論、しないが。

「では、行きましょうか。アルフレド」

「…はい」

小さく呟いて、彼は少女に着いて行った。

### 第三十一話 彼の意志（中）

もうすぐ夕時ということもあり、市場は活気づいていた。

食材を売る店、雑貨を売る店、軽食を売る店、この時間帯になるとテントを張り、客の呼び込みの声が絶え間なく反響する。

調味料と肉類の焼ける匂い、パンの出来立ての匂い。また、人々の雑多な生活臭。

眼を丸くして辺りをきょろきょろと見るフードの人物は、前を行く青年にぴったりと寄り添っていく。

その、青年の方が遠慮がちに告げた。

「……あの」

「何よ。アルフレド」

「歩きにくいんですが……」

纏れるように二人は歩いている。もしくは、一方の少女が体を密着させ過ぎている……と言わべきか。

これではまるで……

——恋人か……

いや、恋人だって公衆の面前であからさまなことはしない。

——俺が女買ったみたいなの……

ちらり、と自分の体に張り付くフードの少女——テレザを見る。

姫君たるもの、一般市民の集まる市場などには悪目立ちし過ぎる。目立たないように渡した顔を隠せる外套だったが、逆に怪しい雰囲気を出していた。

これでは、娼婦と勘違いされても文句は言えない。

——失敗したかなあ……

明日、聖騎士が売女と遊んでいたと噂が流れたら、どうしようかと思う。

別に市民の品評はどうでもいい。

しかし、ヴィナヘイムに根も葉もない噂が伝われば：

——失望されるかな……

今更に、姫を連れ出したことを後悔する。正確にはアルフレドこそが、連れ出された形なのだけれど。

本当に、面倒なことになったものだ。

しかも背後の箱入り御嬢様は、よりにもよって夕刻の市場を見物したいと言いつ出した。

「あ、アルフレド、あれは何？」

「はい？」

少女が指さした先を、緩慢に視界に捉える。

そこには、雑多に並ぶ食材でも異色を放つ、紅い物体。

「ああ。これは林檎ですよ。食べたことがあるのではないですか？」

「林檎？ …あの、白いの？」

——白い……？

アルフレドは不自然に感じたが、すぐに理解した。

「林檎の皮は赤いんです。この皮を剥けば白い身が現れますよ」

「う、嘘よ！」

姫は分かり易く狼狽した。

——やっぱり……

この世間知らずの少女は、食卓に出された調理済みの物しか食べたことがないのだろう。

それがどういうもので、どういう過程を得てきたか……全く知らないのだ。

——ぞっとしないな。

外套の裾を捲り、テレザは林檎へと手を伸ばす。

暫く手の内で転がし——唐突に赤い果実に爪を立てた。

「……ちよっ……！」

アルフレドの制止の声も聞かずに、彼女の爪は果肉に埋まる。冷や冷やするアルフレドの背後から、野太い声が掛かった。

「ちょっと？ アンタ、何してんの？」

「…？ 何よ」

「何よじゃないねっ！ あたしの店の代物に傷つけんじゃないよ！」

響く中年の女性の声。

おそらくこの食材店の店主か。

「何ですって…？」

怒鳴られたテレザは顔を真っ赤にして憤慨する。

——あ、やばい…

「す、すみません。代金払いますね！」

火花を散らせる二人の間に割って入り、アルフレドは確認もせず  
に紙幣を一枚取り出した。

積み重なる箱の上に紙幣を置き、テレザの手を取り走る。

「ちよっ…アルフレド！？ 引っ張らないでよ！ 私を誰だと…

…」

「いいから！」

人波を掻き分けて走り、二人は広場まで出た。

姫として育ってきた彼女は、全力で走ったことなどなかったのだ  
ろう。息を詰まらせて喘息みたいに激しく喉を鳴らす。

「姫…大丈夫ですか？」

言った瞬間に、きっと睨まれた。

「アルフレドっ！ どうして謝る必要があったの！？」

「…：あ、それは…：」

こちらの方が驚きだった。

まさか少女が、物の買い方さえも知らないとは…：

耳まで真っ赤にして怒るテレザに、アルフレドは言い聞かせた。

「姫様、市場では、物を欲しい時は貨幣と交換するのですよ」

「か、へい…？」

「お金のことです。場合によっては宝石でも構いませんが…」

アルフレドは掌を広げて、硬貨と紙幣を並べた。

テレザは一瞥しただけで、ふんと鼻を鳴らす。

「何よ、ただの汚い紙切れと石じゃない」

「…その紙切れと石を手に入れる為に、市民は働いています」  
少女の眼が見開かれた。

信じられない…という気持ちをいかにも表現している。

「貴女は今、お金を払わずに売り物を奪おうとした」

「ちよつといじっただけじゃない！」

少女の手には今も林檎が握られている。

赤い果皮には小さな爪痕。

彼女のことだから、きつと青年が白いと言ったことを確かめようと、皮を剥ぐつもりだったのだろう。爪などで綺麗に固い表皮が剥げるわけもないが。

「…しかし、人の物を傷つけようとした。林檎は傷つけられたところから腐っていくでしょうね」

——そもそも、腐ったものなんて見たことないだろうけど…

内心の呟きを無視してアルフレドは続ける。

「いいですか。人の物を傷つけること…奪うこと…盗人と変わリません」

「……っ！」

怒りばかりだった少女の顔に、羞恥が混ざる。

きつい言い方だっただろうかと、少しだけ反省して青年は続ける。

「…でも、知らなかったのなら無理のないことです。どうかこれから…」

「——恥だわ」

俯いたテレザの唇が微動する。

苦々しげに

「…恥よ。なんで私があんたなんか盗人呼ばわりされないといけないのっ!? 悪いのは先に教えてくれなかったからじゃない! 知ってたらしかなかったもん!」

「……………」

少女は辺り構わずに怒鳴り散らす。

周囲の人々の視線が痛い。

「姫……」

「私、悪くない。……から……謝ってよ」

「……え？」

「ちゃんと謝ってよ！ 私を不快な思いにさせたわ！ 当然よ！」

——おいおいおいおい。

顔面の筋肉が悲鳴を上げる。

ああ、作り笑いつてこんなに辛かったんだ。

——とてつもなくどうでもいい実感。

謝る＝悪いことをした時の詫びの礼。

当て嵌らない。

自分の考えに逆らって嘔吐いて詫びろと来た。

——落ち着け。

相手は世間知らずで子供な姫様だぞ？

しょうがない／しょうがない／しょうがない。

——よし、そのまま頭を下げる、俺。

やっと心の余裕が出来たところで、しかし少女は声を張り上げた。

「——あんな女なんかより！」

——え？

「あんな、愚民の生まれで、媚び売って聖騎士になった尻軽女よ  
り……！」

ほとんど悲鳴に近い叫び。

テレザが指す人物の該当は唯一人。

——待て。

誰が、媚びを売って聖騎士になった尻軽女だって——？

——落ち着け。

『それ』はまずい。やめろ、絶対、悲しむ。誰が？ 彼女が。や  
めろ、腕、止まれ止まれ。いいから止まれ。

「……っ……」

——息を洩らす。

手は施術剣の柄に触れたところで止まった。  
もう少しで、目の前の女を斬るところだった。

「…はあ…」

——息を継ぐ。

「アルフレドはどうして…」

——分かった。分かったから黙れ。

「私より…」

——いいから黙れ。

微笑の仮面を完全に取り外し、青年は氷の表で目の前の女を見ていた。

しかし——

「アルフ…？」

知っている声だ。

聞きなれた声。目の前の女みたいに小煩くない、むしろ心地よい  
声音。

振り返る。

「アルフ…どうしたの…？」

——やっぱり。

アルフレドの背後には、赤毛の少女——ヴィナヘイムが立っていた。  
た。

間の悪すぎる再会。

最後に会ったのは四日前か。彼らにとっては久しぶりの会話だ。  
赤毛の少女は普段どおりの黒く粗末な修練服に、紙袋を抱えている。  
買い物の帰り道だろうか。

対する自分の足元には崩れ落ちた女が一人。

「……あ…」

どこから説明しようか。

咄嗟に頭が真っ白になった。



おかしい。自分は何も咎められることはないはず。

——いや、

姫を殺そうとしたな、俺は。

姫を殺したら大切な少女が悲しむ。

大切な少女が悲しむことをしようとした…

「……っ…」

——最悪。

「アルフレド…？ その人……」

ヴィナヘイムがふと彼の足元を見やった時。

——突如その音は聴こえた。

### 第三十一話 彼の意志（下）

悲鳴。すなわち——慟哭——咆哮——呪怨——怨嗟。  
鬼哭。人ならざる者の叫び。

——聞け。

時に命令として、権威、脅迫を以て……時に懇願として。  
全て。全てが。

「ふ♪ ふ♪ ふん♪ んんー♪」

歌声。

甘ったるく鼻にかかった、腹の中の歌。  
おそらく、女の声。

歌声は楽しそうに。響く反響音。

——ならば。

ならばこの声は誰の声だと。

「んー♪ ふふ、ふー♪ ふん♪」

頭に直接入ってくる暴力。

音の暴力。

響き、落ちて、跳ね返って、飛んで、また返る——…

キケ

「きゃあああああああああああああ！」

——うるさいな。

誰だ。耳元で叫ぶな。

ただでさえ、こんなにうるさいっていうのに——

本当、うるさいよ。

俺は眠いんだ。

人の睡眠を邪魔するな。

——…？

そういえば…前にもこんなことがあったな。  
あれは確か…

「アルフレッドっ！」

はっとして、眼を覚ます。

目の前には見慣れた少女の姿があった。

「ヴィナ…ヘイム……」

少女は苦痛に耐えているかのような直視してられない顔で、けれど指し示した。

広場の中央。

さっきまで普段通りに立っていた、日常を送っていた者たちが地べたを這いずっている。

何かにもがき苦しむ様に。

毒薬でも服用した後さながらの阿鼻叫喚。

「これは……」

「——ん♪ ふん♪ ふんふ♪」

鼻歌が聴こえた。

同時に、耳鳴りが。

音波は耳障りな不快感を伴って二人を苛む。

アルフレッドは苦痛に耐えながら、歌声の大元を見やった。

広場の中央にある噴水。石造りのそれに腰掛ける細身の女。

弓を片手に、もう片手には緩く湾曲する——それは……

「弦…楽器……？」

女は瓢箪型ひょうたんのそれを弓の弦で弾く。

鼻歌と共に。

「あれが、原因か…？」

楽器の音色は魔笛にも劣らない禍々しさを放つ。

——戦慄。

ヴィナヘイムが立っているのもやっただというのに、無理に声を

搾り出した。

「姫……」

——姫……？

噴水に腰掛ける女へと、ふらふらと歩んでいく影がある。

「テレザ、姫……いけません……」

夢遊病みたいに覚束ない足取りで、少女は女の目の前に立つ。

瞬間、弓を引く女の口唇が笑みを描いた。

「——いい子ね」

ぞっとする声。

地獄の底の悪鬼の方が、まだ恐ろしくない。

女はこちらを睥睨すると、視線を逸らして立ち上がった。

テレザは彼女の背後に着いていく。

「いけ、ない……」

眼が霞む。

気を失う前の前兆。

今、意識が途絶えては駄目だ。

——しかし、彼らの願いもむなしく、両者の視界には暗幕が下りた。

>i30050—2343<

## 第三十二話 陽炎の行く先

「――起キテ…才願イデス」

やや訛った言葉遣いに揺り起こされる。  
ぼやけた視界が焦点を結んでいった。

「い…いたたた…つう…」

どうしてだろうか。頭が痛い、重たい。

何でこんなに頭が痛いんだろう…？

瞬きを繰り返すと、視界が鮮明になっていった。

「起キタ…？」

――途端に、こちらを覗き込む男の顔に突き当たる。

「うわぁ！」

「…！？」

少女の驚く声に反応して、男も目を丸くした。

少女――ヴィナヘイムは慌てて男の下から抜け出す。よもや貞操の危機ではあるまい。

「な、何？」

「？不起！…違ウ、ゴメンナサイ」

やはり特徴的に訛った口調で男は告げ、両手を顔の前で合わせた。  
どこかで見たことがある仕草。

背で束ねられた黒い髪に、やや低い鼻筋、一重の瞳。

「あ……」

ヴィナヘイムは男の容姿を見て思う。

エンシェントや、イザベルにも滅多に居ない黄色の肌色。

――もしかして……

「ターリエンの…人…？」

エンシェントの東部に存在する多民族国家・大連の特徴が見本的

ターリエン

に表れた人物。

ヴィナヘイムが彼の国の人々と会ったことは一、二度で、行商人として来ていた彼らの姿をちらりと見かけたただだったが…おそらく間違いない。

こんなに近くで見るのは初めてだ。勿論、話すのも。

しかし、何故異国民が自国のエンシェントでそれも起きがけの少女の顔を覗き込むという奇行を行っているのか。

「あなたは……」

「我、<sup>ヒョウ</sup>ト言イマス。大連ノ人間」

「ヒョウ…？」

拙いエンシェント語で男は語った。

物腰には真摯さが現れているが、見慣れない異国の人相の所為か胡散臭さが残る。

「――？？姓？ 貴女ノ名前ハ？」

「私の、名前…？」

少女の反芻に、男は首肯した。

見ず知らずの男に名乗る名前はないが…どうにも反射的に名乗っていた。

「ヴィナヘイム……」

流石に『ハンデット』は名乗らない。けれど教えたのは正真の本名だ。

「ヴィナヘイム…？」

変調した発音。

鸚鵡返しにした男の口調は何やら綴りがおかしいが、今は彼に語学の指導をする気にはなれなかった。

彼女は首を回して辺りを見る。

――それより……

「ここ…広場……」

「ソウ。貴女、倒レタ。劉緋ノ二胡ニ当テラレタ」

「に…二胡…？ 何それ…？」

「楽器。コンナ形ノ」

言うと、男――？は手で細長い形を示した。  
そして、胸に何かを抱えて、手を添える。

「……！ それっ！」

それは何かを弾く動作だった。

意識が途絶える寸前に『あの女』がしていた動作。

――思い出した。

買い物の後、小諍いの声が聞こえて、駆けつけるとヴィナヘイムはアルフレドを広場で見つけた。

何故か、テレザ姫はアルフレドに泣きついてて……

あの時、唐突に聞こえたのだ。

――あの、曲……。

曲と言えるのかさえ不確かだが、それ以外に形容の仕様がな

幾多の怨嗟の声と聞きまごう程の、物々しい旋律。

すぐにはっとする。

「姫……姫はどこ！？ それから、アルフレドがいない！」

「落着いて。ヴィナ……ヘイン、彼ハ、ココニ居ナイ」

「居ないってどういうこと？ さっきまでは居たのに……それから、

私の名前はヴィナヘイムですから！」

「彼、モウ行ッテシマッタ」

「どこに！？」

少女の詰問の声は激しくなる一方だ。

「ダカラ、冷静ニナレ。彼、姫ヲ追ッタ」

「姫を？ 姫は、だって……」

先程の二胡弾きの女に……

「――連レ去ラレタ」

聞きたくない言葉を、大連人の男は平然と言ったのけた。

――やっぱり……

あの奏者はテレザを誘い、連れて行ってしまった。

「我、劉緋……アノ女ノ、居場所、分カル」

「ほんとに？」

食いつかんばかりに問い詰める少女に、男は頷く。

そして決意を滲ませた言葉を紡いだ。

「アノ女、止メル為ニ来タ。…我ハ、アノ女、追ウ」

「追うって…当てがあるの…？」

「有ル」

はつきりと？は告げた。

真っ直ぐで透き通った黒瞳を少女に向け。

「――我ノ祖国。大連、ソコニ居ル」



### 第三十三話 糾弾を訪い

「はっあ……ああ、くそ……」

悪態をついて、青年は木の幹に背を凭れた。

――頭が痛い。

鼓動と、血の流れる感覚で一定の拍子を持って、彼の痛覚を揺さぶる。

がんがんと鳴り響く鈍痛を、首を左右に振って誤魔化した。

もう、日はとくに沈んでいた。

夜の森は危険が伴う。

それでも青年――アルフレドは立ち止まれなかった。

自分でもおかしいと思う。

――殺そうとした女を助けるのか……

その為に自分はこんなにも疲弊しきっているのか。

しかし、違えるな。

自分は姫を助けなければいけない。

形だけならば、騎士による姫の救出劇。御伽噺じみた筋書き――

現実にはそんな甘美な筋書きは関係ない。

あの女はヴィナヘイムを侮辱した。

最低だ。斬り捨ててやりたかった。現に斬る寸前だった。

……でも、出来なかった。

一瞬にして、現実にあったことみたいに、頭の中で女の体が袈裟斬りにあい、血が飛散するイメージが映った。

あの映像が浮かんだ途端に、同時にある少女の顔が浮かんだのだ。悲しそうな顔が。信じられないと眼を見開き狼狽える様子が。

――だから、剣柄に掛かった手は止まった。

ヴィナヘイムが、悲しむから。

テレザは、憎たらしく感じている女騎士の存在に命を救われたと

は、全く考えにも及ばないだろう。…きっと、これから先も。

――畜生…

不甲斐ない。闇雲に突っ走って来たものの、自らの選択の正しさを肯定するものが何も無いのだ。

だとしても周囲の人間からすれば、アルフレドは姫を城外に連れ出して、まんまと連れ去れてた聖騎士となるだろう。実際には齟齬があったとしても、即物的に言えばそういうことだ。

姫を連れ去られたままで王都に帰ったら、自分は堕ちてしまう。きっと聖騎士の肩書きも失う。身内は肩身の狭い思いをする。自分の誇りは消える。

――いや、そんなことはどうでもいいのだ。

唯一つ、あの少女が聖騎士の枠に一人で残されるというかもしれないという危惧が、我慢ならないのだ。

――過保護、か…

ヴィナヘイムは強かな精神と、技量を併せ持つ娘だ。アルフレドが心配する必要なんて、一寸もないはずなのに。

『――あたしが言う場所に来なさい。そうしたらこの娘は返してあげる』

流暢なエンシェントの言語でアルフレドに語った女。

弦楽器を手に、姫を引き連れて去って行った女。おそろく畏だ。

しかし、唯一の道しるべだ。

――今は信じるしかない。姫を返す可能性に。らしくない行動だ。

よっぽどのがない限りは取り乱したり、浅慮の行動を起こさない青年にしては随分と慌てた行動。

事後、目が覚めたらすぐに王都を発った。

今は約束の場所へと至る森の中。

雨が降りそうな空模様。僻地の気候は変わりやすい。今は良くとも

以後、どうなるだろうか。

足元を泥が汚す。背に担いだ聖剣が重い。

頭痛はまだ収まらない：でも進む。

――もしかしたら：

自分は、彼女の隣に立つ理由が欲しいのかも知れない。

彼女に魅かれている。

幾重にも自覚した思い。

彼女の隣に立つ理由を、取り返しに行く。

だからこれは、姫を取り返す為ではない。

そう思うと、心が軽くなった。

### 第三十四話 外界の風

「――可見的……（見えたわ……）」

黒髪の女は眩き、背に担う荷物を降ろした。

土で汚れないように、馬の鞍に布で包まれた荷物を掛け、周囲を見渡す。

数歩先は切り立った崖だった。

「疼痛雷打不？……（不変の痛み）……」

女が口にしたのはある物語の一説だ。

古くから伝わっている伝承――この溪谷で純潔の乙女が投身げを行い、竜神の怒りを治めたというもの。

文字通り、その身を以てして。

「根拠？？……」

そう。計画どおりだ。

彼女は出来ることをした。あとは彼らがどう動くか。

――いや、動かせる。……何としてでも。

女は崖から数歩退き、後ろへ振り返った。

雑多に生える木々の隙間に、生気のない少女が一人、ぼんやりと突っ立っている。

数時間前までは王都でアルフレドと行動を共にしていたテレザだ。

着ているドレスは見るからに上質な代物だが、森を渡って来たが為、ところどころに泥が跳ね、木の葉が引っ付いている。解れている箇所もあって、御世辞にも綺麗な服装とは言えないだろう。

女はおもむろに手を上げた。

指を弾く。

小気味のよい音と共に、テレザの眼が開かれた。

「あ……」

洩れる眩き。信じられない、といった。

少女は辺りを見渡し、驚き、自分の身なりの変貌に更に驚いた。

「何よ、これは……」

「起きがけに悪いけれど、あまり騒がないでもらえるかしら？」

女は黒絹のような髪を耳に掛け、流暢な言葉で告げる。

先程の独り言とは違う言語だが、詰まる様子もないし訛ってもいいない。

「お前……一体……」

テレザは警戒心を剥き出しにして女を見る。

対する女は慇懃に挨拶した。

服の裾をつまみ上げ、貴婦人と見紛う優美さで

「――失礼。私の呼び名は劉<sup>リュウ</sup>緋<sup>ウヒ</sup>。初めまして。御姫様」

「……お前は何者なの……!？」

いきなり大声が発せられる。

少女は、気が付いたら知らない場所で、目の前に知らない人物がいる……という経験のない出来事に混乱しているらしかった。

――騒がないでと言った途端に、コレだ。

「出乎意料死?? 好象……(思ったより馬鹿女みたいね……) ……」  
『お姫様』」

小馬鹿にしたように女が笑うと、少女は頬を染めた。

語る内容は分からずとも、皮肉げな笑みから感じ取る部分があったのだろう。

「お前! 何様のつもり……」

「何様? おや。可笑しなことを語るお嬢様ね。そういう貴女こそ、何様なのかしら?」

「……!」

テレザの顔は更に紅潮する。

怒りのあまり、言葉が出てこない様子だった。

女はなおも語る。

「ああ、そうね。『お姫様』だったわね。……親の地位に縋って生きてる人間のどこが偉いのかしら？」

「私を愚弄するつもりっ!？」

「愚弄? 私は事実を述べただけ。ねえ『お姫様』」

「……っ!」

楽しげに少女を苛立たせる女。

テレザはもう我慢ならないとばかりに女へと歩み近づいた。

警戒など皆無の、地団駄のような足取り。

「——この——……っ!？」

テレザが女に掴みかかろうとした途端に、女はするりと少女の視界から消えた。

実際は足を引いて横合いにずれたただだが、動物を目で追うことに慣れていない彼女には消失したも同然だったのだ。

テレザは体勢を崩し——その無防備な背を女に蹴り飛ばされた。

視界がぐるりと反転する。

「ひっ……!」

気が付いたら、目の前には深い溪谷があった。

覗き込む形で、半身を乗り出している。

「……危ないわよ。お姫様」

女は少女の背に硬い靴の踵を当てながら告げた。

自分が蹴倒されて踏みにじられる……という事態こそ夢にも予想していなかったのだろう。やはりテレザには現状が理解できなかったようだ。

「……な、な……」

口元や肩をわなわなと震わせ、顔面がひくつく。

——もし、女がもう一回自分を蹴飛ばせば、谷底まで真っ逆さまだ。

「……去死? 正面」

女は見下し、靴裏で彼女の背中をにじりながら呟く。

ぞっとしない声音。

「順番を間違えないのね、お姫様。貴女は私の言いなりにならないければいけない。従わなければならない……どう？　奉仕する側になった気分は？」

「……」

屈辱と羞恥に顔を歪めながら、テレザは歯噛みした。

「――返事は？」

女の冷徹な声。

「……」

靴の踵が背に埋まる、痛覚が染みる。

少女は苦渋の声を絞り出した。

「……う……ご、ごめんなさい……！　だから……は、離して、お願い  
っ……」

とち狂った音階の、ついさっきとは大違いの懇願の口調。

脊髄を責め続けられ、少女は冷や汗を滲ませる。

悔しさのあまり、ぎりぎりど嚙んだ唇からは血が出た。

「――そう。それで良いの」

女は満足そうな、それでいて婀娜っぽい笑みを浮かばせる。

滴る言葉は、毒液を連想させた。

「……貴女は大切な囃なのだから、ね」

### 第三十五話 信心と疑心

馬の背を撫でながら、青年は鞍支度を済ませていく。

彼のくすんだ色合いの黒髪は、夕闇の残光に紛れて赤く染まる。灰色の外套も緋の光に照らされていた。

青年——ハインケルは一息で馬の鞍に足を掛ける。

赤髪の少女を見やり、無表情に問うた。

「お前の相手の行方は知れてるのか？」

対する少女——ヴィナヘイムは振り返って、その人物へと顔を向ける。

東の国々によく見られる黒髪黒眼、やや茫洋とした顔つきの男へ。

「？さん……」

「アル程度ノ検討ハ、ツキマス」

？と呼ばれた人物は片言の言語で語った。

ハインケルは灰色の眼を細める。浮かんだのは冷笑だった。

「……大連は数度しか行ったことがない。しかも、オレたちが行ったのは西部の辺境だけだ。……大した指針にもならない」

淡々と、事実のみを述べる。

対する少女は首を左右に振り

「ううん。だとしても……あなたは頼りになるから」

「……本気で言ってるのか」

「勿論よ」

真っ直ぐに青年の眼を見て、真摯に告げた。

ハインケルはすぐに眼を逸らして、馬の手綱を引く。

「……行くぞ」

返事は小さく、短いものだった。

しかしヴィナヘイムは鷹揚に頷き、男へと頭を下げる。



「……さん。お願いします。私たちを姫の許まで連れて行ってください」

「我ハ構イマセン……謝々、小姐」

？も手を合わせて両名に礼を返す。

ヴィナヘイムは胸中の違和感を消せずに告げた。

「行きましょう。……テレザ姫を救い出すために」

——本来ならば、違う名を呼ぶべきだと。

時は数刻遡る。

「……王。テレザ姫が誘拐されました」

「……………」

ヴィナヘイムは玉座の前にいた。

玉座に腰掛ける王へと恭しく膝をつく彼女の横には、大連人の？の姿もある。

「相手の目的は分かりません……」

「——テレザは王城に居たはずだが……？」

面を伏せて、齒噛みをした。

少女は静かに頭を上げ、真っ直ぐに主を見つめ告げる。

「アルフレド・ハンデット・フェイルコールが姫を連れ出したようです……」

「……………」

王の表情が僅かに色を変える。怪訝と懸念の思いへと。

少女の言葉は——まるで彼が姫を連れ去ったような言い方。

実際のことはヴィナヘイムには分からない。けれど、街に下りた彼女に同伴していたのは間違いなくアルフレドなのだ。

——気持ち悪い。

「聖騎士がテレザを城下に下ろしたと？」

「：分かりません。しかし、私は姫と彼が共にいる姿を見ました：そして：」

「貴国ノ姫を攫ッタノハ、大連ノ者デス」

唐突に、？は口を挟んだ。

王は炯眼で異国人の男を睥睨する。

「？と言ったな。大連の者よ。：目的は何だ？」

「我ノ目的ハ、姫ヲ連レ去ッタ女——劉緋ノ確保。彼女ハ追ワレノ身ユエ、逃スコト、許サレナイ」

「：罪人か」

「：ソノヨウナ者デス」

暫し両者の視線が交錯し、王者が先に視線を逸らした。立ちすくむ少女——ヴィナヘイムへと。

「——聖騎士。お前はどうしたいのだ？」

答えは迷いなく

「追います。劉緋という女を。助け出します。姫を」

「一人でか？」

「彼：？と、土地勘のある者を連れて行きます。あくまで私の行動は『私的』な個人行動です。どうか酌量を。陛下」

「：もう一人の聖騎士はどうするつもりだ？」

鋭い詰問——遠まわしの責任追及。

——……。

内心の苦渋を吞み込んで、少女は告げた。

表面では、感情を一寸も露わにせずに。

「：真相がどうであれ、彼に非があり落ち度があったことは間違いないかと。：自業自得の男より、私は、姫の救出を優先します」

その台詞を口にした途端、何か大事なものを無くしてしまったような喪失感が彼女の胸を覆った。

——違う。

そんなことない。

自己矛盾に対する否定の一言を押しとどめる。

今、彼を擁護することは、後に彼自身の首を絞めることになりかねない。耐えて、あえて彼を貶めることさえも厭わない。それが彼の為ならば、少し『痛い』ことだって平気だと。

——だから、今は。

王は見定めるように、暫し？とヴィナヘイムを交互に観察していた。

「………」

やがて、決心したのか静かに開口する。

「…聖騎士」

「はい」

「…姫を…テレザを救い出して来い。必ず。必ずだ」

「…はい。必ずや。…私の忠誠は陛下と共に」

一息を溜め。

「定め——彼の世祖、ここに誓約せん」

一人で謳う条文は、ひどく空虚だ。

彼女は反響する自らの声音を耳朶に聞きながら、この場には居ない青年を思わずにはいられなかった。

心底で叫ぶ祈りさえ、ただ遠い。

——信じさせて。お願いだから。

——私を、もう裏切らないで。

## 第三十六話 独走の意義

剣帯が音をたてる。

疎ましげに感じて、長剣を背に担ぎ直した銀髪の青年は、吐息混じりに前方を見やった。

——さっさと、連れて帰る。

決意を留め、重い足腰に力を込めて斜面を上り切った。

「……はあ、……」

息を吐くと、上気した熱もすぐに霧散する。

「……ここ、か……」

今まで登ってきた道を振り帰り、省みる。

草木がちらほらと見える以外は、ほとんど岩石の山だ。傾度はさしてないが、硬い地面は生き物を拒絶しているようでもだった。

その中道程で、青年は立ち止まる。

岩山の斜面の所々にある大小の足場。中でも安定した広さを持つ場所。

彼が立つ背後には洞窟がある。

今は閉鎖された、鉱山の採石場の一つだ。

自国エンシェントの地の利を生かした主要産業は、鉱石の売買・交換貿易だ。

周囲の国々に比べ、小国家であるエンシェントが長年独立し続けてこれたのには、自然産業の影響が大きい。

戦の要は鋼であり、国力の要も資源であったからだ。

無論、その甘い汁を吸おうと攻め入る輩もいるのだから、一重に良いとは解釈できないのだが。

国力と等しい鉱山は数多あれど、その内で今も採掘を続けている場所はほんの一握りだ。

順当に人員と時間を割いて、緩慢なペースで作業は行われる。

ある程度掘り尽くしてから、次の場所へという風に。

しかし、この鉱山は落石事故が相次いだが為に早い時点で放棄された鬼門である。

人っ子一人居ない。

——だからこそ：

彼女はこの場を選んだのだろう。

王都での惨事からまだ一日しか経っていない。時間は綿密に過ぎる。疲労もやがては加算されていくのみのみとなった。

青年——アルフレドは踵を返し、洞窟へと歩みを進めた。

誘拐犯の示唆が正しければ、テレザ姫は確かにここに居るはずだ。

しかし、これは顕著な罠でもある。

姫を囚にして、アルフレドをおびき出し、後は煮るなり焼くなり：

：想像に難くない。

しかし。

——そうですか、で納得できないよな：

もう、引き下がるわけにはいかない。

仮にも自分の責任で一国の第一権力者の娘に危害が加われば、結果として首を切られるのは自分だ。

たとえ、助ける女が高慢ちきで嫌な人間でも。

——本当に、めんどくさい奴め……

内心で毒を吐きながら、アルフレドはひんやりとする洞窟の空気を感じた。

不自然なことに閉鎖空間でありながら、風向きがある。

風鳴りの音は地の底から吹いてきているような奥深さと、背徳を織り交ぜて煽りつける。

アルフレドは大した感慨もなく、すたすたと歩く。

自らの足音が反響して、喧しい。

何故か酷く、イライラする。

——死ねばいいのに。

底冷えする洞窟よりも、もっと暗影な声が、心底から響いた。

振り払い、進む。

どこからか、水音が聴こえる。

蝙蝠が羽音をたてて、暗闇に紛れる。

アルフレドはおもむろに背に担いでいた長剣を鞘抜き、上段から下段へと叩きつけた。

聖霊因子が光となって乱れる。

——冷たい光。冷たい、冴えた白銀の香りが舞った。

「……児戯か」

眩き、叩き潰したそれを見る。

肉片と化した蝙蝠はばたばたと羽を震わせ、そのまま固まって動かなくなった。

「隠れるのが好きなのか、この陰険」

洞窟に響く冴え冴えとした声。

応えるのは軽薄な笑声。洞窟内に木霊するひび割れた合唱。

「俺は今、虫の居所が悪いんだ：さっさと出て来い」

嘲る声は甲高く、響く。

アルフレドは舌打ちすると、拔身の長刀を一振りにして、串刺しになる蝙蝠の死屍を一振りで抜き捨てた。

勢いで壁に打ち付けられたそれは、一瞬にして乾いた砂塵と化す。

「妖術の類か……大連らしい」

言いながら歩き、何処からでもなく響く笑声に一喝した。

「さっきからうるせえんだよ!!」

途端、笑い声は止む。

代わりに、薄暗がりから人影が現れた。

輪郭が浮き彫りになった途端に、アルフレドは一足に駆ける。

刹那——人影に斬りかかろうとして……

「ひッ……ィ」

聞き覚えのある声に挙動を停止する。

姫、テレザの短い悲鳴。

「……………」

いつそのまま叩き斬ってしまおうかとも思ったが、自制して剣を下げた。

「…そこにおられるのですか。テレザ姫？」

素っ気なく問いかける青年。

少女の声は胡乱な暗闇から。

「た…助け…おねがい…！」

震えた、嗜虐性と擁護性を同時に煽る何とも『それらしい』声。アルフレドは無感情に問うた。

「お怪我は？」

「…助け、おね…」

——話にもならない。

舌打ちをまたもや自制で押し留め、暗がりにも声を放つ。

「…来たよ誘拐犯。要求を言え、とつとな」

先程と同じ笑い声が渦巻くと、次いで韻を含む高い音が響いた。

「——初めまして。いえ、正確には二度目かしら、聖霊の騎士さん」

「……」

あの時、広場で聞いたものと同質の声が投げかけられる。

間違いない。

——あの女か。

「…ああ。動かないで。貴男からは見えないでしょうけれど、何時でも私はこの娘の首を掻き切れるの」

女の言い分に誇張はないだろう。少なくとも、先程の姫の怯え様を鑑みれば。

「…お前の現状はどうでもいいよ。俺は手っ取り早く要求を言えといったんだ」

姫の体裁を全く歯牙に掛けず、アルフレドは問う。

女はさも楽しそうに答えた。

「いいわね。他人の顔色を窺わない態度が気に入ったわ。お望み通りこの娘は返しましょう…ただし」

声が固く、低くなる。

「代わりに貴男が捕らわれるのよ。聖騎士」

「…どういう意味だ？」

「貴男には大連まで着いてきてもらいましょう。それが交換条件」  
「どうして？」

底なしに無感情な青年の声に、女は僅かに嫌悪感を見せた。

「つべこべ言わないで欲しいわね。…今は来たら分かっただけ教えておきましょう」

相手の目的や思惑は考えても無意味だろう。

——大連まで、か……

「別にいいけど」

存外にさらりと了承し、青年は一步踏み出した。

女はアルフレドの対応に何を感じたのか、動く気配を見せる。

「…姫を取り返したら、どうとでもできると考えているのね」

「考えない方がおかしいんじゃないか？ 悪い芽を摘み取る善行にもなる」

挑発的に言って、アルフレドは口元を歪めた。

「…残念でした。私が貴男にあっさりとやられてしまう程、浅はかだと思わないことね」

対する相手の声には余裕がある。

アルフレドは目を細め、弧を描く口元で囁いた。

「確かに…それは残念だな」

剣呑な空気が漂う。

不可視であっても、否、不可視の中だからこそ如実に肌に感じる殺気が。

身構えた女は、しかし無抵抗な青年に沈黙を保つ。

最も最初に口火を切ったのは、蚊帳の外と化していたテレザだ。

「アル……」

「——呼ぶな」

氷点下の声で制止して、曖昧な存在に告げる。

「…で、あんたはこの姫をどうするつもりだ？ 王都まで無事に送



り届けて貰えないことには、どうしようもないな。交渉決裂か」

「大丈夫よ。この娘を操り人形にして王都まで帰せばいいでしょう？」

——…操り人形…？

疑問は訝しみへと変わる。

アルフレドが問う前に、女は告げた。

「『ホウワン』。…あなた達は施術武器と呼ぶのだったかしらね」

続けて

言葉ではなく旋律が響いた。

弦を弾く、二音、三音…

弾指に似た音と共に、人が動く気配がした。

覚束ない足取りで目の前に現れたのは、薄汚れた身なりのテレザだった。暗がりでも、少女の姿だけが浮き立って見える。

アルフレドは彼女の目つきに違和感を覚えた。

焦点の合っていない茫洋とした瞳。定まらない、夢遊病に似た出で立ち。

——操られている…？

操り人形の意味が分かった。

あの音色。

広場で弾いていたものと同等の、何か。

あの弦楽器。

——あれが、原因か…

人を操り、眠らせる…悪魔の所業のようだ。

だが、今はそんな幻想はいらない。アルフレドはよく分かっていた。あれは、聖霊因子の影響だと。

人を眠らせる、仮死状態にすることさえ、聖霊の眷属の力があれば十分に可能なのだ。

その応用として女がテレザを操ったとしても、不思議ではない。

——信じたくない話ではあるがな…

「安心して。この娘は私が責任を持って王都まで帰還させましょう」

不気味な台詞だった。

操った人間を思いのままの場所まで歩かせる。  
無論、姫が王都に無事帰る保障は欠片もない。

アルフレドは疑念を吐き捨てた。

「：信じろと言うのか？ 下らない」

「でも、そうね。：貴男には最初から選ぶ権利なんてないのよ」

「はっ、主導権はお前が握ってるって言うのか？」

「――そうよ」

女は鷹揚に告げ、弦を鳴らした。

饅飩な暗黒に響く音色。

目の前のテレザの両手が、ぎこちなく持ち上がる。

両の手を胸まで上げ、肘を曲げ、手首を返し、自らの白い首元へ――

……

「やめろっ！」

行動の真意が分かった途端に、アルフレドはテレザの手首を掴んだ。  
細い首を、自分で締め上げる諸手。

皮膚を撓ませ、爪が浅く表面を裂いて血が滲む。

もう一度、音が落ちた。

――途端、傀儡の糸が切れたようにテレザの腕は力をなくし、だらりと垂れ下がった。

少女の眼は相変わらず昏い。

「これで分かったでしょう。貴男のお姫さまの命は私の手の内。もし貴男が私を殺そうとしても、それよりも先にこの娘の命を絶つことが出来るから、下手な真似はしないことね」

「……………」

とてつもない厄介ごとに巻き込まれたことは、重々に理解していた。

けれど、それでも自分は事態を甘く見ていた。

実感する。

守るべきものがある時の、制約と足枷を。

アルフレドは今まで、何かに気を掛けながら戦ったことはない。

相方の少女にはそんなものは不要であったし、あっても煩わしがるだけだった。

しかし、今はどうだ。

――下らない。

どうしようもない無力感が襲う。

「…着いてきてもらいましようか。アルフレド・ハンデット・フェイルコール。…断るなんて無粋なこと、しないわよね」

「………」

心許なさや倦怠感、非力さを抱きながら、青年は黙しやがて口を開いた。

「…ああ、もう、どうとでもなれ」

女は暗がりでも分かる気配で、満足そうに頷いた。

### 第三十七話 語り手と

亡者の嘆きに似た音が、吹き荒れる。

風など吹いていないのに、ひんやりとした空気は確かに流動していた。

彼らは知る由もないが、ある青年と一人の女、一人の少女が数刻前まで居た場所でもある。

その洞窟に、彼ら——赤髪の少女と二人の連れは足を踏み入れる。

「一足、遅カッタ……？不起」

エンシエントではあまり見かけない民族衣装を着た男は、悔しそうに呟いた。

隣に立つ少女——ヴィナヘイムはすぐに言及する。

「？さん、それって……」

振り返った男は拙い言葉で説明する。

「彼ら、ココデ落合ッタハズ。：オソラク今、貴女ノ連れ、劉緋ト一緒ニ居ル」

「一緒に……どうということ？」

「……」

？は言いづらそうに顔を伏せ、申し訳なさそうに頭を垂れた。

負の所作には、悪い予感しかない。

二人の背後から新たな声が聞こえる。

「——おい、これを見ろ」

第三の人物——くすんだ黒髪の青年、ハインケルは視界の外で身を屈めていた。

彼の持つランプが、洞窟の壁を照らす。

昏い色合いの髪が淡く橙に照らされ、駆け寄った少女の面も照らされる。

「どうしたの？」

「……」

ハインケルは無言で足元を指さした。

元鉱山の足場は悪く、凸凹していて硬い。ごつごつした岩肌を灯りが露わにして、それが見えた。

ヴィヘイムは思わず呟く。

「…これ、テレザ姫の……」

視線を送る先には淡い桃色の薄布があった。

擦れてはいるが色合いも美しく、織り方も丁寧だ。元は上等な品だったに違いない。

しかしそんなものが、廃された鉱山に落ちていることは普通では考えられない。そもそも、ここは立ち入り禁止区域に指定されているはずだ。

すぐに合点がいった。

「ここを、姫も通ったのね。…きつとそうでしょ、？さん」

「…オソラク、ハ……」

曖昧な返事を返し、大蓮の使いは顎に手を当てた。

「ココデ、姫、渡ス約束ヲ……？ シカシ……」

「はつきりしたらどうなんだ」

呑み込めない様子で呟く男に、ハインケルが告げる。

「ハインケル…」

ヴィナヘイムが制止の意を込めて半身を乗り出すが、青年は構わなかった。

続けて

「隠し事はこの際、無しにした方がいいと思うんだがな」

「……」

率直な言葉と視線に、僅かに男の面持ちが下がる。

やはり、表情には謝りの色が見えた。

何かやましいことがあるのか。それとも、今は話せないだけか。

異国の使者だ。ハインケルがそう簡単に信用できないのも無理はない。

そして、それはヴィナヘイムも同じなのだから。

「…姫…」

少女は膝を着いてから薄布を取り上げて、見つめる。

僅かに鼻孔をくすぐる、甘い匂いがした。

彼女は腰を上げ、男に向き直る。

「？さん、確かに、ハインケルの言う通りかもしれませんが…せめて、何故アルフレドがあのだ…二胡の人と共に行動していると考えられたのかを、教えてくれませんか」

なるべく冷静に言うように勇めたが、彼女の声音は弱気に染まった。

男は、表情も硬いままに小さく話す。

「…：簡単。姫君、囧ニサレタ」

「囧…？」

少女の眉が顰められる。

一方、隣の青年は合点がいったようだった。

「…：聖騎士をおびき出すための、生餌か」

——生餌、という言い方に、ヴィナヘイムはぞっとするものを感じた。

肯定も否定もせずに、？は語る。

「アクマデ推測。劉緋、聖騎士ヲ手中ニ収メル為、姫、攫ッタ」

「…：じゃあ、姫は…：」

？は呼応して、静かに頷く。

「ココデ、引キ渡サレタハズ」

「…：」

アルフレドと姫を追って王都を出たものの、指針さえない中で、

？はこの洞窟を目指せと言った。

この場所が一番可能性が高いと言ったのだ。

しかし考えてみれば、何故彼はヴィナヘイムを件の場所へ導いたのか。

彼をそう思わせた理由があるはずなのだ。

誘導されているのか。

——でも、従うしかない……

ヴィナヘイムは洞窟の奥を睨んで、踵を返した。

「ここに誰も居ないなら、用はもうないでしょ……」  
しかし

——？

ふと、違和感を感じる。

じつくりと目を凝らしてみた。

「……え……？」

目の前にふわりと浮かぶもの。

白い、蜘蛛の糸のようなもの。

——何これ……

何かおかしい少女の様子に、？が咄嗟に声を掛ける。

「ヴィーナヘイン、ドウカシマシタカ？」

彼女は白ける気持ちに浸りながら、視線はそのままに返答した。

「……だから、ヴィナヘイムですってば。……そんなことより、これ……」

手繰るように静かに腕を伸ばすと、糸に指が触れる。

指先に痛みが奔った。

「つつ……」

ぴりぴりと微少な痺れが発して、思わず腕を引っ込める。

まるで静電気のようなのだ。それか、紙面で指を浅く裂いた時に似ているか。

外傷はないにしろ、あの痛み、感触。

——もしかして……

ヴィナヘイムは視認できる糸を辿って、歩みだした。

「……おい」

ハインケルが後ろ背に声を掛けてくる。

「この糸……どこに……」

「糸？」

疑惑の色を含んだ応え。彼には見えていないのだろうか。

暗闇の中でも白い筋が光となって現れている。

洞窟の出口に繋がっているようだった。

青年と男は訝しみながらも、少女の後ろから着いてくる。

やがて、外に出た。

傾斜のある岩山の一角。

見ると、砂利道へと一本の糸は伸びている。

歩み出し数メートルほど手繰ったところで、糸は唐突に切れた。

「…あれ…？」

どこにでもなく消失してしまったのか。

ヴィナヘイムは首を傾げてから、辺りを見渡した。

岩山といえど草木はある。鉱山として使われていた際の搬入口と道も粗末だが作られており、通行に不便はない山道ができあがっていた。

砂利が詰められた道の両端には、数本の樹が茂っている。

どれも痩せた樹だが、貧しい地に息づいている分は逞しさがあった。

その、木の根元

少女の眼は釘づけになった。

——そこには、

「……テレザ、姫……？」

擦り切れた洋服を身に纏った、探していた人物が居た。

後ろに続いていたハインケルと？も、驚きに目を丸くする。

「なんで…人質になってたんじゃ……」

思い掛けて、はっとする。

？は、アルフレドが劉緋という誘拐の主犯と共に居ると言った。

ということは、劉緋がアルフレドを無理に連行している…と考えた方が容易だろう。そう簡単に彼が強制連行されるとは思えないが、考えるに越したことはない。

ならば、残された姫はどこに居るのか。

——これじゃ、使い捨てじゃない…

唇を噛んで、姫の肩に手を掛ける。



「姫、テレザ姫、目を覚ましてください！」

触れた肩口からは体温が伝わってくる。少なくとも死んではない。少しだけ、ほっとした。

少女は希望を持って、抱き起す。

「姫、お願いです、起きてください！」

「……う……」

テレザの口から、呻き声に似た潰れた声がひり出される。

やつれてはいるが、元から栄養状態が良かったことが幸いしたのだろう、命には別状なさそうだ。

——どうしよう……

次はどうすべきか、近くの村まで降りて医者にかかるべきか。

いや、そのまえに……

「水をやれ、少しずつな……それから、あまり大きな声で呼ぶな」

思考を繋ぐように、ハインケルがヴィナヘイムの横に膝を着いて注意する。

少女は頷いてから、テレザの頭を膝に乗せた。

——水を……

ヴィナヘイムは担いでいた荷袋の中から竹筒を取り出す。

青年の指示通り口元を濡らしてやってから、身体を起こして水を飲ませた。

白い喉が嚥下する。

しだいに、瞳の焦点が合っていった。

「……あ、……」

テレザは何か言いたげだったが、少女に制された。

「姫、無理をなさらないでください」

「ここは空気が薄い。馬を置いたところまで運ぶぞ」

「分かった」

ハインケルが姫を抱き上げ、歩み出す。

残された二人も着いて行った。

「アノ……」

「…?」

それまで、啞然としてことの成り行きを見守っていた?が、思い出したように少女に問う。

「何故、姫ガココニ居ルト…?」

ヴィナヘイムは本当のことを話そうか逡巡した後、ありのままを告げた。

「…糸が見えたんです」

「糸…?」

「白い糸です。…あなたたちには、見えませんでしたか…」  
囁きで語尾を小さくすると、ヴィナヘイムは砂利道を下りながらに考える。

——あの、糸……

触れた時に感じた、あの静電気のような感覚。

あの痛みには、覚えがある。

——あれは……

間違いない、人為的な聖霊因子によるものだった。



た。

本当は、今すぐにも彼を追いかけたい。

しかし、姫をこのまま放っておくわけにもいかない。

今は、対の青年が無事でいてくれることを祈ることしかできない。

――…虚しい。

この時間が、一番物悲しい。

――会いたい。

無事を確かめたい。

「今の内に休んでおきなよ、ハインケル。…ずっと馬に乗りっぱなしだったでしょう。ただでさえいきなり着いてこいなんて無理言っちゃったんだから…」

「それはこちらの台詞だ。…お前こそ休んだらどうなんだ」

「………」

返す言葉のないヴィナヘイムの傍らで、もう一人の男も頷いた。

「彼ノ言ウ通り、貴女、少し眠ツタ方ガ良イ、思ウ」

「……はい…」

――確かに、今融通の効かない意地を張っても、何にもならないのかもしれない。

<sup>ヒョウ</sup>？の言葉に小さく頷いて、埃よけの上着を羽織った。

壁を背にして、蹲る。

――アルフレド……

彼は今、どこにいるのだろうか。

怪我はしていないだろうか、寒くはないだろうか、体調を崩してはいないだろうか。

過保護な親のようだけれど、やはり心配だった。

意識しまいとしていた孤独は、忙しさや慌ただしさに隠れていただけで、自覚してしまえな心中に深く居座る。

――ごめんなさい…

全て、彼一人に背負わせてしまった気がする。

それとも、自分の代わりに背負ってくれたのか…

なら、尚更に胸が痛い。

瞳を閉じて、膝を抱える。

真っ黒な視界を見つめている内に、不安な気持ちは自然と薄れ、だんだんと胡乱な眠りが訪れた。

「おい、…起きろ」

「……………」

肩に触れる感触に、瞼が自然と開いた。

ぼんやりとした眼前の輪郭が、焦点を結んでいく。そして――

「アルフ…レド…?」

呟いた問いかけには、ただ無情な現実が答えとなった。

目の前に銀髪の青年は居ない。代わりにくすんだ黒髪に鋭い目付きの青年が居た。

その事実には、胸が空虚な悲しみで埋まった。

「…ハインケル…」

「寝ぼけていないで起きろ。…お目覚めだ」

首を振って、不安の影を追い払う。

ヴィナヘイムは自らの頬をぴしゃりと叩いて、頭を覚醒させた。細長く息を吐く。

改めて小屋の中の様子を窺った。

ハインケルと？は、部屋の中央へと歩み寄っていく。ヴィナヘイムもその後に続いた。

先程まで床に伏していた少女が、目を覚ましている。

「テレザ姫…!」

ヴィナヘイムはすぐさま彼女に駆け寄った。

テレザの眼はぼんやりと中空を見ていたが、やがてもう一人の少女へと視線を向けた。

「……聖、騎士…」

乾いた唇で呟き、自ら半身を起こそうとしたところで、彼女は呻く。

「い…痛い…痛いわ…!! 体、が…」

「姫…?」

後ろに着いた手を痙攣させ、悲痛な顔持ちで姫は叫んだ。  
すぐに赤髪の少女は介抱へと回る。

「どうされましたか? どこが痛いのですか?」

「…体、全部…痛い…の…」

まるで子供のように同じことを反芻して言う。

ヴィナヘイムは、もしやと思った。

「…姫、失礼します」

そつとテレザの腕をとって、袖をたくし上げる。

すると、そこには青痣の集まりが点在していた。おかしい。先程、怪我がないか確認した時には無かったはずなのに。

「……打撲…?」

それにしても、これは酷い。

これでは腕一本上げるだけでも、責め苦のような痛みが襲うことだろう。

「痛い…痛い…嫌…」

ぶつぶつとテレザは呟く。背中にも痣があるのだろうか。ならば仰向けに寝ているだけでも辛い。

「姫、この傷は一体…」

「知らないわ…痛い…こんな…」

知らない…ということはつまり、彼女が意識がないときにつけられた傷ということだろうか。

「ハインケル…どう思う?」

背後で控えていた青年に問いかける。

「全身打撲だろう。こんなの、崖から突き落とされるかでもない  
とできない。…骨折の内出血の可能性もある。くれぐれも動かすな」

「…うん」

テレザは苦しそうに呻いている。見たいるだけでも痛々しい。

しかし、小屋には薬らしい薬も、包帯さえもない。

先程から、痣だらけの少女の体を見ながら黙していた？は、ふと顔を上げた。

「…ヴィーナヘイム、貴女、洞窟辺リデ、糸、見タ、言ッテイマシタネ」

「ええ。…ヴィナヘイムですけど…」

確かに見た。そもそも、その糸を手繰っていたらテレザの許へと辿り着いたのだから。

「モシカスルト…姫君ハ…劉緋ノ……」

「劉緋って…二胡の人…？」

思い浮かぶのは、王都の広場で笑みを浮かべながらに惨劇を巻き起こした張本人。

「エエ。彼女ノ二胡、ドウイウ物カ、御存ジデスカ？」

「どういうって…あの、変な楽器を弾き始めた途端、人がばたばた倒れて…それで……」

ヴィナヘイムは、はっとなった。

あの時、テレザは自ら二胡つかいの女に歩み寄っていくような奇妙な行動を起こした。

？は静かに頷く。

「アノ二胡ハ…貴方タチノ言ウ、施術武器ト同ジ…」

「施術武器…ってことは…」

腰元に吊られた刀剣に手が伸びる。

これと同じならば、その効果は――

「彼女は…聖霊因子の使い手なのですか…？」

「貴方ノ国デハソウ呼ンデマス。大連、『奏者』ト言ウ」

「どうして、彼女が施術武器を保有していることを、今まで隠していたんですか？」

責めるように少女は告げた。しかし、男の返事は簡素だ。

「劉緋、ドンナ施術ヲ使ウノカ、不明ダッタ。…分カラナイコト、憶測デ語レナイ」

「……………」

確かに、彼の言う通りだ。

しかし、ならば。テレザが今陥っている状況も、聖霊因子の反動なのだろうか。

そもそも、劉緋の二胡の聖霊因子の効果が分からないことには、話は始まらない。

――糸……か……

いつだったか、針金状の糸を巻き上げた、鋼糸という施術武器を使う者に出会ったことがある。あれは士官学校の頃だった。教官の中に特質な施術武器を扱う武芸者が居たのだ。

力量は小さかったが、自由自在に糸を動かす様には感心したのを覚えてる。

ならば、今回の糸も鋼糸なのか。

答えは否定。

糸の質がまず違う。あれは強度も太さも鋼糸に劣っていた。

――まるで……蜘蛛の糸みたい……

細くて、軽くて、風が吹いたら千切れ飛んでしまいそうな。

そこで、もしかしてと思った。

――まさかね……

ふと思ひ浮かんだ可能性を否定してから、思考を現実に移す。

こちらを見ている黒髪の青年と目が合い、彼はすぐに言い放った。

「これ以上の長居は無意味だ」

「麓まで降りるの？　でも今は姫をそつとしておいた方が……」

「安静にしても良くなる症状じゃない。それにこれ以上は、痛み慣れてない奴には拷問だ」

「……」

見やるテレザの様子は満身創痍だ。苦しみ藻掻く姿は見るに耐えない。

ヴィナヘイムは静かに首肯する。

「分かった。……すぐにでも行こう」

ハインケルが微弱な抵抗を受けながらもテレザを背負い、ヴィナヘ



イムと？は手際よく荷を纏めていく。

荷造りに屈んでいた少女は、耳に音を聞いた。

それは、ぽつぽつと降り出した雨音だった。

### 第三十九話 道連れの旅路

降り出した雨は、段々と地面を濡らしていく。

土に雨雫が染み込む臭いは一帯に沈みこみ、足取りさえも重くさせた。

埃よけの、薄手の外套の襟元を握り締める彼は、薄く澄んだ瞳を目の前の人物に向けた。

細身の女は数メートル先の山道を歩く。

この山を越えれば、国境は近い。

女の歩調に淀みはない。しっかりとした足取りで前に進む。

その女が、僅かに彼へと首を擡げた。

「あら、お疲れかしら？」

「……」

青年——アルフレドは応じない。

前を進む劉緋は毒々しい口唇に嘲笑を刻み、また歩み始めた。

女——劉緋はその細身な体軀に、肩紐から下げたれた漆塗りのケースを背負っている。

形と大きさから推測するに、あれがエンシェントの広場で弾いていた楽器だろう。どういう理屈かは知らないが、あの楽器には特殊な効果があるようだった。

詳しいことは分からないが、妖術じみたものだろう。あの楽器の音色は人の意識を乱す。己の体で実感しているアルフレドでも、未だに信じがたいことではあったが。

聖霊因子による怪異は納得できようとも、得体の知れない魔術や秘技の類には疎い。今の時代、誰もがそうなのではないだろうか。

雨は衣に染み込み、じつとりと重たさを含む。

「俺を連れて行って、どうするんだ」

不意にアルフレドは口を開いた。口調には隠しきれない疲労が滲み

出している。二晩の大半を歩きどおしだったのだから当然でもある。足腰に溜った疲労は加算され続け、今では腰に吊る剣帯さえ疎ましい。

対する先導者は驚くくらい涼しい顔をしている。それが余計に不気味でもあったが。

女は振り向かない。

「そうね……。何処に、ではなく、どうするか……。ね」

何が面白いのか、彼女は口元を吊り上げた。

足元はぬかるんで滑る。この一帯は土壌が赤土で滑りやすいらしかった。

女は雨よけのフードを被って、長髪を衣服の中に仕舞い込んだ。その僅かな動作にさえ一寸の隙も見い出せないことには、失望よりも感嘆が浮かぶ。

「ねえ貴方、聖霊ってご存知？」

話をわざと逸らしたでもなく、単純な話の流れで彼女は告げた。

——聖霊。

知っているも何も、彼はその存在に遭遇したことがある。

あれは、対の少女と元刺客の三人で短い旅をした時。今となってはもう、随分と昔のことのように感じれるが。

夢と現の間の出来事だ。自分自身、あれが実際にあったことなのか今でも確証が持てない。

「聖霊は万物の始まりよ。聖霊なんて大それた器が消えても、なお因子として存在する。存在が空気のように微かになっても、力だけは確固としている……」

劉緋は初めて振り返り、真っ直ぐに青年を見つめた。

「つまり、私たちが思っているよりも、聖霊因子は強大なものかもしれないわね」

「……あなたは何か言いたいんだ？」

アルフレドは訝しげに問うた。

目の前の女の目付きがずっと細まる。まるで鷹の炯眼を彷彿とさ

せる目付き。

「聖霊の騎士。：貴方、本当に何も知らないのね」

嘲りを織り交ぜた視線を送り、彼女はまた前方へと向き直った。

「無垢は幸せだけれど、無知は愚かよ。折角だから良いことを教えてあげましょう。：知ろうとしなさい。知らなかったことと、教えてくれなかったことを言い訳に使う人間なんて、ただの屑以下よ」辛辣に言い捨て、女は傾斜を登りきる。

「……」

青年も後に続いて、開けた景色を見渡した。

第一に感じたことは、ただ漠然と、広いということだった。

俯瞰する大地には、大河が横たわっていた。

河の水は黄色く濁って見える。地平線の端から端までを繋ぐ長大な河川だった。

劉緋はフードに掛かった雨雫を指先で払い、告げた。

「――ようこそ、我が祖国、大連へ」

ここまで来て初めて、アルフレドはようやく自分が国境を超えたのだと理解した。

## 第四十話 濃霧の行方

土壁で出来た家々はひしめき合う。

薄汚れた街の街道はどんよとした曇り空に覆われて、より一層鬱屈として見えた。

エンシエントでは赤煉瓦や白壁の家が多い。けれど大連の家はひっそりとしていて敷居も狭く低かった。

道の両脇に詰められた家屋は、幾つかが露天を開いている。

何かの肉を吊り下げていたり、青果の類を売っていたりするのはエンシエントと変わらないが、街道を進んでいくと、ちらほらと露天の角で屯<sup>たむろ</sup>する者達が見えた。

道をゆく青年――アルフレドは勘づかれないようにその様子を窺っていた。

半ば裏路地に入ったような暗い通りで、またも男たちが何かを受け渡ししている。金銭と膨らんだ麻袋を交互に受け渡しているらしい。何かの売買か、取引だろうか。

「…気になるかしら？」

ふと、前に行く女が問うた。

――姫を誘拐し、自らを国外に連れ出した人物。劉緋という名前以外は、全く素性が知れない女。

アルフレドはあえて無言で歩みを進める。劉緋は構わずに続けた。

「『光仙香』と言って、この国に古くから伝わる香草よ。痛みを麻痺させるので医学治療にも使われるけれど、まあ…彼らの目的はそうではないでしょうね」

僅かに嗤いを含み

「…簡単に言えば、幻覚薬よ。媚薬としても重宝されるけど」

「……………」

「何か言いたげそうね。…分かってるんでしょう？ 大連は、狂い

葉が蔓延してる腐った国でも思いかしら？」

劉緋は愉しそうに眼を細めて、青年の顔色を確かめている。

からかっているだけか、何かの意図があつてのことか判断し難い。

アルフレドはただ、路で幻覚剤を遣り取りする者たちを見ていた。合わない焦点、不健康に痩せ細った体、うわ言じみてぶつぶつと何かを言い募っている。相乗して、誰もが生きる屍のような見目だった。

ただ冷め切った瞳で見つめ、アルフレドは重たい足を引きずる。

何の反応も示さない彼に飽きたのか、劉緋は興味をなくしたように先導へと戻った。

以前、西の大国イザベルを訪れたことがある。

あの時は陛下の勅を受けて、対の少女と行ったものだが。

イザベルは軍国だ。列強の名に恥じない力と権威、そして統率を持つている。

過去、アルフレドの祖国エンシエントは大国イザベルと戦をしていた。長い間休戦状態だったそれを終戦へと導いたのは他でもない彼ら自身。

いささか他意のある協定だったが、結果としてエンシエントは余計な血を流さずに戦を終結させたことになる。

けれど。それは相手がイザベルであつたからだ。

相手国が聡明でなく、ただ領地の拡大と征服しか考えていない列強国だった場合、結末は違った。

相手の豊かさと余裕に救われたのだ。

しかし、東の隣国大連にはそれがない。

イザベルにあつたものが全くない。それは国境を超えて感じた最初の感想だった。

あるいは、西の国々が恵まれすぎていたのか。

大連は退廃した国だった。

生気がないとても表現するのだろうか、国としての在るべき生活や営みを感じないのだ。

エンシェントと大連は隣同士の国でありながらに、交流が乏しい。稀に大連の行商人が王都を訪れる程度だった。

それは歴史や言語、宗教の違いの所為もあるが、きっとそれだけではない。

きつと、大連は他国に関心を向ける余裕がなかったのだろう。酷く閉鎖的な国なのだ。

アルフレドは時折聞こえてくる異国の言葉を流し聴きながらに、頭を覆う埃よけを深く被った。

国境を越える際に劉緋に教えられたのだ。――異国人は盗賊に狙われやすいと。

辺りの人間が黒髪一色であるのに、彼だけ銀髪というのは確かに目立つ。――しかし。

彼女はこうも言った。異国人の体は高く売れるから……と。

アルフレドは、その一言を告げられた途端に感じた怖気を、今も払えずにいる。

どういう意味なのか問い質したくもない。

――つまり、ここはそういう国なのだ。

十分過ぎる程の答え。

肌の露出を避け、髪などは一切を覆い隠して異国を旅してもう二日経つ。

馬を借入れて乗っていた時はまだ良かった。けれど徒歩になってから疲労は溜まっていく一方だった。いつまで不毛な旅が続くのか、劉緋に問うても答えはない。

――王都に帰りたい。今すぐにでも。

ならば逃げればいいのに……とも思う。

しかし人質が居て、相手が人質の命運を握っているとなれば話は別だ。

それに、何故彼女がここまで自分を連れてきたのか、心底疑問に感じていたのも本心だった。

答え合わせが直接の死に結びつく可能性も否めない。だが、引き返

す帰路は絶たれた。

——なら、進むしかない。

アルフレドは痛む足を拳で小突きながら、自らを鼓舞した。  
対する劉緋は疲労の一欠片も見せずに、漆喰の箱を担ぎ直した。

「…霧が出てきたわね」

溢れる眩き。

言葉通りに、辺りには湿気を孕んだ、白く重たい空気が沈殿していた。

視界が曇る。

アルフレドは霞んだ眼を擦り、前方を見据えた。

その先には、先程までにはなかったものが鎮座している。

「……我回来了、我的瓶盖」

ふと、流麗な綴りが劉緋の唇から発せられた。

言葉を皮切りに、彼女は再び歩み出した。

深い、霧の中へ。



## 第四十一話 三頭の獣

霧深い視界は、数メートル先までしか分からない。足元を確かめながら前に進む。

ここは何処かの渓谷のようだった。どこかに水場でもあるのだろう。元々霧の発生しやすい土地柄なのかもしれない。――全て憶測だった。

坂道を下った二人の眼前には、高い塀が聳<sup>そび</sup>えていた。

大の大人の身長二つ分はあるだろうか。とてもではないが、登って塀の向こう側に降り立つことは不可能だろう。

劉緋はろくな説明もなしに塀沿いに歩んでいく。

ここが目的地なのだろうか。

アルフレドはあえて平静を装って彼女の後に続いていたが、違和感を色濃く感じていた。

――聖霊因子が密集している。

聖霊因子の使い手として感じるものがある。背中と腰に帯びた長剣が熱を持っていた。

自然環境が純粋な場所や、鉱山資源の豊富な場所、密林や洞窟でも聖霊因子は多い。ただ単に聖霊因子の密度の問題ならば、さして違和感はなかったと思うが、今感じている空気は何かがおかしい。

肌が総毛立つような、ひりひりとした緊張感だ。息苦しいくらいに立ち込めた、この気の方角性は何だろうか。

ゆったりと塀の周辺を進んでいた劉緋の足が止まる。

目の前には荘厳な門構え。

鉄柵が編み込まれたような、刺々しい作りだった。これもかなりの大きさがある。

「…着いて来て」

一言のみ告げると、劉緋は門を押した。

金属の擦れる嫌な音の後、鍵が掛かっている片番が開く。

身を滑らせる女に続き、青年も城門を潜った。

途端に、息が詰まりそうになる。

——なんだ、これ……

気持ち悪いくらいに空気が濃密だ。

一瞬で分かる。これは聖霊因子だ。流動しながら辺りに充満している。

因子が目に見えるのならば、羽虫の大群が如く犇<sup>ひし</sup>めき凝縮していたことだろう。

アルフレドは吐き気を抑えながらに、両足に力を込めた。それでもしないと足が震えそうだった。

目の前にぼんやりと輪郭が浮かぶ。それが石造りの建物だと分かるまで、彼が大山かと思つた程の規模だ。

——城塞。

第一の印象は、長城要塞。

視界の端から端までを覆う——壁、壁、壁。

壁に差し障りない程度の階段が入り込められており、建物内部に入れるようになっていた。

「ここは……」

意識せずに洩れた呟きに、劉緋は律儀に答える。

「大連の第一防御壁。第二と第三は崩れてしまったから、今残っているのはここだけね」

防御壁とは、防衛戦の際に身を守る障害のことだろうか。

「誤解があるようだから訂正するけれど、この壁が防ごうとしたのは他国の人間ではないわ」

「……戦に備えたのでは、ない？」

搾り出すように、勘探る声を出す。対する女の声には侮蔑の色があった。

「人戦が一番怖い、あなたたちの恵まれた国とは違ってね。大連では自然災害が一番の恐怖の対象よ。まあ、富国民に説いてもどうし

ようもないでしょうけれど」

素っ気なく返すと、劉緋は要塞の階段を登っていく。

人の手に造られたにしては長大で、強靱な壁。

アルフレドは本能的に感じた。

——まるで、聖霊因子の掃き溜めだ：

この場に沈殿している。流動すべき物が塞き止められている、河の流れのように。四肢を重たく引っぱり、息をすることさえ煩わしい。一歩々々、着実に疲労が蓄積されていく。

何の意味があって、こんなことをしているのか。

「聖霊の騎士。今からあなたを、ある人に会わせてあげる」

劉緋は歩みを止めようともせず告げる。

「ある人……」

「私の主。そして、あなたをここまで連れてきた理由よ」

彼女はそうとだけ告げると、また階段を登り始めた。

体に纏わりつくような空気を引き摺り、アルフレドは苦渋に顔を歪めたまま壁に手を着いた。

水音が響き渡る。

——途端、空間の陰から何かが飛躍する。

黒い影。跳ねてアルフレドへと襲いかかった。

「——ッ！」

咄嗟に肩に背負っていた剣を、鞘に収めたままに振り下ろす。

硬い手応えに手首を痛める。

階段の踊り場まで退避して、アルフレドは襲撃の元を見た。

黒い四肢ヒョウを持て余すのは——

「——？」

劉緋が、ふと呼んだ。

その言葉を皮切りに、黒影は女の膝下へと跳躍する。

音も無く床を蹴り、隙のない挙動でこちらを睨むのは、黒い猟犬。

犬の形を取っているが、どこか現実味がない。

狼のように牙が鋭く、耳を立てている。体躯は大きい。

アルフレドは痛み熱を持つ手首を押さえ付けながらに、他人事のよう  
に思った。

——あれは……

よく似た存在を、自分は何処かで見たことがなかっただろうか。

——たしか……

西の大国への旅路。

そう。目の前の獣に酷似した銀狼に、彼は逢ったことがあったの  
だ。

## 第四十二話 望んだ邂逅

朝も明けないうちから、赤髪の少女は廊下を歩んでいく。

その手には盆を抱え、部屋の扉を開けた。

静けさに埋まる部屋に踏み入り、なるべく物音を立てないように――と注意した先から、彼女は、既にその必要がないことに気がついた。

「お目覚めでしたか、姫……」

ヴィナヘイムの顔が安堵で満たされた。

彼女の視線の先には簡素な寝台に横たわる娘が居た。虚ろな瞳が部屋に入ってきた赤髪と黒服を見て、定まっていくな。

「……ヴィナヘイム・ハンデット・ベイカー……」

乾いた唇が名前を口にしました。

ヴィナヘイムは微笑で応じ、盆をベッドに添えられた机に載せた。

「お加減はどうですか？ ……どこか痛いとか、気分が悪いとか……」

「……頭が、少し、重い……」

脱力したまま横になった娘――テレザは乾燥した口調で言う。対する少女は柔和に

「勝手ながら、少し鎮痛薬を飲んでいただきました。その所為でしょう。すぐに良くなると思います」

「……ここ、どこ」

テレザはその眼を動かし、周囲を見渡す。

木目の目立つ木板で囲まれたこじんまりとした部屋だ。確かに、一国の姫には相応しくない部屋ではあったが、今はそうも言っていない。なかった。

ここは宿屋だ。

あの件の鉾山の袂に位置する小さな村。そこに今彼女たちは居る。昨晩は村に一人の医者を呼んで、テレザの容態も診てもらった。

医者いわく、彼女のこの傷は骨折や臓器を痛める程のものでないにしろ、長らく残る傷であろう。と。

姫の体に残留する傷痕を残してしまったことに、直接的な罪科はなくとも、ヴィナヘイムは苦い思いになった。

彼女だってそうなのだ。

女の子の体に残る傷だなんて、そんなものは嫌に決まっている。

今は鎮静薬の効果で痛覚を抑えているものの、耐性ができてしまつては効かなくなるかもしれない——とも医者は語っていた。

そして何より、自らの体に蛇のようにのたうつ痣を見たとき、姫はきつと酷く怒り、悲しむだろう——それが一番、辛いことだった。

一度喉を嚥下させてから、ヴィナヘイムは上下の口唇を離した。

「……姫。……あたしは……」

テレザが真つ直ぐにこちらを見る。

「……あたしたち、は……」

——言葉にならなかった。

ただ、伝えたいことではなく、義務的に口を突いたのは懺悔の言葉。

「……ごめんなさい……」

赤髪を垂れ、俯いた少女は人知れず拳を握った。

テレザはやはり、何の表情とも読み取れない面で目の前の臣下を見た。

「——知ってたわ」

色の失せた唇が、音を発する。

「全部、知ってたのよ。知ってて、やってたの」

「え……?」

——今、何と……

「出たって」

「姫……?」

「出たってよ! この役立たず!」

いきなりの金切り声に、ヴィナヘイムは眼を見張る。

テレザの顔には一瞬にして嫌悪が浮かび、それっきりそっぽを向い

た。

「……」

もう一度、拳を握る。

何度か口元を空虚に動かし、けれど掛ける言葉が見つからずに俯く。背を向ける。

「…それ、痛み止めの薬です…何かあったら、すぐに呼びつけてください。近くに、居ますから…」

それ以上は無意味なことと悟って、彼女はそうとだけ告げた。

姫は何も言わない。

やがて踵を返し、ヴィナヘイムは部屋を後にした。

ミミズクの鳴き声が木霊している。

ひんやりとした闇夜独特の冷気が辺りに積もり、沈殿している。

「こんな時でも、鍛錬か」

「…こんな時だから。だよ」

宿屋の裏の森のどこかで、木々の軋む音がする。夜天に細々とした星が散っていた。

ヴィナヘイムは背を向けたままに、囁いた。

「分かってたけど、辛いね」

木に身体を凭れ掛け、ハインケルはヴィナヘイムを見た。

彼女が腰に携える刀剣からは星の煌めきに似た螢火が浮かび、霧散する。その光にぼんやりと彼女の顔が浮かび上がった。

「あたしさ…人から恨まれるの、苦手なの」

独白のように、ポツリと洩らす。

「人から恨まれるのって、辛いでしょ。それに、あの、恨みを込めた目とか、あたし…どうしても駄目でさ」

「お前は、誰かに恨まれたことがあったのか？」

ハインケルは視線を天に上げた。

「今まではなかったよ。でも、いつ、何処の誰に恨まれて憎しまれるかなんて…分からないでしょ」

仰いだ天から、森の木々の陰を見る。

「それは、誰だって一緒だ」

「…うん」

「望んで恨まれようとする人間なんて、まず居ない」

「……うん」

間を置いた返事に、今度は僅かに苛立ちが込められた声が返された。

「お前の望みは、世界中の人間に好まれることか？」

「…どうなんだろう…」

人に嫌われるのが、怖い？

「…あたしは…」

「嫌われたくない。」

「できれば他人に嫌われたくないと思う、自分が嫌い」  
息を吸う。

「できれば温厚に過ごして、誰も傷つけずに生きていこうとする、  
自分がそれでも嫌い」

「…だって。」

あたしは騎士だから、敵が居て見方がいる。善悪という相反する概念がはつきりし過ぎている。

それは、中間色じゃいられないということ。

「…分かんないな…」

困ったような、泣きそうな顔を手のひらで覆う。

「…何でもできると思っていた。」

どこまでも冷血になれると思っていた。

けれど実際は、一人の女の子の一言で胸が抉られるくらいに傷ついて。

もっと強く、強く、強靱に、何事も跳ね返せるくらい強くなりたい。



けれどそうなった時、自分はヴィナヘイム・ハンドェット。ベイカーなのだろうか。それとも、中身がすり替わった冷血人間なのだろうか。

——強くなりたいと思う。

救える強さが欲しい。何かと争いぶつかりあう強さじゃなくて、力を使い方を誤らなければ、正しい方法で使えば、きっと望む方へ導いてくれる。

——そう信じていたい。

ヴィナヘイムの父は戦いのさなかに死んだ。

ヴィナヘイムの母はその父が居なくなった所為で心を病み、病に負けるように死んでいった。

彼女は両親が好きだった。

二人は人々の力のぶつかり合いと戦いの所為で死んだ。

——戦いがなければ、今も生きていただろう人。争わなかったら、失って、奪われることもなかったのに。

いつも思うその幻想は、けれど今の自分を省みると善悪の判断が難しくなる。

別の道を探すことは、時にどうしようもない後悔と郷愁を生むから。

「世界中の人に好かれることはできないよ。でも、争い争われる人間にはなりたくないな」

それが、少女の弾き出した答え。

「あたしは利益から生まれる戦が嫌い。名誉から生まれる戦が嫌い。本能から生まれる戦が嫌い。：憎しみから生まれる戦が嫌い」

腰の刀剣を抜き取って、柄を両手で握った。

鰐を目線まで持ち上げて、鯉口で鈴音を鳴らす。

「——だから、あたしが戦うの。他の誰もが戦わなくて済むように」

それが、最もな願いだった。

それが、普遍の想いだった。

それが、聖騎士になる時に誓ったことだった。

「あたしは…立ち止まっていられないの」

ヴィナヘイムはハインケルを見やった。

「こんなあたしに、着いてくれる？　ハインケル」

黒に紛れる青年は、暫しの沈黙の後に応えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7631t/>

---

howling spring

2012年1月13日21時55分発行